

第 1 章

国際と東方の時代

概要

日本における通信社の歩みは、内外の情勢を受けた創設と合併の歴史でもあった。最初の通信社は、1888(明治21)年に創設された「時事通信社」(現在の時事通信社とは関係なし)だが、中立的な報道機関というよりは、「政府の息のかかった御用通信社」(『通信社史』¹⁴_{ジベ})であった。90年には「新聞用達会社」という変わった名前の通信社が誕生した。「英国のニュース・エージェンシー会社」のシステムを取り入れた組織で、得意先は「新聞」、業務は「用達」(物品を納めること)という、通信社の機能を的確に表した名前でもあった。両社は2年後の92年には合併して「帝国通信社」(帝通)になった。

この時代、報道機関の多くは、専ら政党の言論機関として機能していた。「帝通」も例外ではなく、初めは大隈重信の立憲改進黨を代弁していたが、次第に社会的なニュースにも力を入れ、日清、日露戦争の報道では本領を発揮。後に発足した「日本電報通信社」(現在の「電通」とともに「帝通・電通」の全盛期を築いた。他にも軍事外交問題や皇室、相場などをそれぞれ専門とする、多くの通信社が生まれては消えていった。

日本に「ナショナル・ニュース・エージェンシー」(国家代表通信社)の必要性を説いたのは、1911(明治44)年に来日したAP通信の初代支配人メルビル・ストーンだった。その^激げは、AP東京支局長のジョン・ラッセル・ケネディにも引き継がれ、さらにはケネディの下で働いた古野伊之助をはじめとする日本の近代的通信社の先駆者の心を捉えた。古野はこの『証言 通信社史』を通じて、何度も登場する重要人物でもある。

「国際通信社」はこうした時代背景の下、14(大正3)年に誕生した。直接の契機は、米カリフォルニア州における日本人移民排斥運動の高まりだった。「日本の立場を伝え、

排斥運動に対抗することが必要」との機運が高まり、国家代表通信社としての役割を果たすという期待の下に「国際」が発足した。財界のバックアップもあった。

ケネディは「国際」の総支配人を任され、東京・葵町あおいちょうの自宅兼本社から差配した。海外から入電するニュースを翻訳して新聞社に配信する業務が中心だったが、第1次世界大戦（14～18年）中には新聞社に連日、新しい戦況を提供。関東大震災（23年）の際には、「国際」の大阪支社から第一報がロンドンに流れるなど、次第に通信社本来の機能を發揮するようになった。当時の葵町を知る人々の証言からは、黎明期の活気も感じ取れる。同時に経済界を対象に「国際経済通信」の配信を担っていた大阪支社の役割も無視できない。

「東方通信社」が上海に創立されたのも「国際」と同じ14年だったが、背後にあったのは、第1次世界大戦で敵国であったドイツの中国における反日宣伝だった。設立の経緯は全く異なるものの、日本が切迫する国際情勢に巻き込まれる中で誕生した、という点では相似している。「東方」は発足当初から日本の対外広報活動を担っており、中国各地に支局を置き、モスクワにも特派員を送った。

26年5月、「国際」と「東方」が合併し、初の新聞組合組織である「日本新聞聯合社」（翌年「新聞聯合社」と改称）が創立された。「国際」と「東方」に競合関係が生じたことも、合併理由の一つだった。この年の12月、大正から昭和に改元され、「聯合」は時代の荒波にまかれていく。

第1節 国際通信社

座談会

葵町事務所のケネディ

(出席者)

伊藤勝司

(元新聞聯合東部管区)

上村藤吉

(元国際通信新聞部)

山田清一郎

(元新聞聯合東部管区発送係)



司会 ジョン・ラッセル・ケネディの公的活動の大筋については、既刊の新聞通信調査会報や『古野伊之助』（1970年、古野伊之助伝記編集委員会）に掲載されていることは皆さん先刻ご承知です。これらの文献所載の話の大部分は国際通信社に在籍された方々の記憶が基調になっておりますので、今日は、これらの文献を補完する角度から、話をさせていただきます。

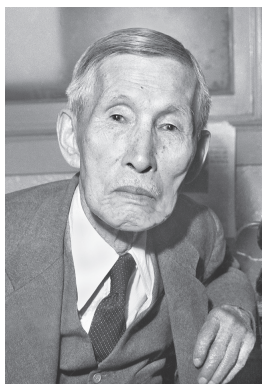
古野少年は明治42（1909）年、18歳のとき、銀座瀧山町（現在の銀座6丁目）のケネディ事務所を訪ねて就職した。ケネディはこのとき、48歳。事務所はビルの2階にあった。ビルは銀座並木通りの角にあり、隣が朝日新聞社であった。ドアのガラス戸には「佐藤・ケネディ事務所」と書かれ、そばに「米国聯合通信社（AP）東京支局」「ロイテル（ロイター）通信社東京支局」という金文字が浮かんでいたという。ケネディがAPの支局長、佐藤顕理がロイターの支局長だった。まず写真のことから。現在、同盟クラブには額入りの写真がかかっている。岩永（裕吉）、古野両同盟社長とケネディの3枚ですが、この写真のケネディさんは何歳くらいなのでしょうか。

山田 あれは第1次大戦終了後、赤羽橋にあった中鉢という写真館で撮ったものだ。60歳前だと思う。

上村 60歳前後だろう。

伊藤 大正10（1921）年ごろ、あの写真と同じ大きさのサイン入りを、葵町の事務所でもらった。大事に保存していたが、横浜空襲で焼かれて、今はない。大正10年ごろに写したものだと思われるので60歳の頃と思う。

司会 「国際」設立直前の大正3年2月下旬のある夕方、ケネディが山



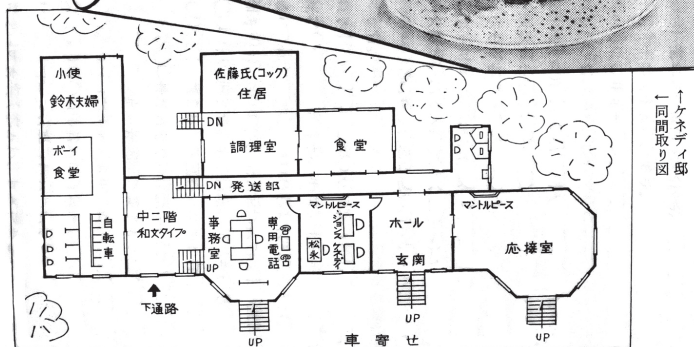
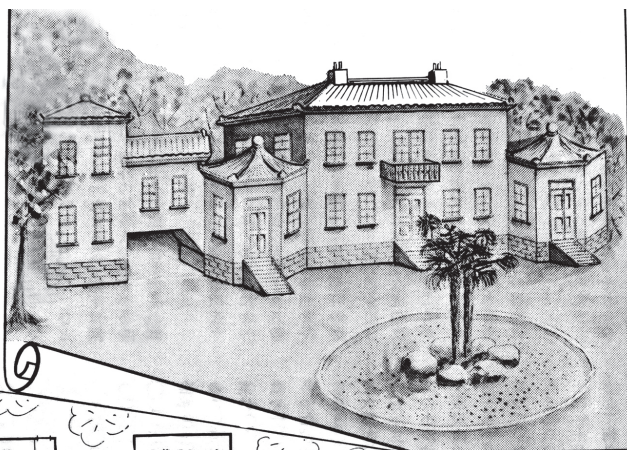
樺山愛輔=1951(昭和26)年
6月撮影



ジョン・ラッセル・ケネディ(『五風十雨』から)

城町(現在の銀座6丁目から7丁目あたり)の事務所をやつてきた。皆を集めて国際通信社が発足することを話し、本社は葵町に置くが、山城町は編集所として外電の送受信、取材、作稿を今まで通りする。現在の全員を新たに国際通信社の社員とする。佐藤顕理を編集長として一切を任すことなどを説明した。大正3年3月、合資会社「国際通信社」が創設された。代表社員は樺山愛輔、総支配人はケネディ。

当時内幸町1丁目にあったジャパントイムズの建物は、約200坪の土地に約30坪の木造2階家であつた。ケネディはこのジャパントイムズの一室を国際通信社の編集室とし、山城町の編集所をここへ移した。



ケネディ邸のスケッチと間取り図(新聞通信調査会報第42号=1966年6月1日発行=から)

『The Japan Timesものがたり』によると、内幸町1丁目4番地(日比谷公園の前)がジャパントイムズの出版所、同5番地が印刷所で、「左方に日比谷図書館、右方に日本勧業銀行を望み、正面は内幸町大通を隔てて日比谷公園を瞰下し」とある。今では日本プレスセンタービルの西側で内幸町2丁目である。とにかく2階建てで、公園が眼下に見えたというのだから、隔世の感がある。

伊藤 日比谷会館のあった所で、中日ビルの東側の駐車場となっている所ではないか。

司会 ここも狭くなって新館を建てたと記録にはあるが、それはどこだ

ろう。

山田 今の飯野ビルの角で、ここがジャパントイムズの新館になった。シベリア出兵の後、第1次大戦が終わった頃です。

司会 ケネディは明治45年に就職した東川嘉一（原注Ⅱ後に国際通信の経済部長となり、ロイター経済電報を主軸として大阪で経済通信を創始した）を通訊に連れて、馬車で取材に回ったというが、馬は白馬だった。

山田 そのころは直接取材をするような大きなニュースはそうなかったから、新聞に載っているのを翻訳するのが主な仕事だった。

司会 ケネディが馬車で取材した記事は残っていないだろうか。

山田 ロイターの記録の中にあるかもしれない。葵町事務所には黒板があり、横浜の出船と入船の日時が書いてあった。これは米国から手紙などが来るのを待つためで、新聞はニューヨーク・タイムズ、クリスチャン・サイエンス・モニター、雑誌はカントリー・ジェントルマンなどで、十数日分をファイルするのが仕事であった。

司会 ケネディ邸の図で分かるが、ケネディと机を並べていたメーベル・ジョーンズさんが大儀見由さんおおぎみゆの兄さんと結婚して、その長男が（1987年4月23日に「波切大王」で太平洋縦断ヨットレースに優勝した大儀見薫氏である）。

山田 当時、ケネディは随分手紙を書いた。その手紙を、われわれはチットブック（原注Ⅱ使いに持たしてやる時の書類送達簿）を持って届けていた。ヴァイカウント（子爵）誰それに…。

伊藤 僕もチットブックを持って、よく使いに行った。

山田 僕は渋沢（栄二）、岩永の両氏、樺山社長のところへ、よく手紙を持っていった。返事をもらってこいといわれた。岩永事務所待たされて、昼近くなったとき、水野さんがあんパンを持ってきて、「これを食べて待っていなさい。岩永さんは今書いていますから」というようなこ

ともあった。今の日生劇場の所に愛国生命というビルがあって、その中に岩永さんの事務所があった。そこへは随分使いに行った。

司会 ケネディが馬に乗ってあちこち高官の所を回って取材したと、『古野伊之助』には大きく出ている。白馬だったと。馬車小屋と御者の家はケネディ邸のどの辺りにあったか。

山田 後でできたガレージだ。道路からケネディ邸へ入ると、石の門があって、真ん中に花壇があり、それを自動車で回って行くと、玄関へ横付けになる。その花壇の南側にあった。

伊藤 大正6年以降のことですが、馬車小屋とか御者の家のことは知らない。おそらく、あったのはガレージでしょう。そのガレージは関東大震災にも焼け残り、ケネディ邸から持ち出した物を一時、置いた。内幸町の事務所に移るまで、われわれもそこで暮らしていた。

上村 大倉集古館があって、集古館の下の大倉門を入っていくと大倉（喜八郎）男爵の屋敷だった。後ろに江戸見坂という坂を背負っていた。それが今のホテルになっている。その横は大倉さんが持っている学校だった。その間の100坪ぐらいの所にケネディが住み、国際通信社の経済部がその同じ棟の隣にあった。

司会 現在の虎ノ門、今の共同通信会館のある場所が葵町電報局だったのだろうか。

山田 共同通信会館の一番アメリカ大使館に近い部分に、狭い電報局があった。つまりケネディ邸の前の（葵）坂を上りつめた右側に電報局があったということだ。

伊藤 この局から配達されたのは主として「コマーシャル電」（原注Ⅱ相場や市況など）で、一般ニュースは内幸町事務所宛てに来た。

上村 アメリカ大使館があったし、その裏の榎坂町辺りには外国人がたくさん住んでいた。だから葵町電報局は小さかったが外国電報も扱って

いた。ケネディの家にはロイター電報が入電するし、コマーシャルサーブスはケネディの住居の隣室で発行されていた。

司会 大正4年にご令息のウルセル君が亡くなった。

上村 そのためもあってか、ケネディさんは国際で働いていた少年たちを非常にかわいがってくれた。みんなを自分の葉山の別荘に連れて行ったりした。1週間以上の休暇を与え、もちろん日給を差し引いたりはない。往復の旅費を渡し、食事は現物給与であった。全員が交代で、のどかな避暑生活を楽しんだ。

伊藤 3、4回行った。葉山・一色^{いっしき}のケネディさんの別荘だ。葉山御用邸の近くで、当時は駅から馬車で行ったが、途中の景色が美しいので楽しかった。

上村 それは本当に温かい大正末期の人情そのものの発露だった。それにわれわれに注ぐケネディさんの視線は温情あふれるばかり。彼氏は日本語が駄目、少年たちは英語が駄目。それなのに終生忘れられないものを残してくれた。温情に国境はないとつくづく感じた。

山田 国際通信社が大きくなったのは第1次大戦が始まってからだ。おまえはいっつ入社したかと聞くと、鈴木俊久とか小林重一、渡辺純一君らは、ソナムの会戦の頃入ったとか、ベルダン攻防戦の時とか言って、欧州大戦の戦史と対応させていた。

司会 大正15年1月現在の国際通信の役職員名簿によると、社長樺山、専務岩永で、もちろんケネディはいない。本社は内幸町1ー5で、スウィート(W・E・L)が総監督、庶務課長石井衛太、会計課長石部幸次となっている。

上村 石部さんは早稲田の商科から葵町の国際に入ると、帳簿や伝票はすべて英語で書かされた。丸の内から外国人の公認会計士がやって来たが、英語でないとその会計士が読めないという理由からだった。

山田 大震災の前のことです。スウィートは熊本の高等学校の英語の先生をしていたのを辞めて、ロイターの通信部の方へ仕事を求めて来た。葵町の方はケネディが経済部の総監督をやっているし、内幸町の方はスウィートがいた。スウィートは外電のスケルトン³を平易な英文に直してタイプしていた。それをエクステンションと呼んでいた。日本人の翻訳係には、練達者も初心者もいたので、誤訳を防ぐため、そのエクステンションを頼りにしていた。

上村 ロイターの指定したチャータード・アカウンタントが丸の内にいた。その人の承認がないとロイター本社はケネディの計数報告を信用しなかったのかというふうに考えると、当時の私たちには寂しく感じられた。登録した英国人は本職の会計士で、その人に見せるために、支出伝票も最初から英語で書いた。石井庶務課長も、やはり英語で支出伝票を書いていた。

伊藤 石部さんは早大卒業後、勤めていた会社から鈴木某氏の推薦で国際通信社へ。経理専門の社員として大正8、9年ごろ入社した。

司会 昭和41年6月5日、大儀見由(葵町当時、二十二、三歳)、メーベル大儀見(メーベル・ジョーンズ)、児島(旧姓・稲沼)すま、会計の畑(旧姓・山田)ちよ、佐藤たま、山田の皆さんが日比谷会館9階会議室に集まった。

山田 その日は稲沼さんが中座したので、話は途絶えたけれども、おたまたまと言っていた佐藤さんが、ケネディの奥さんにもらったと言って、懐中時計を出して見せた。裏に「タマ・フロム・オクサン」と書いてあった。「これをもたらしたのは記念です」と言っていた。山田ちよさんはその話をして、全く記憶がなかった。児島さんと大儀見由さんだけが、割合覚えがよかったが、「懐かしいわね」という程度。「ケネディさんも急に死んでしまっ」という話があったが、その他、あまり詳しい懐旧談もなかった。

司会 ケネディは引退した後、葵町の自分の地所の中で仮小屋を作って、ファーストという広告代理店を経営したとあるが、それはどういうものだったか。

山田 震災で焼け残ったガレージは、構造が頑丈だったので、その2階へ住居兼事務所を乗せた格好だった。一見、山小屋風、震災直後にしては立派なものができていた。

司会 そこで広告代理店をやったというのは。

山田 遊んでもいられなかったからやった。ジャパンタイムズに載せるもの、アドバタイザーに載せる広告などを細々とやっていた。ケネディは石井衛太さんと若いとき、一緒に仕事をやっていたが、ニューヨークの新聞に日本の広告を載せるとか、そういうつながりはあったはずだ。

J・R・K(ジョイ・ローランド・ケイ)という社名で、電報の略語はジャルスケン(JARSKN)だった。死ぬまでやっていた。

司会 ケネディは1928(昭和3)年1月16日、東京で亡くなった。墓は青山墓地にある。東京都が管理し、共同通信社が世話している。妻エミリーは生まれ故郷のフィラデルフィアに帰った。

山田 奥さんが「エンプレス・オブ・ロシア」(横浜発カナダ行き)に乗って帰るとき、送って行けと言われて、佐藤さんと松永さんら5、6人で船まで行った。その年の春だった。

(新聞通信調査会報「第297号 1987年8月1日発行」)

(編集者注)新聞聯合社が1928(昭和3)年に発行した小冊子「せんりひりん千里比隣」は、スケルトンとエクステンションについて次のように説明している(21〜23頁、原文は旧字体、旧仮名遣い)。

世界の各地から日々多数の電報が来るので東京本社と大阪支社には電信機械が据えつけてある。それは中央電信局と専用線で接続してある。政治および一般的の外電は多く東京に来ることになっている。経済関係の電報は大部

分大阪へ入電する。電報は全部暗号ですかというお尋ねを受けるが、普通語のものもあり、暗号のものもある。普通語の電報はプレス(新聞電報)といって電信料が安くなっている。その代わり一切暗号を使うことができない。すべて普通の言葉で書くのである。ただしそれはスケルトン(原文ママ)といって次のごくほとんど骨ばかりの文章である

Havana after week conflicting rumors regarding governments intentions affecting export sugarcrop twas officially announced safternoon sugar commission will withhold threehundredthousand tons from unistates export quota stop disposal this stock be decided 11/6 expected beheld for sale europe

これでは一般の人には読み難いから、通信として発表する際にはこれに肉をつけ、血を通わせて普通の文章にエクステンド(原文ママ)する。そうすると次の如くなるのである。

◎キューバ糖三十万ト、棚上げ、キューバ政府発表

ハバナ六月八日(金) キューバ糖の輸出に関するキューバ政府の意図について先頃来諸種の風説が流布せられていたが八日午後キューバ政府は「キューバ砂糖委員会はアメリカへの輸出に割り当てたる砂糖のうち三十万トを棚上げすることになった」旨公式に発表した。しこうしてこの棚上げ糖をいかに処分するかについて来る十一日(月)に決定を見るはずであるが、多分ヨーロッパ向け割当として手持ちされると予想されている。

社を「お店」といった時代

山田清一郎(元新聞聯合東部管区発送係)

大正12(1923)年の関東大震災が起こるまでの赤坂葵町^{あおいちょう}辺りは、霊南坂を隔てて、アメリカ大使館、大倉喜八郎邸、大倉高等商業学校(初

日本財団ビル

特許庁

商船三井ビル
虎の門
三井ビルディング

虎ノ門

三会堂ビル

JTビル

共同通信社
虎の門
虎の門病院

アメリカ大使館

虎ノ門ツインビルディング

金刀比羅宮

オークラ東京

大倉集古館

東京メトロ有明線

北

めは大倉商業学校)、東伏見宮邸^{ひがふしのみや}など、ゆつたりした敷地にそれぞれの趣を凝らした家が立つて静かな一角だった。

ケネディ邸は大倉商業学校と集古館前広場の間にあって、木造ながら堂々とした洋風2階建ての家で、明治風を残していた。第1次世界大戦の勃発とともに、内幸町の新聞通信とは別に経済通信⁴がこの一室で始められたが、国内の株式、商品市場や銀行、商社の業務開始前に海外市況を知らせるため、朝の7時から全員が出社し、英文タイプの音が室内に充滿して活気ある光景をみせていた。

大正7、8年ごろは、欧州戦線も終結段階に入り、物価高とはいえ、国内は戦火を遠い対岸の火事とみて、落ち着いた明るさが漂っていた。この事務所の玄関脇には「Reuters Telegram Co. Ltd.」と2行、その上に「ロイテル電報社」と1行に書いた真鍮しんちゅうの看板が掛けてあり、一切の事務、人事管理はケネディの秘書・松永あさ子という中年の婦人が当たっていた。

彼女は社とかわず、「お店みせ」と言ったり、タイプライターをマシンと言ったりしていたが、大正時代はこれが一般に通用していたと思う。大

正8年ごろから、社員数も、通信販売者に比例して増加し、震災当時は男子社員10人、女子8人、配達ボーイ10人くらいになっていたように思う。

大正8年ごろ、初めて邦字タイプライターが売り出された。そのタイピストとして男子の社員が入社した。黒の紋付きにはかまという一見壮士くずれふうの片淵源太という男であった。この男が入社してから家庭的な雰囲気は崩れ始め、米騒動などに刺激されてか、賃上げ要求の声が上がリ、この男をリーダーに若手社員の間にストライキが決行された。配達ボーイは十三、四歳の少年で、単に2、3日お休みということで自宅に待機させられ、若手社員は結束を固めるため浅草の活動写真見物で2日ばかり過ごした。

この間、経済通信は1人のボーイが社側から呼び出され、ケネディの自動車運転手を案内して各購読者に配達されたので、大した影響はなかった。しかし、ストライキの収拾はケネディ、松永両氏ではできず、内幸町から古野伊之助氏が呼び出されて交渉に当たらせられた。そして3日目に妥結した。ケネディの部屋で、古野氏の発声で万歳を三唱して終わったが、当時、古野氏はまだ26歳ぐらい。グレーの服がよく身について、葵町の若い社員に比べて、老成した風格が備わっていたような印象を受けた。

このストライキ後、ケネディは従来にも増して、古野氏への信頼を深めたようで、一方、松永氏はこの後2、3カ月病床に就くありさまであった。

欧州大戦の終結、講和会議、欧州経済再建など、経済通信も初期の相場だけの通信から次第に、海外の政治経済動向の通信が要望されるようになる。すると、従来の葵町事務所のような家庭的組織では、到底時代の要望に即応できなくなった。

これに対し、大阪にあつて関西財界からも信頼されていた東川嘉一氏が、新人を続々養成、経済通信に密度を加え、大阪が外国経済通信の本拠となった。この本拠は新聞聯合を経て、同盟通信の初期まで続き、昭和13年ごろ、膨大な蔵書とともに東京に移された。東川氏は新聞聯合発足後、数年にしてこの世を去った。松永氏も新聞聯合発足間もなく退社した。

〔新聞通信調査会報〕第45号 1966年9月1日発行



前列はジョン・ラッセル・ケネディ(右)と岩永裕吉。後列は古野伊之助(左)と結束武二郎＝1923(大正12)年冬、内幸町の国際通信本社前で

談話

国際経済通信の初期

1963（昭和38）年3月6日
杉田才一（元新聞聯合横浜支局長、元同盟通信庶務部長）

僕が国際通信社へ入ったのは大正4（1915）年だったと思う。そのころ国際にはジョン・ラッセル・ケネディのほか松永あさ子、タイピストのグリーンなんて人がいた。僕は山下岩吉君が辞めた後に入った。ライター東京支局の看板も掛けてあったが、欧州大戦の勃発で外電が盛んに入ってきましたよ。

僕は学資稼ぎの腰掛けのつもりで入ったんで、その時、日本大学の法科にいた。しかし昼働くことになったので、夜学に切り替えた。仕事は英文タイプのほか雑用も多かった。まあスクールボーイというところでしょう。

大正6年に経済通信が始まったが、第一報を東京で打ったのは僕だよ。内心では大したものと思わなかった。ところが、間もなく綿花で16軒ぐらいの読者ができた。通信が刷り上がると自転車で配達するんだが、兜^{かぶとちう}町界限の株屋、金物屋などの読者勧誘にも出掛けた。人力車で出掛けるので、相手になかなか優待されたもんだよ。兜町は田舎者で駄目だったね。「こんな高いもの（1ヵ月100円）はとても取れない」。山一証券など3軒が取っていたので、「必要なときにはそこで見るからよい」などと言われたもんだ。そのうち金物通信の読者が5軒ぐらいできた。綿花の15軒とこの5軒が東京の経済通信の基本となった。

大阪では東川嘉一さんがやっていたが、その大阪から小松半次郎という人が応援にやってきた。僕より10歳か15歳上で、辞めた後、メリヤス屋を始めた。綿花が東京で余計に取れたのは時間を争う関係上、東京の

支店も取るようになったからだ。

そのうち僕は内勤専門になったが、高須、山本政常、伊藤勝司の3名をボーイとして入れ、配達に使った。高須はすぐ辞めた。読者がだんだん増えて80軒ぐらいになったときには、上村藤吉、山田清一郎とその兄さんを増やした。山田は兄さんを入れるので、ついに入れたわけだが、その頃、尋常小学校の1年生か2年生だった。

横浜支局開設

大正9年10月ごろ、横浜へ支局を開設することになって、僕は横浜へ行った。支局は山下町3番地の弁護士事務所の奥の2室を借りた。本社には女性タイピストが大勢いたので、そのうちの1人を連れて行き、松本兼吉が横浜から東京へ通っていたので、これを横浜詰にした。これは配達の元締めで、他に5人いた。社員は石井衛太の推薦による曽我勇弥と鶴沢鐸庵の2人。それに僕とタイピストという陣容だ。

横浜の読者は12軒取れたが、愉快なことがあった。横浜正金銀行^{しょうぎん}の本店に取らせようと思って半年も粘ったが、どうしても取らない。うちの通信の読者でドイツ人のカツツという男がいた。為替ブローカーで、うちの通信を見て売買をしていた。為替相場の大暴落の時、正金で大きい買いまくったのだ。ところがうちの通信を取っていない正金は、為替相場暴落の情報を知らないで大損害を被った。

驚いた正金は為替課長が僕のところに飛んで来て、通信を申し込んだ。しかし、僕は売らないと言ってやった。作戦があったのだ。これをチャンスに生糸通信も抱き合わせで取らせようと思った。困った正金は本社⁵のケネディに直接申し込んだが、ケネディは「横浜は杉田に任せてある」と相手にしないで突っぱねた。ケネディという人はそういう点、立派

だったね。それでついに二つとも取るようになったよ。

その頃、ジョイ・ローランド・ケイという広告会社の支局をケネディがやっていて、僕も手伝っていたが、そこでアダムス、オズボーン、コリガンの3人が仕事をしていた。彼らは実によく働いた。僕は、使うにはアメリカ人がいいなとつくづく思ったもんだ。

大正10年、経済界の不況から七十四銀行の没落などがあり、生糸相場や株式は大暴落、軍縮などの関係でニューヨーク株式も大暴落を告げた。大正12年には関東大震災で横浜の支局も倒壊、焼失し、僕の本牧の自宅も焼けた。幸い人間は皆無事だったが、仕事の方は大変だった。

生糸市場は壊滅し、一時、神戸へ避難した。生糸市場を失うことは横浜としては致命傷なので、関係者は猛烈な復讐運動を起こし、三井物産の支店長を神戸に行かせたりした。半年後には半分戻ってきたが、大震災を機会に神戸にも生糸市場の基盤ができた。生糸通信の方も一時、半分に減ったが、間もなく元に戻った。僕の横浜在住は17年間に及んだが、その間、50軒ぐらいの読者をつくった。

震災後、横浜支局は太田町の十五銀行ビルの3階を借り、社員も50人くらいになった。その後、本町に2階建て約50坪の家を借りて移った。大正14年には商業通信社の支局を買収、昭和2年には横浜通信社を合併した。

その頃、東川さんのアイデアによる組合通信というのを始めた。これは輸出商の組合を相手に、生糸通信をまとめて取らせるという方法である。この組合の中には仲買商組合、小輸出商組合、内需関係の組合があり、今まで6軒6千円、つまり1軒千円であったものを、輸出商組合に6千円というふうにしたものである。昭和7年ごろだろうか、電通の割り込みが激しくなったので、防止策でもあった。僕はだいたい前から、古野伊之助さんに群馬県の機業地に支局を開設することを献策したが、な

かなかウンと言わなかった。それが昭和8年によく実現し、桐生、足利、前橋に支局を開き、僕はその方もやった。

そのとき、桐生支局で使い込み事件があって閉口した。支局にいたある男が通信料1万円を社に入れないで、みんな飲んでしまった。大変なやつだったよ。その頃の1万円と言えば大金だからな。

社屋の新築

昭和12年の春、僕は久しぶりに同盟通信本社へ帰り、庶務部長をやらされた。庶務時代、一番大きな問題は社屋の新築だった。昭和16年に、現在の日比谷会館のある場所へ新築することに決まったんだが、当時3万円以上の建物を造るには臨時資金調整法による許可が必要だった。審査をする委員会に大蔵、商工、農林、日銀からそれぞれ委員を出している関係から、各省の資金課長に了解を求めなければならなかった。

そこでまず大蔵省から始めた。舟山(正吉)課長は反対しないと約束してくれたが、迫水(久常)課長が承知すればという条件付きだった。僕は迫水には初めて会ったんだが、あの大目玉をグツと開けて僕の顔を見ているんだ。僕は1時間ぐらいしゃべり続けたが、その間一言も言わない。話が分かったのか分からないのか。僕はすっかり不安になった。ところが僕がしゃべり終わって一息すると、「分かった、やれ。大蔵省に関する限り応援する」とまるで大臣のようなことを言われて驚いてしまった。ホッとして「ありがとうございます。お願いします」と頭を下げると、「喜ぶのはまだ早い。商工省の辻課長は難物だから、なかなか大変だぞ。日銀と農林は僕から言ってるから辻は君が説伏(せつぷく)したまえ。商工省が常盤橋内(とぎわはな)にバラックを新築する申請書を出したとき、日銀が反対してできなかったことを根に持っているから、なかなかウンと言わないかもし

れんぞ」と注意してくれた。

大急ぎで車を飛ばして商工省へ行ったら、もう11時50分になっていた。辻課長はどこかへ出掛けるところで、スプリングに手を通そうとしていた。「辻さん、ちょっとお願いがあります」と名刺を出すと、「何の話だ」と言うので「バラック新築について」と言うのと、案の定、「何、新築だって今、僕は出掛けるから時間がないよ」「いつ伺ったらいでしょうか」「今予算がないから駄目だよ」と、けんもほろろに言い放って、スプリングに手を通した。僕は一生懸命だ。「今時間がないなら、明日でも明後日でもお会いしたいんですが」。「駄目だ」と言って彼は2、3歩、歩きかけた。

僕はこの機会を逃しては駄目のような気がして、思わず「待て！」と怒鳴った。「お前、ケンカ売る気か」。彼も興奮して戻ってきた。四、五十人の課員がびっくりして2人を見ている。もう僕も後へは引けない。「ケンカを売るつもりはないが、あなたが問題を取り上げようとしなからだ」と大きな声でやり返した。僕のけんまくに閉口したのか、とにかく2人とも腰を下ろし、それから僕は同盟がいかに新築を必要としているか、そして時局下、同盟の仕事がいかに大事であるか、政府と同盟の関係がどんなものであるかなど、口を酸っぱくして説いたが、どうしてもウンと言わない。1時間半ぐらい粘ったが、彼の機嫌は悪くなる一方だ。

これはとても手に負えないと諦めて、今度は次官室に飛び込んで陳情した。次官は辻課長へ電話してくれたが、効き目がない。そこでさらに大臣のところへ行って陳情、大臣からの電話で辻課長もようやく観念したらしい。次の委員会で無事通過した。

こうしてやっと建設に着手したが、それからも資材確保に苦労したり、警視庁に規約違反で叱られたりして600坪のものができ上がったが、

予定より2カ月ぐらい遅れた。古野さんから叱られたが、後で褒めてくれた。古野さんという人はまともには褒めてくれない。反対に叱る人でしたよ。僕にとっては思い出のある仕事だったが、この社屋も東京空襲で焼けてしまった。

梁山泊会談

社屋の新築で僕はすっかり身体をこわし、古野さんから「少し休んで身体を丈夫にして再起を図れ」と言われ、庶務から手を引き浦和に引込んだ。最後のご奉公は浦和支局の開設でした。

話は前後するが、東川さんは実に仕事熱心な人だったね。それから土肥さん。麻布谷町あさぶちやまちの僕の家から3町約330mくらい離れた所に大先輩の土肥常温さんの家があって、駆け出し時代の僕は、日曜日の午前中に出版社の帰り道によく寄って話し込んだものだ。奥さんはちょっとあか抜けた感じの人で、僕にも気安く話し掛けてくれた。土肥さんは気さくな人で、相談事でもあると、ざつくばらんにあしろ、こうしろと言って力づけてくれた。僕はいつも兄さん夫婦の家へでも寄るような気持ちで、勝手に上がり込むというふうであった。

よくご飯をごちそうになりながら社のことに話が移り、土肥さんから「古野さんの構想について今後どうするかを話してくれ。お前の意見はどうだ」と聞いてくれたりした。僕はうれしかったですね。

古野さんがいるときもあり、また2、3軒先にいた結束武二郎けつそくさんも加わって話が弾むこともあった。そんなとき、僕はいつも聞き役に回っているんだが、そんな大きなことができるのかなあ、と驚きながら、この梁山泊会談りやうやうかいを楽しみによく出掛けて行った。後の大同盟の母体はここで作られたと言っても過言ではあるまい。僕が経済通信の基礎を作れと

言われたのも、この人たちからだった。土肥さんはそれから5、6年して亡くなられ、その功績に報いることができなかったのを古野さんも残念がった。とにかく僕は、立派な先輩たちに囲まれ、育まれてきたことを今でもうれしく思っている。

(新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」)

経済通信の草創時代

住谷晋一郎(元新聞聯合)

昔話ではあるが、後に時事通信の有力な米糧^{こめびつ}ともなった「経済通信」の草創時代にかかわる話なので述べておきたい。

新聞聯合社時代、杉田才一さんから聞いた話である。関東大震災の後、関西での経済通信(当時「赤電^{あかでん}」と呼ばれた)を強化するため、古野伊之助さんと並び、社の内外で信望を集めていた東川嘉一さんを大阪へ送り出すことになった。一同東京駅まで見送る。プラットホームでケネディさんが仕方のスピーチ。

「明朝、大阪駅で君を出迎える人は、ほんの2、3人にすぎないであろう。だが、君が任務を終え東京へ帰るときには、君に感謝する関西の経済人で駅頭が埋まるであろう」

東川さんは惜しくも病のため大阪で亡くなるが、彼の努力と、助けた多くの同志たちによって赤電は飛躍的に拡大、日本の貿易立国に多大の貢献をすることとなった。

(「十五年のあゆみ」 1985年3月31日発行)

無料だった国際経済週報

塚本義隆(元国際通信大阪支社編集翻訳係主任)

(編集者注) 国際通信社は大正6(1917)年2月11日、大阪支局(後に支社)を開設して経済通信を始め、間もなく1週間分の記事と相場をまとめた「国際経済週報」を発行するようになった。創刊当時の週報は8ページであった。週報発行について塚本義隆氏は次のように回想している。

「週報」には、海外からの相場を全部、収録していた。配信したあと、捨ててしまつては、記録が残らないから、お得意さまのためというよりは、むしろ自社のために、残しておきたい相場の記録を、週報の形にしたのだ。記録として作成したものを、自社だけで持っていてもつまらないから、お得意さまにサービスしてはどうかというので、配布することとした。もともと記録はただで、印刷費がかかっただけだから、お得意さまには無料で配布した。印刷部数は300か400であった。いつごろまで、無料で配布したか、よく分からないが、国際通信時代は無料だった。料金を取っても、高が知^{たか}れている。それよりも、お得意さまからいただく通信料金が高かった。綿花相場の料金が1カ月200円。綿花以外の為替などの購読料金は年千円だった。当時といたら、いい値段

である。もちろん、商社が単独でニューヨークから電報で取ったら大変な金額だったと思う。

〔新聞通信調査会報〕第227号 1981年10月1日発行

満鉄の未承認鉄道敷設を特報

横田実（元同盟通信南支総局長）

古野伊之助さんの新聞記者としての働きは大正6（1917）年から7年ごろ、国際通信社の北京支局主任（支局長）時代に始まるのではなからうか。そうすると大体僕と同じ時代の同じ所ということになる。年も近いように思うかもしれないが、これはだいぶ違う。古野さんは東京本社から派遣された本格派であり、僕は単身無縁の北京飛び込みであったのだから、すべてが大違いなのだが、ただ場所が一緒だったことは間違いない事実なのだ。

そのころ北京に「共同通信社」というものがあつた。これまた現在の共同通信とは何のゆかりもないこと申すまでもない。この通信社は小川平吉氏が社長として東京にいたが、そのガリ版通信の取材をやらされたのが僕で、毎日、東公民巷（とうこうみんきやう）の日本公使館に通つて当時の芳沢謙吉参事官の会見に出させてもらつていた。僕が新聞記者として質問というものをやったのが、この時の芳沢さんが初めてだったから、二言三言の簡単なものだが、初心者に親切に答えてくれた芳沢さんの言葉は今でもはっきり覚えている。芳沢さんの話はそのままそっくり記事になり、記者に

は大変楽な人だった。ゆっくりしゃべるのを書いてるとちゃんと文章になっていた。

古野さんは記憶しているかどうか。そのころ北京を中心にして各国の対支鉄道利権問題が国際間最大の問題になっていた。日本は満蒙五鉄道の敷設借款ができて、満州各地、内蒙古地区にどしどしレールを伸長していった。その五鉄道の一つに四洮（しとう）鉄道というのがあつて、満鉄本線の四平街（しへい）から鄭家屯（ていかとん）へこれが四鄭（してい）鉄道で、それから洮南（とうなん）に延ばす約束だった。ところが鄭家屯から北の洮南に行かず、全然予定されてなかった西の方の通遼（つりょう）に延ばしてしまった。四国借款団本部はロンドンにあつてにらんでいたはずだが、うやむやになっていたらしく、満鉄では文句が出れば「支線」だと言つてごまかすハラだったようだ。

その満鉄の某高級幹部が僕と会っている間に、恐らくものの弾みだったろうが、「通遼線は借款団の承認を得ずに工事を始めてしまったので、これから外国関係が厄介ですよ」と聞かせてくれた。僕も若かったがこれを聞き逃すはずもなく、自分で書いて自分で出している共同通信に、僕が責任者の代わりをやらされていたので、「四国借款団の承認なく四洮（しとう）鉄道支線敷設」とやつてしまった。これが大変な問題になってロンドンの借款団本部から問い合わせが来るし、公使館に呼ばれていったい誰がしゃべつたのか、などと聞きただされもした。もちろんその人の名は言わなかったが。

古野さんだったか、ずっと前に亡くなった朝日特派員の大西斎氏だったか、電話で事情を聞かれたので、僕はこう答えたのを覚えている。「100以上の鉄道を敷いているのを秘密にできるはずがない。外国人に暴露されてひどい攻撃を受けるより日本人に見つかった方が楽じゃないでしょうか」。これは今でもあれでよかったと思つている。

〔新聞通信調査会報〕第1号 1964年1月1日発行

北京（済南）の航空便試乗

古野伊之助（元国際通信北京支局主任＝支局長）

（編集者注）1921（大正10）年7月1日、北京・済南間に定期航空路線が開設された。開設を前に北京駐在記者の試乗会が実施され、参加した当時国際通信社北京支局主任・支局長の古野伊之助は帝国飛行協会発行の雑誌「飛行」に搭乗手記を寄せた。手記は日本航空協会が1956年に発行した『日本航空史 明治・大正編』に収録されている。同書は古野氏について「恐らく外国の定期航空に便乗した本邦最初の人といってもよからう」と指摘している。原文は旧漢字、旧仮名遣い。

この日は風もなく天気晴朗、極めて平穩な飛行日和であった。乗る前にも別段不安を感じるようなことはなく、乗ってからも平気で午後4時45分、離陸する時は非常に愉快な気持ちであった。私たちの乗ったのは正鵠号^{せいこくごう}で、外に舒雁^{じょえん}、大鵬^{たいほう}の2機があるが、皆、原名を「ビミー」と呼び、英国のビッカーズ社の製作にかかると、昨年6月、1万^{ドッ}をもつて購入したものである。座席は8個あり、後方には便所の設備もできている。普通に椅子によっておれば別段傾くようなこともなく、ちょうど汽船に乗っているようなものだが、ただプロペラのやかましい音ばかりがほとんど耳も聾^{ろう}せんばかりであった。

操縦者は英国人バンシング氏と支那人曹明志氏の2人で、同乗したのはロイテル（ロイター）新聞のワッツ氏、米国連合通信（AP）のホイフィン氏、全国報界連合会の梁志和氏、群報の舒之流氏と私の新聞記者連。

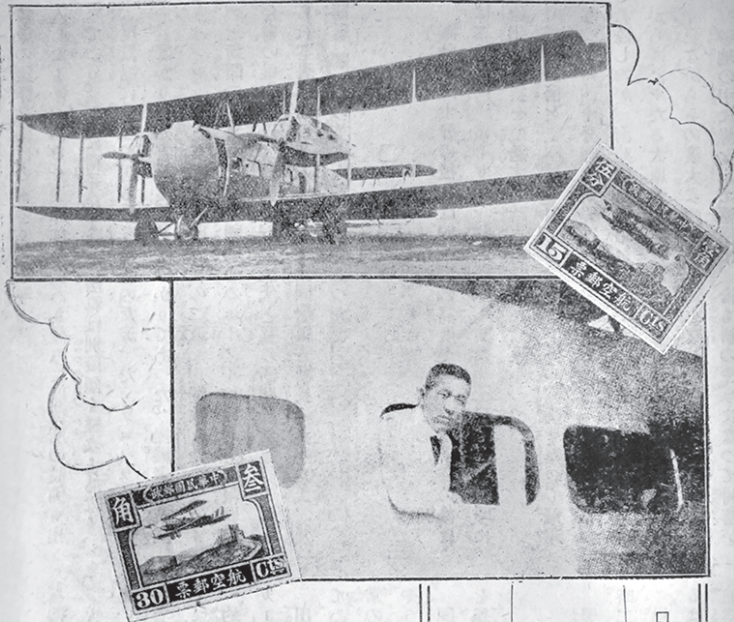
それから航空署顧問の英人ホルト氏、同署編査科長の黄鴻謙氏及び同署関係の英、支那人各1名であった。

離陸後20分の後には4千尺（約1200^{メートル}）の高度をとり、30分後には2千尺に下り、1時間たつてまた6千尺、6時半ごろに德州の上空を通過する時は7千尺くらいに上つていた。はるかに済南を望み見る頃から2千尺くらいの高度を保つて飛翔し、7時40分、無事鵬程^{ほうてい}300哩^{マイル}（約480^{キロ}）の飛行を終えて済南飛行場に着陸したが、南苑の航空站^{たん}を離れて西山が霧の中に没した頃からは茫々たる大原野で、行けども行けども山は目に入らず、今更ながら、その広大なのは一驚を喫したのであった。砂地の中に緑をもつて縦横に、あたかも絢^{かすり}のようになって村落が点在しているさまは、さながら絵のように奇麗で人家などは蟻塚^{ありづか}ほどにか見えず、人馬はもちろん、認められない。済南に近づくころは、日輪西山に傾いて雲は燃ゆるがごとく、蜿々^{えんえん}と連なる高い山は泰山であろうか。その間を、白布を引いたように雲から雲に入る黄河の流れ、この絶景には機上思わず快哉^{かいさい}を叫んだのであった。

約3時間の飛行後に、初めて陸上の人となった時は耳がガンとしていて、何の音も聞こえないようになっていた。田督軍^{でんとくぐん}から握手されても、もぐもぐ口の動くのばかり見えていて、言語はまるで耳に入らない。5分間ほどたつてから、ようやく通常の人間に立ち返ることができて、万歳の声や奏樂の音が分かるようになった。

同夜は陳済南飛行站長に迎えられて、航空署で一同、白乾の盃を挙げて成功を祝した。

翌日は午前10時45分出発、多少の風はあったが、午後1時20分、無事北京航空站に着した。思うに曠々たる大平野、何処^{どこ}として天然の着陸場ならざるはなし、という支那のことであるから、これを機とし、この国の航空界はますます発展することであろう。



上圖は去七月一日
開航の北京濟南間
の郵便飛行機大鵬
號（英國ザキツカ
リス・ミー式）と
其乗客室の古野
氏。左右上下の切
手は今度新に制定
された飛行郵便切
手である。

此の日は風も無く天氣清朗、極めて平穩な飛行日和であつた。乗る前にも別段不安を感じるやうなことはなく、乗つてからも平氣で、午後四時四十五分離陸する時は非常に愉快な氣持であつた。
私達の乗つたのは正鵠號で、外に舒服、大鵬の二機があるが昔原名をビミーと呼び、英國のザキツカリス

□ 支那最初の □ □ □

郵便飛行に搭乘して

國際通信社
北京支社主任 古野伊之助

雑誌「飛行」の1921(大正10)年9月号に掲載された古野伊之助の試乗記。上は大鵬号。窓から顔を出しているのは古野

打っても打っても原稿の山

藤本松子(旧姓・山本まつ、元国際通信)

大正12(1923)年、私が赤坂区葵町3番地にあつた国際通信社の経済部に入つた年に、関東大震災があり、内幸町2丁目の新聞部の一室に移ってから間もなく、なにか身辺に旋風をはらんだような精悍な感じの方が、忙しげに廊下を往来しておられた。その人が北京から帰られた古野伊之助さんと教えられました。その頃の古野さんは、大阪から上京していた物静かな東川嘉一さんと連日会議。その間を小柄な秘書兼会計係の松永あさ子さんがチヨコチヨコ行ったり来たりして、ただならぬ空気を漂わせていました。それから間もなく、岩永裕吉専務が実現し、やがてケネディⅡ松永のコンビも退場され、看板も「新聞聯合社」と書き換えられました。

それ以来、古野さんの緊張したお姿をよく廊下でお見受けしましたが、チヨッキのポケットに両手の指先を突っ込んで「何とか：カイナ」と、たいそうご機嫌よくタイプ室に入つて来られたときなどは、仕事は順調に運んでいるのだと推量していました。

古野さんは、人を包むような優しい眼差しをしておられました。口の悪い同僚は「唐子」に似ているなどと失礼なことを申しますので、私は「中国の大人の風格」があると、むきになって弁護側に回ったものです。



同盟通信本社タイプ部=1938(昭和13)年9月

古野さんがうつむいて気難しいお顔で、廊下など歩いておられた後は、ポリーナスが軽かったように記憶しています。

(同盟通信社になってからの)岩永裕吉社長を、たまに社内でお見掛けしましたが、思いがけない伝法^{でんぽう}なお言葉遣いに、びっくりしたことを覚えて 있습니다。

昭和11(1936)年、二・二六事件の起きた雪の朝、乗り物がなくポクポク歩いているところを、写真部の車が拾ってくださったことを今も感謝しています。

あくる昭和12年に日華事変が起き、ニュースの量は日毎に増える一方で、タイプを打っても打っても原稿の山、じゃんじゃん催促されても、両手では打てない機械のじれったさ、おまけに事変が進むにつれて、中国人の難しい名前が次々と現れ、毎日戦争のような状態でした。

〔新聞通信調査会報〕第6号 1963年6月1日発行

御大典報道にてんてこ舞い¹¹

島田君子(旧姓熊沢・元国際通信)

タイプリストとして国際通信社に入ったのは大正14(1925)年。当時は日比谷図書館前の木造の2階建てで、何とみすばらしい所かと思っただけでした。経済部長の川島友三さんに面接、翌日採用の通知に胸を躍らせて出社、先輩の藤本松子さん、深町愛子さんと多忙ながら楽しく毎日を過ごしました。8時出勤に滑り込み、事務服を着る間もなく朝

の商況を打ち終わると、ホッと一息したものです。御大典の報道にはみんな真剣そのもの。一字の誤字、脱字もないよう出てくる特殊な文句の活字を探すのにてんてこ舞いしたことがありました。

東方通信社と合流¹²してからタイプ部もおいおい活気づき、人員も増え、大森吉五郎^{きちごろう}さんも夜勤のタイプで、その頃は髪もふさふさとした学生服姿でユーモラスなことを言って、みんなを笑わせていました。内信部の高井信義さん、大賀周知さん、栗林農夫^{なみの}さんら口の悪いお歴々、萩野伊八さん、いつも長い鼻毛をのぞかせながら三日月のような口元で豪語していた姿が浮かびます。お盆で冥土もさぞガヤガヤ、ワラワラなことでしょう。

岩永(裕吉)専務さん宅に皆さんと招かれて行ったことがありました。御子息信吉さん、当時小学校6年生くらいでしたか。その頃には珍しい16ミ^ミですか、何ですか忘れましたが、映写してくださったのですが、故障ばかりで途中で止めてしまわれたのを覚えています。福岡誠一さんのお宅へ招かれ、鶏の水炊きを御馳走になったことがありました。庭にはご自慢のバラの花が咲いておりました。

伊達源一郎さん宅の園遊会、發送部の忘年会などみんな楽しい思い出です。私の退社後、同盟が誕生したのですが、往時を顧みてそれらの方々が立派な地位にあつて活躍しておられるのは喜ばしい次第です。

〔新聞通信調査会報〕第9号 1963年9月1日発行

座談会

大阪で活躍した人々

1963(昭和38)年6月17日
クラブ関西で

(出席者)

長林密蔵

(元新聞聯合内信局整理部長)

高橋勇

(元国際通信大阪支社連絡係主任)

塚本義隆

(元国際通信大阪支社編集翻訳係主任)

山口巖

(元国際通信長崎支局主任)

板垣武男

(元新聞聯合大阪支社内信部長代理) 〓司会



板垣 『通信社史』全体の姿を見ると、どうも大阪を軽視している傾向があるという文句が一部の人から出た。そこで『続・通信社史』のような形で補完しようということになった。最初に塚本さんから、国際通信社に入社したいきさつを話していただきたい。

塚本 私は大正9(1920)年、国際の大阪支社へ入った。それまでは大阪通信局に勤めていた。ところがここにいる高橋君から「国際通信へ来てくれないか」という話があった。高橋君は2年くらい前に、既に国際に入っていた。大阪中央電信局時代からの先輩で、引っ張り込まれて国際へ入社したわけだ。

板垣 その時の支社長は誰でしたか。

塚本 東川嘉一。

高橋 支社長とは言わなかったな。

板垣 大阪支社支配人だ。そのときの社屋はどこ？

塚本 東区高麗橋5丁目12番地にあった。

板垣 今のどこか。

塚本 大阪倶楽部のすぐ南の通り。大阪倶楽部は今橋5丁目だから、ちようどもう一つ南の町だ。北側に格子の入った日本家屋があった。

板垣 高橋さんは。

高橋 私は結束武二郎に頼んで入った。

板垣 頼んで？

高橋 僕も中央電信局に勤めておったけれども、勤務が不規則でどうも眠いんだなあ。辛くはあるしね(笑)。もう少し本が読めるだろうと思って頼んでおいたら、いっぺん東川嘉一さんに会いに行けというわけで、会いに行ったのが北浜の取引所の2階、大阪としては2回目の社屋だ。そうしたら「いつでもいらっしゃい」と言うわけだ。(中央電信局を辞めようとしたらなかなか辞めさせてくれない。当時は、大正7年の景気のいい時で、電信局は非常に忙しいし人手が足りない。もう少し待て、と言われて3カ月ほどやって、結局、9月末に辞めて10月1日に入社した。)

塚本 当時、結束君は国際の東京本社にいた。

高橋 僕より2年ほど前に不破瑤磨太が先に入っており、不破の紹介で入ったと思います。僕の入社は大正7年10月1日です。社屋は最初、高麗橋2丁目の千代田生命の2階を大正6年2月21日に借りたんでしょう。それから北浜2丁目の取引所の2階。高麗橋5丁目に行つて、立川ビルに行つて、江商ビル、それから土佐堀へ行つた。土佐堀で被災した。

板垣 山口さんはどういういきさつで国際に入ったのか。

山口 私は新聞記者になろうというんで、時事新報¹⁴と国民¹⁵、中央新聞¹⁶、読売、それに毎日新聞と5社に入社できることになった。

板垣 入社試験を受けたわけですね。

山口 いや私たちのときには、そんなものはない。新聞記者は正業と認

められなかった時代だからね。時事新報には政治部長で鳴らし、後年編集監督になった桜井徹三氏がおった。当時は時事新報が全盛の時だった。読売と国民には自分が学生時代に書いていたからね。読売は大庭柯公おおばかこうのいるときだった。

板垣 大正何年？

山口 大正9年だ。母親が新聞記者になりたいなら桜井のところへ相談に行けと言うので行った。時事新報は慶応でないと出世できないが、入りたいなら入れるということになった。読売は書いていた関係で、大庭さんが会うというんで会ったところ、「すぐ書いてくれ」と言うから、こうこうだと言ったら「何だ、あれは君か。それじゃ明日から出社してよい」ということになった。

板垣 何を書いていたの。

山口 文芸の評論とか、いろんなもの。

板垣 大したもんだ。

山口 国民にもやはり同じようなものを書いていた。中央は当時、山口という有名な人がおった。紹介されて中央へ行ったら「自分とこへ入れ」と言うわけだ。いろいろ考えたけれども、当時毎日の編集監督をしていた相島勘次郎、あれが親父の親友なんだな。もう一度相島に相談しろということと相談に行った。相島は「毎日に入れ。いづれ留学生を出すからそいつの中へ入れよう」ということだった。9月ごろに留学生を出す予定で、僕が会ったのが2月ごろだ。その間、「外電を扱っている国際通信社というものがある。そこでしばらく外電の見習いをせい」ということで、相島から国際へやらされた。

東京の国際通信社に出掛けた。例の古ぼけた懐かしい建物だ。相島からの紹介状を持って不破瑳磨太、古野伊之助の両氏に会った。ご両人も和服で、はかまをはいておった。古野さんによると、大阪に支社が

あって東川が支配人をしている。1週間ぐらいしたら上京する。葵町あおいちょうのオフィスに総支配人のケネディがおり、東川が葵町に来たときに連絡するから会え、ということになった。それからケネディのところへ出掛けて行って、東川さんに会った。今も忘れもしないが、松永あさ子という気丈そうなお婦人がいた。東川さんに会ったら、どう勘違いしたのか、すぐに試験をするという。ジャパントイムズを持ってきて「翻訳せい」と言う。どこを翻訳しろというのか分からないから、頭から翻訳して、かれこれ2時間ぐらい部屋に放ったらかされていたが、できたら東川さんが見ていた。

毎日のことは、僕は何も言わなかった。二度も三度も説明せんでもないだろうと思ったからだ。「大阪へ来るか」ということで、京都の大学に近いし、行ってもいいだろうと返事をしたら、4月1日から勤務で、来阪は3月下旬でよろしいと言う。

内幸町に引き揚げて、不破さんと古野さんに会って委細を報告した。相島さんからは結束も紹介された。結束は相島さんと同じ茨城の水戸なんだ。僕と一緒にその年、同志社や早稲田を出たフレッシュマンが7名入った。福島の浄正橋じやうしやうはしの通りの先に高崎館という下宿屋があり、そこへみんな放り込まれた。そこから通ったわけだ。入るときに僕は勝手なことを言ったんだ。東川さんに東京で会ったとき、「月給はいくら欲しいか」と聞かれたので、「いくらもらったらよいか分からない。あなたの方で分かっているでしょう」と言ったら「帝大が最高で80円だ。見習い中75円でいいか」と言うから、いいか悪いか分からないが、使ってみて足りなかったら請求するというわけで、承知した。

勤務時間を聞いたたら、9時から5時までとの返事だ。8時に出たらどうかと聞いたたら「8時だったら4時でしようか」との返事。7時に出たらどうかと言ったら、僕の顔をしばらく見とったなあ。「さあ7時に

たら2時ごろですかなあ」と言うから、そうですかと言ったんだ。そういう言い方が相当こたえたのかどうか知らないが、あの人はあまり表情を変えない人だけれども「君、うちはトライアルが1カ月と決まっている。気に食わなかったら遠慮なく辞めてくれ。自分の方も不適當だったら遠慮なく断る」と言った。それで「結構です」と入社を決めた。

入ったときの風体だが、丸坊主に、はかま姿で腰に手拭いをぶら下げているという書生っぱ丸出しだ。嘉一さんは僕を連れて歩いて「分からないことは誰にでも聞いてくれ。誰も分からなかったら私に聞け。私が分からなかったら世界各国どこでも照会して説明するようにしよう」と言う。東川さんは「お前たちは幹部候補生なんだから、何でも見習え」ということで和文タイプから英文タイプ、モールス符号まで一切合切やらされた。

私は毎日必ず7時に社へ出た。下宿のほかのやつはそこまでしなくてもいいじゃないかと言うが、「それはお前の勝手だ。俺はともかく7時に出て1カ月見習いをやる」ということで7時から7時まで12時間やっただ。日曜も休まなかった。当時僕が配属されたところの半田義一という主任が、日曜は休まなきゃ困ると言う。「俺の勝手だ。出ようと出まいと私は1カ月見習いだ。完全に出る」ということで、とにかく7時から7時までやった。

1カ月たった。そこで嘉一さんに「今日は何時までおるか」と言ったところ、大阪倶楽部で会合があつて、社には8時すぎに引き揚げてくるということだった。「何だ」と言うから「それまでに来るから待ってほしい。お目にかかってお話しする」と言っっていっぺん下宿へ帰った。飯を食ってから社に引き返した。東川さんが待つておられた。「今日は約束の満1カ月だ。あなたの方が嫌だと言うんだったら、こっちはさっさとしまつて帰る」と言ったら「実はいてほしい」と言うわけだ。「君はど

うか」と言うから「いてもいいと思う」と言ったら、それじゃ「いてくれんか」というので「いましょう」ということになった。

ところがその後、東川さんが「ちよつと来い」と言うから部屋へ行った。そしたら「君は毎日新聞へ入つておるんだな。今日、相島やその他の連中から、山口がお世話になっておると礼を言われたんだ。相島の話じゃ、読売とかほかにも入社が決まっているということだった。国際からも必ず外国へ出すから、うちにいてくれんか」という話だった。私も相島からの話で国際に来たということを東川さんに一切しなかったたので東川さんも驚いたらしい。

そこで相島に相談したところ「東川が非常にびっくりしていた。お前は どうするか」と言う。「大先輩なんだからどうお考えになりますか」と言ったら「国際通信社は将来性があると思う。東川もいいと言っているんだからこのままやたらどうか」という話なんだ。不破、古野というのはこういう男だ。当時の代表社員の樺山愛輔^{あいすけ}や総支配人のケネディについてもいろいろ言われて「それじゃ国際通信社に落ち着きます」ということになった。

スポーツ通信の大阪

板垣 ワールドシリーズは山口さんが大阪で記事を出したんだが、編集会議でどうして大阪支社であんなことをやってたのかという話が出た。福岡誠一が「あの山口はスポーツ通信をやらないかと言って、とうとうそれを取った」と言っていた。

山口 僕は正9年4月に大阪へ入って、福岡へ行つたのが7月だ。7月15日。その日私は6時すぎに下宿へ帰った。皆と夕食を共にして7時すぎに散歩にでも行こうかと言っているところへ、桑原というボーイが

手紙を持ってきた。「すぐ出社せい」というわけで、福岡へ出張だということを書いてある。しかもその晩の8時半の特急でたてということなんだ。それから飯を食った。着替えだけをバスケットに入れた軽装で「おいみんな、あとを頼むぞ」と言っただけでボーイと一緒に社へ行った。

和服にはかま姿の当時、連絡部長だった高橋さんが待っていた。僕の机の上には寝台券とか、旅費とか置いてあって、「東川さんの命令で、お前を福岡へやる」。連絡に関しては何も知らないから文句を言ったんだ。けれども「お前が何と言っても駄目だ。支配人の命令だ」と言っただけ。仕方なく寝台券を持って8時半の特急に乗って福岡へは翌日10時ごろに着いた。

福岡では1人で慣れない連絡をやらされ面食らった。福岡支局は長崎との中継をやっていたが、朝8時から晩の10時すぎまでたった1人はとても長かった。旅館という旅館に泊まって、そこから通ったが、朝の7時から晩の10時までやらされた。

板垣 ロイターのケーブルがロンドンから来ていたんだ。

山口 上海から長崎まではデンマークのグレート・ノーザン（大北電信）¹⁷の線がある。

塚本 海底電線だ。長崎―上海間に2回線あった。

板垣 長崎から福岡までは何で。

山口 予約電話。

板垣 それから？

塚本 福岡―大阪は予約電話。大阪―東京も予約電話。専用線がないんだから。

山口 当時、長崎―大阪間に予約は取れなかった。許されなかった。そこで長崎―福岡、福岡―大阪とやるんだ。

塚本 長崎―大阪には直通の電話線がなかった。

山口 大阪の連絡部は、何の経験もない新米の僕をいきなり福岡支局へ持っていった。8月に塚本さんが僕の代わりに来てくれた。そしたら今度は長崎へ行けということで行ってみたら、パッチャン（鷹嘴^{えいすい}）が1人で、ボーイを使っていた。

塚本 福岡は近藤甫契と僕の2人。長崎はパッチャンと山口さんの2人。

板垣 翻訳は？

塚本 翻訳はしないで、原文のまま大阪まで連絡する。

山口 原文のまま連絡するんだ。朝でも夜でも電報が来れば転電しなきゃならない。真夜中だってやらされる。長崎ホテルに2人泊まっていた。昼間こそボーイを使うけれども真夜中は2人きりだから、電報が入ればコピーをとったり、転電したり、タイプをたたかなければならない。寒い冬の夜中はこたえたね。

塚本 長崎の電信局に支局のボーイを置いて配達させるんだ。ボーイが電報をもらって走ってくるわけだ。

山口 10年9月には大阪に戻り、京都支局に11月いっぱいまでいて、11年3月、正式に長崎支局に転任になった。12年3月には大連に出張し、5月には出張と連絡で大阪支社に来てオリンピックの報道係になった。13年1月に本社に移り福岡誠一、加藤万寿男^{ますお}、白尾干城、萩野伊八らと一緒にになった。編集部と称していたが、スポーツの分かる人がいない。

アメリカの野球電報はスコアとしてラン、ヒット、エラーだけを打電してくる。両チームの次に六つの数字を打ってきた。ワールドシリーズの結果も両チーム名の次に六つの数字を打ってきた。これをそのまま並べりゃ新聞社は分かるだろう。野球をする者は分かるだろうというわけで、並べて出した。僕は社に來ているニューヨーク・タイムズを克明に勉強して国際スポーツ通になった。いつとはなしに国際スポーツの權威になっちゃった。東京運動記者クラブのメンバーでもあるし、オリンピック

はもちろん、テニスのデビス杯やワイトマン杯、ワールドシリーズ、ヘンリー・レガッタなど各国の有名なゲームについて解説をした。そのうち電通が先にワールドシリーズをある程度、取り出したんだよ。

板垣 UPか、APか。

山口 (電通は)UPからだ。しょうがないから、うちでもワールドシリーズの速報をやるということになり、同じように打たせたら、こっちの懷具合が……。その頃は国際から新聞聯合に移っていた。経済通信の経験があるため、コードを組んで「ニューヨーク・アージェント」と称する至急報で打たせた方が速いのではということで、コードを作ってAPに送った。APは結果だけをアージェントでやり、あとは普通報で経過をやることになった。そのときに一つ失敗があった。

APから「コードは分かったが、アルファとは何か」と聞いてきた。日本の野球は最後のときにアルファをつける。アメリカはアルファがないんだ。例えば「3A-2」と書くだろう。それでこうこうだと言ったら「ああそうか」と。ニューヨーク・アージェントが非常に効いて電通は追いつけなくなった。ワールドシリーズは東京ですつとやっていたが、以上のような経緯でコードは大阪で組んだ。

板垣 福岡さんが「とんでもないのが飛び込んできたおかげで、外信はどれだけスポーツを勉強させられたか分からん」と言っている(笑)。

山口 福岡が外信部長をやっていた。ワールドシリーズはたまらないんだ。何しろ翻訳して早く出さないと。電通だって早く入ってくるんだから。おかげでえらい目に遭ったということだ。

高橋 それは知らなかった。経過は電報でよく分かったけど。

板垣 山口さんは大阪で試合の経過をスコアブックに付けていて、トータルが合わないと言っていた。福岡君は、虫食いとかが言っていたが、虫食いであろうと何であろうと、経過がみんな入っている以上は、

トータルが合わなければならぬはずだと。

山口 大阪支社でコードを作ったやつの中に必ずチェックするものが入っていたんだろう。だから「それは違う、これが違う」と言うと東京は怒っていた。

板垣 最近、東京の言うことに支社は何も反発しないけれど、昔、山口さんはこういうことをやっていた。僕なんか高松部長の時に電話でジャンジャン言ったんだ。聯合は月給は安かったが、「何とかしてやろう」というファイティング・スピリットに燃えていたね。長林さん、相当やったね。例のロイターの記事でね。みんな一生懸命にやった。「マオリ・コード」「分送制度」「ユニオン・コード」「チェック」「バーチカル・チェック」は全然分らない。

塚本 マオリ・コードというのは、南太平洋に住んでいるマオリ族から取ったのだと思う。ロイターは日本だけでなく豪州方面にも電報を打っていた。太平洋方面に使う電信の暗号にマオリ・コードという名を付けていた。言葉の起こりはそうだと思う。マオリ・コードの作り方は非常に不規則で、間違っていることも発見が難しい。初めに子音があって次に母音、2字1組のコードだが、次には逆に母音が先に来て子音がくっついている。1字でも間違った場合、判断に困る。

何年かやってみた結果、大阪支社ではコードの改良を要するという結論に達した。発信側に任せておいても駄目だから、こちらで考えようということで作ったのはパッチャンだと思う。ああいうことはパッチャン得意だ。それで案を作ったニューヨークのロイターに送った。当時はニューヨークが綿花、株式相場の中心だからロイターの経済通信の本拠はニューヨーク。東川さんが手紙を書いてニューヨークへ送った。新しく作ったコードはマオリと違って必ず子音が先で、母音が後だ。2字1組のコードで、電信がもし間違っても、こんな間違い方はないと分かる

ようなコードで、非常に改良されたと思う。ニューヨークのロイターはこれを取り上げて日本や豪州、上海へも送った。各地で共通に使えるという意味で、ユニオン・コードという名前がついたと思う。

チェックというのは、2字1組で五つ合わせて10字になる。これが1語。1語の中の1番目から9番目までの数字の合計数、例えば9字の合計が49という数字になると、10台の4を省略して端数の9を取る。これを10字目にチェック数字としてつけた。もし合わなければどこかに間違いがあるというので、受信電文を調べ直すことでチェックする。それが横のチェック。

バーチカル・チェックというのは、語数が10語あるとすると、各語を構成している10字の1番目、2番目、3番目とそれぞれ縦に合計する。各々の合計数字の端数をチェック数字とする。この縦のチェック数字を10字合わせたものを1語として加える。これを縦のチェックにした。縦横がなじがためにできているから、間違ったらどこに間違いがあるか、すぐに発見できる仕組みだ。

縦にも横にもびったり

高橋 バーチカル・チェックを使ったのは、ニューヨーク・アージエントだけだと思う。

塚本 相場に関係のない単独の1語を余計に使って内容の正確を期したということなんだ。縦も横にもびったり合わなかったら、どこか電信に間違いがあるということが分かる。

板垣 通信を出すときは？

塚本 必ずチェックを見た上でないと出さん。合わなかったら調べるわけだ。

山口 これはニューヨーク・アージエントだけだったね。

塚本 普通の相場も最後の1字だけが、全部チェックがある。だから国際時代も聯合時代も絶対の確信を持っていた。東洋棉花あたりから質問してきてもうちは正しいと言い張った。こっちは確信がある。アメリカの棉花相場でも株式相場でもコードは共通だ。

板垣 メイド・イン・ジャパンのコードを使ってたわけだね。

塚本 そうだ。他では間違いということに関心を持てなかったけれども、日本は競争者が多くて関心がある。電通は後から始めたが、国際と同じ時代に棉花、株式、為替相場を打っていた通信社があった。

高橋 海外通信社といったか。

塚本 そのアドレスは「外電」(GAIDEN OSAKA)なんだ。間違ってるちらへ配達されたことがある。やはり至急報で来るんだ。非常に間違いが多くて、相場専門の通信社だがいつの間にか消えた。

山口 高橋連絡部長のところではマオリでもユニオンでもいちいちコードと合わせてやっていた。僕はコードなしにいきなりタツタツと、タイプでたたくことをやらせたんだ。高橋さんあたりから、間違ったらどうすると言われたが、それをやらせたために非常に速くなった。

塚本 暗記するわけだもんな。

山口 戦争末期の5字、6字の漢字電報。あれにはホワイト・ロー、ベントレー、そういう社会共通のコードを使ったんだ。ベントレーの商業電報の暗号も全部頭に入れているからそれが来るとすぐに「何だ」と言ってやって、後からコードブックを引くやり方になった。人間を機械化したということで、実際にやっていった人には済まないが、それほどに皆、一生懸命にやったということなんだ。ユニオン・コードができて、良いというのでオリンピックの時に全部コードに組んだんだ。僕が大阪に来てね。結束が塚本さんを上海へ出した。

塚本 上海にいた結束君が帰ってくるんで、交代に行ったんだ。昭和2年8月、上海で極東オリンピック¹⁸があった。

山口 コードを組むのに相当かかった。全部の競技をコードに組んだから選手も番号をつけなきゃいかん。至急報で組む関係もあるから使えるやつは誰か。結束じゃ駄目だ。大阪の高橋幕下の誰かがやらなければならぬ。そういうことだったので東川さんは、塚本君に頼もうじゃないか、と言う。

塚本 私はそのためにに行った。結束さんは上海支局長で、オリンピックのニュースを集めるのは結束さんなんだ。各種競技のスコアを競技場から電話で取る。それを見て僕がコードに組んでグレート・ノーザンの上海局から長崎の聯合支局宛てに電報を打った。上海から長崎までは5分。ところが長崎から大阪へは何時間もかかる。日本の電信線は能率が悪かった。それで長崎―福岡―下関―大阪の予約電話を利用して電話で送った。

山口 数字で送ってくるだろう。だから速いんだ。

板垣 東京で見えていてコードその他、非常に面白いと思ったが、現在は電子計算機がやっている。それをあなた方やわれわれの先人たちは自分の頭でやられた。

塚本 その方が精巧で速い。

山口 パツちゃん、高橋勇、塚本という連中が機械になっていた。これだけうまくそろったからで、それ以外にやれといったって、なかなかそうはいかんね。

板垣 新しい着想の下で30年ぐらい昔にそういうことを考えてやっていたということだね。

山口 『東川嘉一遺稿』にオリンピックのことが書いてある。毎日の当時の運動課長の木下（東作）医学博士、朝日の東口真平、そういう連中と

打ち合わせをした時、自分の方では特電でこういうものはやる、記録と結果は聯合に頼む、ということだった。今のような仕組みにして膨大な通信が入った。聯合は東京も全国もほとんど独占状態だったが、終わってから「あんなにたくさん通信をよこせと言ったか」「あんなに金を使われたら困る」というお叱りが出た。東川さんがおもむろに経費は朝日、毎日が使った金の1割にも足らんものだったと説明したので、びっくりしていた。

われわれのオリンピック・コードが、どうしたものか、電通に漏れたんだ。電通では、聯合は経済通信では速いかもしれないけども、運動通信なんかはコードを組んで何をするかということだった。塚さんが行ってくれてすぐうまくいって、電通もあぜんとしていた。

塚本 極東オリンピックで上海から日本へ打つのに使った電報は、聯合は電通の10分の1。電通は10倍なのに全部負けた。光永星郎^{はしお}初代社長から上海にいた電通の神子島^{かごしま}梧郎^{ごろう}総局長、児玉支局長に毎日お叱りの電報が来て彼らは青くなったんだ。長崎―上海間は普通電報で5分で着く。長崎の電信局に聯合支局のボーイを待機させ、電報が入ったらすぐ自転車で支局へ飛んでいく。2人いるから交代で配達人の代わりをやっていた。至急電報の代わりに人間を使っていたわけだ。

板垣 あれは大した着想だったな。

塚本 ところで下関に何で支局を作ったかということですが、大阪―福岡間は電話線が2回線しかない。予約電話はある限度以上は絶対に許されないし、欲しい時間がとれない。仕方がないから大阪―下関をとり、下関を中継ぎにして大阪―福岡間の補助ということで下関支局を作った。福岡から長崎は1回線しかない。その福長間に聯合は十分な時間の予約電話を先にとっている。電通はとうろと思ってもとれない。それをカバーするため電通は門司に支局を作り、大阪―門司、門司―長崎という

電話連絡でいった。

山口 大阪―門司は先に電通が専用線になったんじゃないか。

塚本 専用線は大阪―福岡間しかなかった。

山口 大阪―門司が福岡まで延長された。

塚本 そういう理由で変な所に支局ができた。

山口 下関支局は大阪―下関、下関―福岡、福岡―長崎という連絡だけになる。下関は支局としては小さいけれど仕事は相当面倒なことがあった。株の短期「歩み」¹⁹通信とかの関係になると、なおさら面倒になる。

塚本 大阪の相場は長崎を通して上海へ持っていくし、上海からも長崎経由で大阪へ持ってくる。市場の立会時間が決まっているから電報が着く時間を見計らってそれに合う時間の電話をとらなければならない。大阪の相場が長崎まで1分か30秒ぐらいで飛んでしまう。だから上海でもロイターはものすごい商売になったわけだ。

外電の分送始まる

板垣 分送制度は。

高橋 アメリカでできて、ケネディあたりが言い出したのをこちらでやるようになったんでしょ。同一宛名の電報が来たらこれを大阪のどこへやってくれということ、アメリカなどでできたものでしょう。

塚本 例えばニューヨークから東京に至急報が入り、アドレスはマークロイター・東京(MARKREUTER TOKYO)。これを東京電信局からマークロイター・大阪(MARKREUTER OSAKA)宛てに自動的に転電してくる。

板垣 お客さんから何も注文しないでも行くわけですね。

塚本 電信局と取り決めがある。ニューヨーク発の至急報で、こういうアドレスで来たものは必ず大阪へ転電するという。

山口 長崎へ転電するにしても経済電報だったらマークロイター。ニュースだったらロイター・上海、一方はマークロイター・上海。アドレスにしてもいちいち打っているから分かる。

塚本 ロンドンから地中海、インド洋を通じてシンガポール、香港に入って上海へ来るケーブルがある。グレート・イースタン海底電線。これでロイターは1日おそらく三、四千語と思うが、相当な語数のニュースを送っていた。これの宛名はファーロイストストップ・上海(FARREUT-STOP SHANGHAI)。上海ロイター支社へその電報が配達され、コピーが聯合上海支局へも来る。その中から、三、四千語は多過ぎて金もかかるから選り抜いて、急ぐ内容のニュースは長崎へ、急がないものは東京へ。経済物なら大阪へ転電という仕事を僕らがやっていた。私の前に結束さんが行ったのもそのためだ。

ストップの付いていないファーロイト・上海(FARREUT SHANGHAI)というアドレスの電報は自動的に上海から東京の聯合へ転電される。いわゆる分送制度だ。こういう便宜を外国の電信会社は図っていた。日本の通信省はこんな気の利いた制度を作らなかった。ケネディあたりが通信省へやかましく掛け合って東京―大阪間に始めさせた制度です。他の商社ではやっていない。

山口 長崎では向こうから来るものも転電すれば、同時に東京からニューヨークの至急報やなんか回ってくる。外国向けの三品の相場、砂糖とか株も若干来る。それで電通との競争になってきた。僕が長崎へ出張したときは、電通との競り合いがばつぱり始まりました。当時の予約電話は5分(後に3分になった)。長崎支局は当時、長崎ホテルの2階の一室を借りていた。長崎電信局の隣がグレート・ノーザン。競り合いは大正10年になってからで、ひどかったな。電話1通話5分間にボーイが長崎ホテルと長崎電信局の間(600-700)を10往復ぐらいしていた。

初め電通は株式で「寄り値」と「引け値」をまとめて打っていた。当方は片っ端から入信する度にぶった切って打った。金にかかるけれども非常に速い。電信局の窓口前に1人、元締めボーイ頭を置いていた。

第1の電報を窓口で申し込み、そのうち第2の電報が着くからアドレスを消して続けるという芸当をやった。これでつないでいくから電通は3番目、4番目になる。1本の電報に3本も4本も入れてしまう。電通さんはずっと遅れる。電通はやっきになる。その間に電通がいつ、何の銘柄を打っているか、調べた。ボーイには鉛筆を短くしてポケットの中のボール紙に字を書く練習をさせた。ボーイが書いたのを全部集めて暗号解読をやった。電通の暗号は実にちゃちで、3日ほど集めたら解読できた。打っている時間も分かる。時計を見て、うちはこれで5分勝った、10分勝っている。完全に当時の国際が勝っていたということなんだね。

当時、電通の長崎支局長をしていた近藤君（後に長崎新聞の編集局長と私が長崎電信局でぶつかったこともある。僕も自分で自転車を飛ばして行って監督したこともある。電信局で受付の係が後から来た電通の電報を先にした。電信局長にねじ込んでその係は左遷された。それほどエキサイトしたこともあった）。

塚本 電通が経済通信を始めたのは聯合になってからだろう。国際時代は大したことなかった。

高橋 僕が長崎ホテルへ行くと、事務所は2階にあった。階段を下りるのに大分時間がかかるというので、下までかごで落としたらどうかと行って、それをやったよ。

山口 ところが、ボーイがあそこにいるのは格好が悪くていかんというのでやめた。

板垣 次は「歩み」の件だね。どうしてああいうふうに採算を無視したことになるのだろうか。

塚本 採算は無視していなかった。こちらはもうかっていた。

山口 大いにもうけていた。さかのばれば、東川さんは帝国通信社と国際通信社の合併問題、これが相当あったと思う。電通には何をしてもかなわないということと、東京の新聞だけが国際のサービスを受けていたのでは合わないだろう。そうかと言って財界から十分に取ることもできない。帝通というのが良かったり悪かったり。とにかく帝通との合併問題があった。なぜ僕が知っているかと言うと、最初に僕が帝通と国際の両方を兼ねて、満州へ行けという命令を受けたわけだ。それで帝通とも打ち合わせをした。

板垣 電話連絡による相場速報はもうかっていたのか。

塚本 聯合の元々のお得意を顧客にして、中外商業新報²⁰が始めた相場速報は料金が5割ほど安かった。同盟通信ができ、中外社長の田中都吉さんが理事会長になった。それで中外の速報通信のお得意さんを同盟に譲ってくれたわけだ。そのために非常にお得意の数が増えた。もちろんただではない。権利金を出して譲り受けた。一購読者について何年分かの通信料に相当する金額の権利金を出して譲ってもらった。当時の何十万円という金額だったと思う。だから「歩み」の購読者は、多い時は六、七十件もあった。

山口 結局、「歩み」をやるという問題は、古野さんが内国通信をやるという不動の決意をしていたこと、内国の経済通信もやるということに端を発している。東川さんは外信専門。ここらあたりにも古野・東川抗争のもつれがあると思う。帝通問題から始まり、今度は商業通信社を買収していった。商通に対する考え方は古野さんに直接聞いた方が早いのが、要するに古野案は内国経済通信をやろうということだ。電通がもうけを上げているのはそこだ、と古野さんは言うんだ。国際、聯合の時は外国の経済電報で大阪は収入を上げている。電通はそれよりも内国通信で上

げている。だから地方の新聞を傘下に入れて聯合を大きくするには、どうしてもそれが入らないといかん。新聞の夕刊の1ページは相場通信だからそういうところをやろう、と言うんだ。けれども東川さんは決してうんと言わなかった。それが論争に表れてきているわけなんだ。東川さんが亡くなってからだよ、それは。

板垣 当時へっばこ記者で、私たちにはよく分からないんだが、東川・古野論争を大阪でみて、どうだったのか。

反目し合う東京と大阪

山口 その問題に一番タッチしたのは僕だ。僕が東京と大阪を行ったり来たりしたのはそこにある。僕が東京へ転任することになると、東川さんが「ざつくばらん話だが、古野なんか訳の分からない金を使うやつ」の所に行つてどうするんだ」と言うんだ。東京から大阪へ転任ということになると、今度は古野とか不破が「何だ。東川の所へ行くのか」とぼろくそに言うんだ。

僕が満州行きという話になり、大連に川島信太郎がいた。帝通の件もあったが、古野さんから行く前に東川と打ち合わせをしろというので、大阪へ行つて東川さんに会ったら「君が行けば川島を結局、首にするか、辞めさせるかどっちかになるだろうから自分のところにいてくれないか」とやかましく言う。「じゃあ、あなたから東京へ言ってもらいたい」と言つた。東京は東京で「東川がそう言うんなら仕方がない」ということで、また大阪支社の支配人付になり、その後、新聞部長になった。

東川が大阪に来るに至つたのも、東京でいびり出されたのだ。内幸町にいる新聞部の連中が、毛利^{もうり}八十太郎^{やそたろう}をはじめ東川を非常に嫌っていた。僕が入ったときには毛利氏は英文毎日へ移っていた。総支配人のケネ

ディは東川さんに大阪でコマース・サービス^{サービス}を徹底的にやったらどうかと指示したそうだ。

東川さんは大阪へ来て住友の八代氏をはじめ財界の有力者に会つたら皆、「われわれが国際に金を出しているのは、ニュース・サービスをやらせようためだ。国家の情報機関としてやらせようためだ、コマース・サービスで金をもうけるなどんでもない」とぼろくそに言われた。だから東川さんは非常な苦勞をして、大阪で外国経済通信を築き上げたんだ。東京本社時代になぜ古野らとの間が非常に悪かったかということについては、私は詳^{まこと}らかでない。

私は、東川さんも古野さんも非常に傑出した人であり、社を担う両翼だから、何とかして和解をさせなければ聯合のためにならんと思つて、決死の覚悟で専務理事の岩永裕吉に談判した。岩永は「分かつている。俺が適当な機会に片付ける」と度々言うけれどなかなか片付かない。そうこうしているうちに東川さんは腎臓が元々悪くて休みだし、ついに大阪大学病院に入院する直前、どうも彼の状態が悪いからと岩永に強硬に談判した。それで岩永さんが東川を東京へ呼んで話をした。そうしたら東川さんが東京から帰ってくるなり、朝出てきた僕に部屋へ来てくれと言ふ。すると「いやどうも山口君、いろいろ心配をかけたけれども、もうこれからは私も新聞通信にもっと力を入れてやる。古野君にも協力する」ということを初めて言つた。残念ながら東川さんの亡くなる年だ。

板垣 岩永邸会談というのは本当ですか。

山口 そうです。

板垣 経緯はよく分からないが、私は簡単に割り切っている。古野はナショナル・ニュース・エージェンシーを岩永と一緒に作るということを二人で固く誓い合つた。古野の頭には、外国通信の相場だとか何だとかだけ考えているナショナル・ニュース・エージェンシーというものはあ

り得ない。東川の言ったように赤字になるかも分らないし、大阪で一生懸命稼いだ金を空費することになるかも分らない。しかし、どうしてもナショナル・ニュース・エージェンシーにするという理想を持って、

一方はその間の採算を無視したが、一方は自分の足で歩いて、汗を流して縋々と築いたものを、みすみす乱費されと思ったからだ。しかしナショナル・ニュース・エージェンシーを作るという理想は、果たして実現するかしないか、これは分らないわけだ。僕はどちらもいいという考えだが、これがああいふ論争が起きた原因だと解釈している。

山口 東京の編集部の中がどういふわけで東川を排撃したのかは知らないが、東川さんは非常に頭へきっているんだ。ケネディも「お前も東京ではやってくれたんだけど、コマース・サービスで頑張って見返してやれ」ということで東川さんを激励したらしい。東川さんの入院直前にやっと和解ができた。

板垣 その事情が分らない。どういふことだったか。

塚本 聯合ができて間もなく始まったことですね。

山口 いやその前から。

塚本 その前に古野さんが北京に一年半かそこら、ロンドンにも同じくらい特派員として駐在していて、結局、国際の末期は古野さんは日本にいなかった。聯合ができる少し前に古野さんは帰ってきた。関東大震災直後、北京から帰ったんだが、またすぐロンドンへ行った。大正13、14年はいなかったね。

山口 僕らが入る以前からその問題があったんだ。だからそれは今でこそナショナル・ニュース・エージェンシーといふことを言えるけど、当時はそんなものじゃない、非常に感情的なものなんだ。最初の起こりは

長林 編集部は土肥常温だね。

山口 土肥常温は東川といふんだが。

板垣 東川さんは内信²¹を始めるのには反対だった。非常に金がかかるということで、そういうことはよく話していたのか。

塚本 われわれ大阪が経済通信でもうけたものを東京が浪費する。口に出してはつきり言ったね。

長林 それはその通りなんだから。

塚本 これは僕の想像だけれども、ケネディが本社の総支配人でいたでしょう。大阪支社支配人は東川さんが1人いた。古野さんは日本にいない。国際の仕事当初、ケネディはロイターの東京通信員のような資格でやっていたんじゃないか。ロイター通信の日本におけるプレスポンドントとして自分の計算でやっていたのではないかという気がする。

しかし、国際という株式会社ができからそういうわけにいかない。入る電報はみんなロイターだ。そのロイターという名前を抜こうと思つて岩永、古野両氏は一生懸命になった。ところが莫大な権利金^{ばくち}を要求される。対等の地位を確立しなければ、ニュース交換の相互契約はできない。そのためには、いわゆるナショナル・ニュース・エージェンシーとして日本のニュースを自分たちが集めて、これを供給するぞという立場にならなきゃ、とてもロイターとまともに話ができない、というところに出発点があったと思う。

大阪に新聞部

板垣 さっき出た土肥の話だが、新聞部は1回なくなる。1回できて、それがつぶれたのはどういうわけか。

高橋 外務省からの補助金がなくなるか何かしたんじゃないか。

山口 京町堀に新聞部の別館があった。

塚本 京町堀1丁目の本屋の2階で、土屋元作氏とか風見章氏とか2、

3人いた。

板垣 それは外務省の補助金によってできたのか。

塚本 外信の配布だ。新聞社に対する。

板垣 それが新聞部？

山口 外国電報の配信だ。ニュース・ギャザリング（取材活動）はしていなかった。

高橋 そういうために外務省から少し金が出るようになって、大阪の機構を広げただろう。

山口 昭和3年1月に大阪の新聞部ができて大賀知周が来た。東京は徳光衣城が内信部長の時だ。大阪は西部総支配人ということで東川さん、僕は西部総支配人付ということで、新聞部ができてからその仕事を若干兼務した。新聞部はニュース・ギャザリングをやり出した。大賀の時は、大阪じゃこれという仕事はしていなかったな。

板垣 あなたが部長になったときに、本格的にすべてのニュースをやるということになったのか。

山口 やることになった。盛んに力を入れだした。それで梁山泊^{りやうざんぱく}ができてしまったわけだ。

板垣 同じ新聞部と言うが、内容が別だから分らないんだ。

山口 東川さんの経済部に対する新聞部なんだ。

塚本 経済通信をやっているところへ、新しく新聞通信を始めたから新聞部と言ったんだ。

山口 要するにニュース・サービスだから新聞でいいじゃないかということ、新聞部になった。従って『通信社史』にあるのはちょっと意味が違う。

板垣 「歩み」の担当は。

山口 私だ。あれは誰も引き受ける者がなくなったからだ。あれは聯合

時代だね、江商ビルだったか。

板垣 一つはつきり覚えているのは、電通に人絹、砂糖のお得意様をゴソツと取られた。僕は山口さんに呼ばれて奪還してこいと言われた。僕は「歩み」の係でないから、ごめん被ると言った。

山口 あの時板垣君のほか石田君にも頼んだ。人絹通信や砂糖通信。

板垣 そこで（得意先に）行ったら、こういうことを言うんだ。「電通のニュースがデマであろうとヨタであろうと、そんなことはわれわれの知ったことじゃない。それによって相場が動きやすいんだ」と。今でもはつきり覚えている。「それがニュースだ、君。よく分からんか」と言うんだ。

塚本 相場の上げ下げの材料になれば何でもいいんだ。

板垣 「お前のところは正確だ、正確だと言ってるけれど材料が株を動かし、三品の相場を動かす。材料、何にもないじゃないか。ところが電通はヨタ通信を一番先に教えてくれるから、それによって動く」と言うのだ。

山口 言い換えれば、聯合よりも電通の方が浸透していたということなんだな。

塚本 電通はUPからニュースをとっていたから、UPの性格が電通に映っている。それはAPとの差なんだ。

山口 東川さんのときからこっちが独占していた砂糖通信を電通が全部ひっくり返した。電話通信でやるというので、塚本君が支社長兼外経部長をやっているときに騒ぎになった。古野もたまたま来ていて大会議となった。「歩み」通信のために電話はそろえてあり、古野さんがともかくやってくれということで、翌日、初っ端^{はなはな}から電話で全部入れた。東京、名古屋の砂糖、外電からジャンジャンやらせたんだ。そしたら電通の電話がつかないんだ。結局、1日で勝負はついた。後になって電通の

連中は、みんな知っている仲だから、「あの時はひどい目に遭った、社長の光永にも怒られた」と言っていた。

塚本 聯合時代の収入のおよそ半分が経済通信。同盟になってからは政府の補助金が対外放送部門に出たので、収入の3分の1が経済通信、3分の1が新聞部門で、3分の1が政府の補助。およそそういう見当だった。聯合時代は、支出の面からは経済部の支出が少なくて、新聞の方の支出が多かった。

板垣 原価計算でいくと、政府が当然やるべきものを同盟が代行した数字を除くと、明らかに経済通信の方が多かった。

山口 大連支局も大阪管下だった。

関東大震災でスクープ

板垣 是非、『通信社史』に残しておきたいということはないか。

高橋 地震の時のことなんか載っているかね。

山口 大正12年8月末、僕は帝通の特派員も兼ねて大連へ行くため長崎に打ち合わせに行った。さて大連に向けてたとうという瞬間に地震だ。東川さんからの命令で、すぐに佐世保へ行き、佐世保鎮守府の無電で入ってくるものを全部もらえという。鎮守府の無線電信所長に会った。鎮守府の1階に所長室があり、少佐がいた。それでこうこうだ、と言ったところ、みんな見せましよう、というわけだ。

翌朝、私が7時ごろに行ったら何もなし。所長も来ていない。所長のそばの椅子に腰かけていると、水兵が敬礼して持ってきたのが横文字の電報だ。私は横文字に弱いからなあと言うと、黙って所長の机の上に電文を置いていった。ひよっと見たら米国大統領ハーディングから陛下への親電だ。「アメリカは全力を挙げて日本の救援に当たる」とある。今日

では親電は何ともないだろうが、当時はどれくらいものだから、大急ぎで写して帰り、宿からすぐ長崎支局へ電話した。支局からは大阪へ連絡した。

板垣 東京はどうしたのか。

山口 東京は電話で連絡がついた。結局、佐世保あたりで号外が出たのが午前10時ごろ。私の送ったものを東川さんが自ら翻訳して、自分の責任で出すからということで送信した。東京をはじめ全国で号外を出したんだ。これが宮内省に入り、何時ごろ陛下に執奏されるかということをお願い合わせた。僕はまた鎮守府へ引き返した。所長が来ていた。「それは何ですか、英文の物は」と机上の親電を指したら「これは何でもありません」と言っただけで裏返すんだ。これなら他には見せないと安心した。そうこうしているうちに号外が来た。「国際通信」とクレジットされた親電だ。「ほう、やっぱりあなたのところは速いですな」と所長は言うけれども、目の前のやつだろう(笑)。

東川さんからは殊勲甲で金一封を頂戴したが、わずか15円だよ、特賞が(笑)。長官が出てきたのが10時近くで、所長がその電報を持って慌てて長官室へ行った。入電したのは日本中で佐世保以外どこにもない。親電だから「エンペラー、ジャパン」というアドレスが書いてあって、最後に「ハーディング、プレジデント」と書いてある、執奏されたのが午後3時。これは非常なスクープになった。

板垣 世紀のスクープだな。

山口 それで嘉一さんから15円だ。震災電報は長崎で全部中継してみんな外国へ送った。東京から情報がいろいろ来るだろう、それを東川さん自らが書いた英語の電文だ。

板垣 一般のコレポンのほかにそういうこともできたのか。

山口 英語は達者なものだ。あれだけの電報を英文で書ける人は恐らく

いないだろうね。

塚本 あの人の英語は大したものだ。

高橋 東京との予約電話がつかまらない。その前にグラグラときたのでしよう。早速、電話局と電信局へ聞いた。そうしたら静岡以東、全部不通というんで、東川さんに言った。これは東京に大地震があったというんだ、Heavy earthquake Tokio telegraph Between Tokio Osaka all interrupted. ところが電報をロイター上海宛てに出した。それがロンドンへ届いた第一報だ。

山口 長崎経由で打っていた。僕の方で転電したんだ。何と言っても、その時の大阪支社の働き方は大したものだった。その時、東京への連絡は皆、船の無線を使えということ saying 言ってきただろう。あらゆるものを使えということで、随分考えた。それが後々、例えば室戸台風（1934 昭和9年9月21日）でも非常に役に立った。当時九州日報にいたが、そういう知恵が非常に役立った。

板垣 室戸台風の記事を書いたのは僕だ。今でも覚えているけれども、「商都大阪一瞬にして廃土と化す」と書いたら、それはちょっとひどすぎないかと。「廃土と化す」って、昔はやったでしょう。あの時、僕は30分くらい考えて、死者千人と打った。電通は1万と打った。しかしなかなか千人にならない。後からAP、UPが1万と出して、聯合が千人と出した。ところが900人くらいで、なかなか千人にならない。1週間ぐらいかかってようやくなくなった。

山口 もう一つ、陸軍の異動を大阪から出したことがある。これはやっぱり一種の大きなスクープだった。あの時は漏れたんじゃない。私が九州日報の編集局長になって行っているとき、久留米の独立山砲の連隊長になってきた和田という中佐がいた。寺内（寿二）が陸軍大臣の時だけど、東京の情報部にいた和田中佐が転任して来て、聯合をオミットしたんだ。

それでわしは怒って怒鳴りつけたんだ。そしたらびっくりして必ず埋め合わせをしますから、ということだった。

和田は夕刊に入らないつもりで陸軍異動を3時までによこしたんだ。東京専用線だろう。あらかじめ東京を待たせておいてパーンと入れたから東京、大阪の夕刊に入っちゃった。

塚本 僕は岩永さんの思い出を一つ。1930年にロンドンで軍縮会議があり、岩永さんが聯合の代表で出席した。僕はその時ベルリン支局長。軍縮交渉は何カ月かかったのだろう。その間、是非いっぺんロンドンへやって来い、来たらロンドンを見物させてやるという手紙が岩永さんから来たけれども、僕が行かないものだから、催促の電報が来た。今度は忙しいと言って断った。会議が終わって岩永さんがロンドンから日本へ帰る途中、ドイツへ立ち寄るので、ベルリンへ汽車で着く時間を電報で知らせたが、僕は迎えに行かなかった。

ベルリンのウンター・デン・リンデンにホテル・アドロンという立派なホテルがある。そこへ岩永さんが着いてから僕はホテルに行くと、今朝、駅へ迎えに来んじゃないかと言う。「岩永専務、誠に済みませんが、あなたは僕に、ベルリンへ行っても英語で役に立つと言って、僕をベルリンの支局長へ出されたではないか。ところがベルリンへ来てみると、英語なんか全然通じない、ドイツ語でなかったら仕事ができない。仕方がないから毎日3時間ずつ、ベルリン大学へ行っている。勉強の時間だから駅へ迎えに行けなかった」と言ったら、岩永さんはしょうのないやつだと苦笑していた。それだけが思い出だ。

高橋 後で「塚本というやつは偉いやつだ。ドイツ語すっかりできとる」と言ってたよ。

（新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」）

大震災で大阪は非常態勢―座談会補足

高橋勇（元国際通信大阪支社連絡係主任）

（編集者注）座談会「大阪で活躍した人々」に出席した高橋勇は座談会速記録の末尾に「高橋独語」と題する文を追加した。内容は座談会を補足するものだが、一編の独立した手記として掲載する。

上海ロイターへ関東大地震の第一報を打電したことは別記（座談会）の通りであるが、当時ホヤホヤのわれわれは東川嘉一さんの記者眼に敬服したことがあった。それからの大阪支社は大変の一語に尽きる。矢継ぎ早にじゃんじんと上海へ、福岡、長崎経由で打電し、私はその日、社の机の上に寝た。翌早朝、東川さんが出社されたので、驚いて聞くと、昨夜は大阪ホテルへ泊まったとのこと。大阪支社は非常態勢に入ったわけだ。私はそれから約2カ月、三度の食事は社で食ったと記憶している。本社からは結束武二郎、相良左、土田金雄の3君が交代で大阪支社を訪れ、外電翻訳に当たった。外国通信員もたいてい1名は大阪支社にいて、大阪から地震の記事を打電していた。ウィリアム・ターナー君もいたことがある。誰だったか、大阪からの電報に「Eye Witness Story」として打電したことを覚えている。そうこうするうちに東川さんは過労のために社で倒れ、狭い小使い室が病室になり、夫人が看護のため京都より駆け付ける始末となった。

地震直後（当日だったと思うが）、名古屋の主任小松半次郎君が支配人命令で東京へ急派された。第2、3班は大阪支社から出された。通信機関が途絶して、東京や横浜のことが一切分からなかったためである。大阪

の第2、第3班は大阪府、市の慰問団に合流した。

大阪支社としては本社と、恐らく横浜もつづけたという最悪の事態を想像して、両者が立ち直れるまで大阪支社で面倒を見なければならぬという考えから、支配人命令でモラトリウムが敷かれることになった。給与の半額支給、半額棚上げである。もっとも後で東京との電話が開通し、ケネディ・東川会談の結果、その必要なしとのことで、われわれの月給半額支給は一回だけで済んだのでヤレヤレであった。

東京との予約電話が初めて復旧開通した時、私が電話に出ると、結束君が東川君を呼んでくれと怒鳴った。「俺だ。高橋だ。東川さんは寝込んでおる」と怒鳴り返すと、「横浜の東川君のお母さんは無事だ」と怒鳴った。私は大声でこれを反復し、僚友に東川さんへの伝言を頼んだことを思い出す。東川さんは社務の外に、母堂の安否を気遣う一事が胸の中にしこりとなっていたのだ。

江商ビル時代の新聞聯合と電通との外経競争は激烈を極めた。食うか食われるか必死の戦いだったと今でも思っている。当時、ニューヨークの至急報を除く他の一切の経済電報は大阪へ集中入電していた。私は経済連絡の責任者として数年、電聯合併、真の同盟一本になるまで春夏秋冬、毎朝5時半に出社し、一切の外経相場に目を通し、誤りの絶無を期し、聯合の声価を高めることに努めた。電通との競争にも勝ち抜いたと今でも確信している。もちろん私一人でできたわけではない。部下に天下に誇るべき俊秀な若者が集まっていた。上野伊三郎君を筆頭に大富信二、林悦次郎、高野小次郎、西向種吉の諸君である。

当時経費の關係でニューヨークの外経情報は電報料の安いプレスワイヤレスに依存していた。これは放送である關係上、どうしても虫食いが避けられない。ところが東京で受信したものを大阪の社内直接受信してみると、案外虫食いがいることがある。わが社のオペレーターの優秀

さにもよるが、他にもいろいろと関係があるのであろうが、いずれにしても両者をまとめると、ほぼ完全なものになるので、早朝受信を励行した。受信者は戴頭受話器を両耳にして欧文のタイプ受信である。

もう一つ、小林徳宝君が遊んでいたのも、これを起用し、真夜中にロイターのシンガポール放送を直接受信させることにした。何日かのテストの結果、これにも成功し、使用暗号も上野君の努力により解読に成功することができるようになり（後で正式にロイターより使用暗号書を取り寄せたが、当方解読の通りであった）、ロンドン物の相場類のチェックに役立たせた。

私の入社当時の大正7（1918）年10月、通信関係は笠井、半田の両君、会計に伊勢田さんと速記者に神田、安藤の両老の5名と、發送ボーイ若干という小陣容。外に顧問格として土屋元作、荒川重秀の両老が時折、顔を見せていた。土屋さんは朝日の記者としても知られているが、荒川さんは札幌出の農学士。川上貞奴らと一諸に芝居をしたこともあり、国際通信時代、京都帝大へ通学して法学士の学位を取った人で、ともかく異なった人であった。

私の入社当時は電信が極度に輻輳していたため、ニューヨークの米綿相場の前場の寄り付きとか正午の相場が、翌日の午後にポツンポツンと入電していた。私は会計と配達はやらなかったが、他は何でもやった。

私が入社して仕事らしい仕事をやったのは、中電（大阪中央電信局）と国際の市内専用電信線の開設であった。関西では初めてのことから、様子が分からず困ったものであった。それから東川さんに頼まれて先輩小松半次郎君を推薦、同君は私より2カ月遅く12月に入社した。同君はバーチカル・チェックの発案者としても記憶されてよいが、国際、聯合時代を通じて、唯一の業務人として、購読者の勧誘、新聞通信の市場調査開拓などについて、相当の功績があったのではないかと今でも思っている。

いる。不幸にも聯合の立川ビル時代に退社となった。経費節約の犠牲となったのではなからうか。

ポツポツと連絡機構が整備されるにつれて人員が不足して来た。支配人の命のままに何人かの人員を推薦、採用してもらった。先輩の中より升井芳平、塚本義隆、鷹嘴寿の3君が入社した。後年、聯合、同盟の要人として重きをなした。他に若い連中も何名かいたが、担当部門の廃止とか経費節約の犠牲とかで、速記をマスターして朝日へ速記者として入社するとか、また日本で初めてラジオ放送が始まるので、その方面へ転職するとかで、同盟へ引き継いだのは近藤君だけ。結局、国際から同盟まで存続したのは升井、鷹嘴、塚本、近藤と私の5名にすぎない。

大阪で極東オリンピック大会があった時、東川さんの指示によって経済連絡部も協力することになった。コードの作成はもちろんだが、中国人選手の名を「支那声音字彙」によって北京の標準発音を調べ上げて表にしたことを思い出した。塚本、升井の両君に手伝ってもらった。たまたま私が大阪外語の支那語科（別科2年）を出て上記の字彙を2冊持っていたためである。

当時は大阪―福岡間の市外電話は蚊の鳴くようなものであり、英語の大家でもないため、予約電話での英文受信は難渋を極めたものである。戴頭受話器を右耳に、普通受話器を左耳にし、全神経を集中して受けるわけだが、それでも十分に聞き取れないことがあると、英語のスペルをいちいち言ってもらって書いたものである。私は右の耳と左の耳で形が違う。右の内耳核が左に比べて非常に発達している。昔の連絡係がそれほど苦労したことを如実に示しているのである。

（新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」）

岩永さんの合服

かみむら
上村 藤吉（元国際通信総務局）

岩永裕吉さんは関東大震災の直後、国際通信社の専務理事として就任され、直ちに諸般の改革に着手された。忙しい中であつて岩永さんは、ほとんど毎週300円の自筆の小切手を、当時出納係をしていた私のところへ持って来られ、「銀行へ行く時間がないから現金に換えてくれなしか」ということだった。こんなふうには毎週お小遣いを使つたのでは、800円の月給を全部小遣いにしてもまだ足りないのではないかと心配した。

ところがある日「これを銀行へ預けておいてくれないか」と頼まれ、中味を見たら何と〇〇製紙何万円、〇〇製糖何万円というように、配当金の受領書が何枚もあった。「ああ、これなら大丈夫だなあ」と出納係もやっと安心する始末。

岩永さんは時たま手のすいたとき、総務局へ来られ、空いている椅子に腰掛けて、女子社員の不在を確かめながら軽妙な柔らかな話をされた。これは岩永さんが「人間、堅苦しいだけが能ではないぞ」と教えておられた場面であつた。岩永さんは、招待したお客さんを帰した後、夜の8時、9時ごろにちよいちよい会社へ立ち寄つて編集や総務を一巡された。そんなとき、居残つて伝票整理や計算などをしてしていると「もう仕事はやめて一緒に帰ろう」と誘つてくださる。初めは「もう少しで仕事は終わりますから」とお断りしていたが、「どうせ途中で降りればよいのだから遠慮には及ばないよ」といわれ、何度もクライスラーやビュイックの新車に乗せていただいた。

古野伊之助さんがロンドン特派員の仕事を終えて東京へ戻られたのは初夏の頃で、合服あひやくでないと少し汗ばみそうであつた。早速新橋の博品館はくひんかんへ行かれ、出来合いのつるしの服を着てみたらドンピシャリ。そのはずである。古野さんは日本人の標準型の体格である。白に灰色のかつた合服、上下1着で45円という代物だったが、5分刈りの頭とよく似合つてなかなか、いかす格好に見えた。岩永さんが「君、その服、ロンドンで買ったのかね」と尋ねられたら、古野さんは「ええ」と聞き流すふうであつた。

早速、岩永さんは古野さんの合服に似たような服を注文された。恐らく250円以上の合服であつただろう（原注Ⅱ当時大学卒の初任給は45円ぐらい）。

新聞聯合の初期の頃、長崎支局の若い社員が土地の若い芸者と心中した事件があつた。その社員に互助会から弔慰金を支出すべきかどうかについて、庶務部長と経理部長が協議したが、なかなか結論が出なかつた。そこへ偶然、古野さんが入室してきた。話を聞いた古野さんは「死ぬということはよくよくなことだ。一つしかない命を棒に振つたのだから、他の理屈は抜きにして、早速弔慰金は出してやりたまえ」ということで即座に決定した。

（新聞通信調査会報」第276号 1985年11月1日発行）

「岩永裕吉論」―「報道の独立」と「国家意識」

世界の通信社と対等な「ナショナル・ニュース・エージェンシー」(国家代表通信社)の実現に生涯をかけた同盟通信社初代社長、岩永裕吉(1883-1939)は代々、医師として肥前大村藩に仕えた長与家に生まれた。父、長与専斎は緒方洪庵の適塾で塾頭を務め、長崎でオランダ人ポンペのもとで西洋医学を学んだ医師。維新後は岩倉使節団の一員として欧米を歴訪して近代医学や衛生行政を視察し、帰国後は内務省衛生局の初代局長、東京医学校(現東京大学医学部)校長などを歴任した。明治政府の先進的官僚の一人であり、新国家の衛生行政に大きな足跡を残した。

専斎の四男である裕吉は6歳のとき、母園子の弟岩永省一の養子となった。省一は日本郵船の専務取締役を務めた海運業界の功労者で、裕吉に莫大な資産を残している。長与専斎の国家建設者としての精神、実業家岩永省一の遺産は裕吉を支えた2本の太い柱となった。

岩永は一高から京都帝国大学に進学。一高時代の英語教師は夏目漱石、同級生には鶴見祐輔らがいた。大学卒業後、文官高等試験(高文)に合格するまでの間、一高の同級生らとともに内村鑑三の聖書講読、新渡戸稲造の読書会に参加したことは、岩永の精神形成に大きな影響を与えたとされる。

追悼論集『岩永裕吉君』(1941年9月、岩永の思想と行動が敗戦前の価値観によって記録された貴重な資料)によれば、生涯持ち続けたキリスト教的ヒューマニズム、理想主義、国際的な視点の原点はここに

あった。新渡戸を介して一高の後輩にあたる近衛文磨とも知り合っている。

岩永の人生を左右したもう一人の人物が後藤新平である。岩永は高文合格後、南満州鉄道(満鉄)に就職するが、就職に際しては、かつて長与専斎が内務省衛生局長に抜擢した後藤新平の推薦があった。

満鉄初代総裁で通信、内務、外務の各大臣を歴任し、東京市長も務めた後藤は、専斎に強い恩義を感じていたといい、折に触れて岩永をバックアップした。鉄道院総裁のときには岩永を秘書官に据え、1918年の外遊には鉄道院を退官した岩永も途中から加わっている。岩永は「大風呂敷」といわれた後藤の雄大な計画、事業遂行の熱意、満州経営に関する考え方などに直接、触れたわけだ。

国家意識と倫理性

満鉄では本社勤務前の4年3カ月、長春駅の助役、駅長を務めた。「長春駅長として、君の仕事振りはあくまで国家本位であった。自ら満鉄総裁を以って任じ、総裁の心持ちで一駅長の任務と責任を果たしたのである」(追悼論集)という。一方で、「君は当時尚、内村鑑三先生門下の厳格なクリスチャンとして、放逸な植民地の環境の中におけるその清教徒ぶりは、相当周囲を驚かした」(同)とも。酒席には出ず、駅の宴会では絶対に酒を出さなかったらしい。精神に根付いた国家意識と厳格な倫理性を物語る逸話だ。

青年時代から中国に強い関心を持っていた岩永は、満鉄時代に中国の現実を見るとともに満州経営の実情を知った。

その結果、1915年に日本政府が中国に突き付けた21カ条要求について、一高時代の友人金井清への手紙で「僕は全然賛成だと云



創立直後の同盟通信社幹部。岩永裕吉社長（手前）。（後列左から）常務理事の古野伊之助、上田碩三、畠山敏行、堀義貴＝1937（昭和12）年1月

ふと、或いは意外に思ふかもしれないが、（中略）結局かくまで墮落した国民は、到底早晚国家として滅亡を免れぬ「然らば其の時支那に主権を振ふものは誰かと云ふ問題になる。僕は之を思ふと日本は今の絶好の時機に於て日本の支那に於ける優勢なる地位を確保して置く事が、日本の国家存立のより必要であると思ふ」との意見を述べている。

内村鑑三、新渡戸稲造に傾倒した一高時代の仲間の多くは、政府の対中政策に批判的だったのだろう。しかし、これは岩永が帝国主

義者だったということではなく、リベラルな知識人の中にもこうした中国観が存在していたと理解する方が現実には即しているのではないか。

「岩永通信」

外遊で第1次大戦後の世界情勢を目の当たりにし、国際世論形成のため報道の重要さを知った岩永は帰国後、満鉄に戻らず、海外、特に米国の事情を国内に伝え、日本の考えを海外に知らせる冊子「岩永通信」の発刊に踏み切った。この決断には危惧する声もあった。しかし、世界は大きな転機を迎えており、真に国民の耳となり口となって日本を世界に語り、世界を日本に伝えることこそ「帝国の国際的地位」を向上させる国家的使命だと確信するに至った、という。

「岩永通信」は「綱領」で「独立非営利の通信機関なるが故に、如何なる政府、団体又は個人よりも、何等の掣肘又は物質上の援助を受けず」と宣言。「通信は総て的確に事実に拠り、政略又は利害の為にこれを曲庇せず、又意見を外国に紹介するときは、努めて公平率直なる資料を選び、阿諛偏頗の論議を避く」とうたっている。

これは国際通信社、新聞聯合社を経て同盟に至るまで、岩永が理想として持ち続けた基本姿勢となる。追悼論集で、同盟外信部の岩本清は「叱られた思い出」としてあるエピソードを紹介している。

日中戦争が始まって間もない頃、岩永は「欧米各国を巡歴して借款交渉に狂奔した孔祥熙は今回帰国の途次当地に立ち寄り、あくまで対日抗戦の必要を呼号し、…等と泣き言をならべている…」と報じた同盟シンガポール電を見て激怒。外信部デスクの岩本を呼び、「如何に敵国人とはいえ、狂奔とは何だ。泣き言とは何事だ。こん

なことではせっかく我々が辛苦して築いてきたハイトーンのジャーナリズムも台無しだ。他社の連中がどんなことを書こうとも、君たちには断じてこんな言葉は使ってもらいたくない」と一喝した。

日中戦争が長期化し、軍との関係が強まるにつれ、岩永の基本姿勢と通信社運営の間に矛盾、軋轢あつれきが深まる。「報道」が「宣伝」の色彩を強く帯びるようになるが、「事実に基づく公平率直な報道」は岩永個人の変わらぬ原則であったことは否定できない。

国際専務就任を躊躇

1923年11月、岩永は国際通信の専務取締役（専務取締役）に就任し、本格的に通信社経営に乗り出した。

国際は、世界に日本を語る「国際的通信機関」設立の必要を痛感していた渋沢栄一が中心となり、牧野伸顕のぶあき、井上準之助、樺山愛輔あいすけ、団琢磨だんさくら財界人に協力を求め、1914年に設立された。

総支配人はAP通信（米東京支局長だったジョン・ラッセル・ケネディ。海外ニュースはロイター通信（英）と契約したが、この契約は他の外国通信社と契約を結ぶことや国内ニュースを海外に配信することができないなど極めて不平等な内容だった。

国際の設立目的からして契約改定は最優先課題であり、ドンブリ勘定だった経理の組織化も求められた。社内外からケネディに代わる経営者を求める声が強まり、取締役だった岩永に白羽の矢が立った。後に岩永を継いで同盟社長を務めた古野伊之助が説得に当たったが、当初は承諾しなかったという。

里見脩しゅうは中公新書『ニュース・エージェンシー』で、「経営事情が厳しいことは察知しており、はたして通信事業は生涯を賭けるに値

するか、資金的責任を負う覚悟ができるか、など懸念が去らず」と書いている。岩永は「岩永通信」発刊にあたって通信事業に進む決断をしており、むしろ財界出資の株式会社（当初は合資会社）で外務省の支援を得ていた運営方法への違和感が一因ではないだろうか。

いずれにしても、岩永は国際の経営を引き受け、ロイターとの不平等契約の解消、組織の刷新に取り組んだ。また、APの組織運営を研究し、新聞社が組合員として参加する非営利組織の設立にまい進した。AP初代総支配人メルビル・ストーンは以前から日本が列強に伍して独立を保つためにはナショナル・ニュース・エージェンシーの設立が急務との考えを持っており、この考えは岩永や古野の心を強く捉えた。その第一歩が東方通信社との合併だった。

東方は1914年、上海総領事が後援して上海で発足した。ドイツの中国における排日宣伝活動への対抗措置が目的で、日本語、中国語、英語の3カ国語でニュースを配信し、ドイツ系報道機関「東亜ロイド社」に対抗した。外務省は東方に年間45万〜50万円（さらに10万円程度を臨時支給、国際に30万円を「通信購読料」名目で支給しており、重複する事業解消の思惑もあって新通信社の設立に積極的だったという。

こうして1926年、東京、大阪の新聞社8社が参加した新聞協同組合主義の「日本新聞聯合社」（後に「新聞聯合社」と改称）が発足。非営利組織ではあったが、外務省からは引き続き年間30万円を上回る助成金が支給された。

聯合は国内ニュースの配信を始めたこともあり、毎年巨額の赤字を計上した。岩永は相続した資産を切り売りして穴埋めし、その額は「一時は百萬元近くになったであろう」（追悼論集）という。それでも

国の支援がなければ存続は難しく、この助成金体質は同盟に引き継がれることになる。

同盟設立への動き

社団法人同盟通信社は聯合と日本電報通信社(電通)のニュース部門が合併し、1936年に発足した。国内の通信社は同盟に統一され、岩永が各方面に創設を働きかけた「ナショナル・ニュース・エージェンシー」が実現したが、そこには満州事変後の暗い影がさしていた。

追悼論集はこの経緯を「陸軍、海軍、外務三省の情報機関が幹旋に乗り出したことから始まる。(中略)満州事変勃発を機として、三省情報関係代表者は、時局委員会といふ非公式会談を随時取り行っていたが、此の委員会は欧州大戦後の国際的宣行情勢、国内に於ける新聞通信社の現状、無線通信電話放送の発達に伴う技術的統制、とりわけ満州事変勃発後の我が国の対外的立場等について数次に亘り慎重に意見を交換した。この結果は驪^{やが}君の主張に一致し、電通聯合を超越する大通信社をつくること、その方法としては全国の新聞社通信社を糾合し、政府新聞通信界一体となって本計画を推進せしめるといふ根本方針が採択されるに至った」と記録している。

『通信社史』によると、陸軍、海軍、外務三省情報委員会は1932年9月、両社に対し「政府は百難を排してこれを実現せしむる決心である」「このさいぜひ新機関に、すべての特権を付与する意向である。万一にも『電通』『聯合』のいずれかがこの合併案に応ぜざる場合には、政府としてはやむをえずこれに応ずる通信社のみを基礎として新機関を設け、これにすべての国家的特権を付与すべき

決心を有している」とする提案を行った。

これは岩永の考えと「まったく同一」(追悼論集)だったといい、水面下の連携をうかがわせる。聯合は即座に応諾し、「報道上の独立と公正を期するため、須らく全国の新聞社を社員とする公益法人であることを要す」との意見を示した。電通、地方紙の抵抗で同盟誕生までには数年を要したが、当初から国家統制の色合いを帯びていたことが分かる。

満蒙通信社論

最後に、満州国通信社(国通)設立の基礎となった岩永の「満蒙通信社論」を取り上げる。岩永論文は満州事変勃発3カ月後の1931年12月、関東軍に提出され、満州における独占的な通信社の必要性を強く訴える内容となっている。

きっかけは同年11月、関東軍参謀部第4課長松井太久郎中佐が聯合特派員佐々木健児に「日本国内に対する広報がうまくいっていないものもさることながら、対外広報に至っては全く処置なしである。何とか事態の真相をわが方に有利に世界に知らせる方法はないものか」(『通信社史』)と相談したことだった。

問題の解決策として提出された岩永論文は、満州が中国から独立した地域となり、日本が指導的地位に立つという前提に立ち、体制の固まらない新政権が新聞通信に対して自由放任主義で臨めば、外国の通信社や営利目的の通信社によって無責任な報道が横行すると警告。「不逞分子の扇動に使喚さるゝものその跡を絶たざるべく、又満蒙の実相と我國の真意とは屢々海外に誤報、訛傳せられて満蒙新政権の外交関係に不測の障害を及ぼす惧れなしとせず」と指摘し

ている。

具体策として「少なくとも始政の当初数年の間は、満蒙に出入りする一切の『ニュース』を適当に統制管理する」ことが必要で、「政府の監督援護の下に強力有力なる通信社を設け、(中略)満蒙ニュースの供給は一々之に仰がざるべからざらしむことを以て、最上且つ唯一の方策」と結論づけている。政府公表のニュース報道で優先権を与え、無線電信の使用も独占させるという内容だ。

関東軍は岩永論文を採用、1932年12月、国通が設立された。満州においては国内に先んじて聯合と電通の組織、業務が統合され、国通に引き継がれることになった。岩永はあくまで満州に限定して論じているが、追悼論集が「国内に於ける単一国家代表通信機関創設の先鞭たり、その試金石たり得た」と評価しているのが目を引く。「欧米心酔論者」と見られていた岩永は、この論文によって「これを覆した」という。

岩永論文は聯合が軍に食い込むきっかけとなったとされるが、軍にとつては報道統制のノウハウを獲得する機会となった。とはいえ、満州経営者としての側面と軍との親和性が必ずしも一致するわけではなく、岩永は軍と一定の距離を置く姿勢を取っていた。

岩永は日中戦争の発端となった1937年の盧溝橋事件を心配し、近衛文麿首相らに拡大防止を進言。満州、モンゴルの国境線をめぐり日ソ両軍が衝突した1939年のノモンハン事件勃発の電報を手にしたときは、「とうとうやったか」とため息をつき、早期収束に向けて裏面工作に奔走したと伝えられる。

また、右腕だった古野が陸軍幹部と関係を深めたことも憂慮していたという。同盟の編集局長、常務理事を務めた松本重治^{シゲハル}は別冊新

聞研究No12「聴きとりでつづる新聞史」(1981年5月)で「あまり兵隊と仲良くなり過ぎるのは考えものだということを、ばくにいつていつておられました。(中略)古野さんのやり方は危なくて仕様がないつて考えを持っていたわけです」と振り返っている。

岩永は1939年9月、軽井沢の別邸で狭心症のため死去した。太平洋戦争と敗戦、「国策通信社」と呼ばれることになる同盟の運命を知らずにこの世を去り、経営は古野に引き継がれた。(安達功)

第2節 東方通信社

座談会 東方時代の思い出

1963(昭和38)年11月10日
同盟クラブ会議室で

(出席者)

波多博

(元東方通信主幹)

座間勝平

(元東方通信主幹)

折橋慶治

(元東方通信ハルビン支社長)

大川幸之助

(元新聞聯合庶務部長)

福岡誠一

(元国際通信新聞部)

佐々木健児

(元東方通信北京支社)

古野伊之助

(元国際通信北京支局主任・支局長、
元新聞聯合総支配人、元同盟通信社長)

❖ ❖ ❖

佐々木 最初に東方通信社創立前後の裏話を、『通信社史』には表面に出

た事情や若干の裏面のことも出ているが、なるべく重複しない形で、東方はどういう事情でできたのか、時の支那の状況というものは東方をどういう理由で必要としたのかというようなことを中心になるべく柔らかにお話したい。

福岡 最初は相当 りょうさんばく 梁山泊式のものだったと聞いたんですが。

波多 第1次欧州戦争(世界大戦)が大正3(1914)年7月に始まると、支那の新聞界は各国の宣伝が入りまじってにぎやかになった。特にドイツとオーストリア系が非常に露骨に白を黒というような宣伝をやった。支那の連中はそれに共鳴して、新聞で宣伝を盛んにやる。日本が参加した後は、日本を目の敵にしてそれをやった。それで当時の上海総領事の有吉明さんが「何とか日本側もやらなければいかん。通信社をやろう」と。それで大先輩の宗方小太郎さんに話があって、宗方さんは「必要だからやろうじゃないか」ということで、私は宗方さんの下で支那研究所というのをやっていたものですから引き受けて始めたんです。

最初は極めて小規模でね。上海だけなので1カ月の経費は千円足らず。支那の翻訳する人と若い人の2、3人で個人的な規模でやっていた。始めたのはいいが、支那の新聞がなかなか取ってくれない。日本人が宣伝

機関を始めたというので、なかなか取ってくれないので、新聞社に頼んで回った。当時、支那の新聞も規模は小さかった。「申報」とか「新聞報」は日本の新聞より古い歴史がある。なかなか相手にしてくれなかったが、主筆とか記者の中に知り合いがいたのでいろいろ頼んだ。しかし高い原稿料は払えないと言う。1社10円、10元ですね。それでも高いという。

格安のニュース料金

福岡 当時は銀だね。銀の10元ですね。どのくらいなんですかね。

波多 欧州戦争で銀が非常に高くなって領事館の連中も困った。

佐々木 アメリカドルよりも値が良かったときもあるんじゃないですか。

波多 副領事なんかあときは二、三百円の俸給で、銀に直すと半分ぐらいになる。それで日本円で手当をもらっている人は非常に困ってね。新聞社の特派員なんかは本社の方で事情を察してくれて適当な措置を取ったんだが、役所はなかなか厄介で時間がかかったようだ。それで10元というのは支那の新聞社は色よい返事をしなかった。



宗方小太郎

その時分、私が一番恩に感じているのは、後年「大公報」²⁴を主宰した胡霖と張季鸞。胡霖君が「大共和日報」という新聞を始めていたんだ。彼を私は知らなかったが、大共和日報に訪ねて行った。ボーイが事務室に引張っていった。見ると胡霖君がいて日本語を話すんだ。「何ですか」と言うので「こうこうだ」と言うと、先生、何だか非常に共鳴してくれて取ってくれたし、各新聞社にもいろいろと話をしてくれた。6社くらいだっただろうか。とにかくお話にならない安い通信料で最初を取ってもらった。

戦局が進み、日本が青島攻略^{チタウ}を始めた。どうしても日本の方が、ニュース供給源の便宜が多い。その頃になると、西田耕一という通訳官（後に済南総領事）が総領事館に來た何百通かの電報の中から、新聞に載るようなものを編集して渡してくれた。だから非常に豊富だった。ところが支那の新聞社は「電報が多すぎる」と言う。

仕事を始めたのが大正3年10月1日だった。東京電報を主として載せなければならぬ。東京電報を打つのに組織も何もない。それで鷺沢^{わしざわ}与四二君が時事新報¹⁴にいたので頼んでみた。時事新報には渋谷作助という人がいて、東京の電報を打ってくれるようになった。10月1日に「上海日々新聞」が東方と同じ日に発刊したが、上海日々¹⁵の社長の宮地寛道君は、有吉さんの奥さんの先生か何かで、有吉さんから宮地さんに口を利用してもらった。東京電報を上海日々を通じて東方に供給するという約束でやっていたが、これではどうしてもいけないものだから鷺沢君に頼んだ。1カ月くらいかかっただろうか、渋谷君が東京電報を打ってくれるようになった。

青島戦争が起きたので、戦争ニュースもなきやいかんということで、これを朝日新聞に頼んだ。朝日の特派員は中島為喜という人で、ずっと北京特派員をやっていた。私は知らなかったが、宗方さんが知っていた。

熊本で一緒だった。中島さんに頼んで、戦争ニュースを済南から打つようにしてもらった。やってみると青島や東京電報だけじゃ何だから、北京とか満州の方にも広げる。漢口も。新たに人を出すわけにいかないからそこにある新聞社に頼んで電報を打ってもらった。こちらからも交換で電報を打った。漢口は「おおかわ」さん、奉天は新旧時報・盛京時報の中島鎮雄さんが引き受けて、宇都宮房次郎君という代議士になった朝日の記者が名義人になった。北京も確か横山八郎君に頼んだと思う。3、4年かけて形はできた。最初は極めて思い付きだったです。

福岡 国際通信はまがりなりにもAPとかロイターで修業した人が考えついて始めたんだが、東方は全くの素人が始めたんだね。それでそれだけの通信部を作ったのだから大したものですよ。

座間 その時分、古野君は北京にいなかったかな。

福岡 それはまだずっと後だ。大正3年ごろは国際の初期のものができた頃だろう。

波多 だんだん戦局も進み、これを拡充しようということで、本社を東京に移して本格的にやろうということになった。

佐々木 東方が新しい機構になった。伊達源一郎さん、座間さんらがお入りになって、東京に本社が移ったのが大正9年8月ですね。古野伊之助さんが北京に行ったのは同じ年の6月。

福岡 波多さんのお話は本当の揺籠ようろう時代ですね。主として宗方さんと波多さんが自然発生的にやった通信社で、カイゼルのドイツと対抗したんだ。

北京、広東に支局

波多 大正7年、広東に支局をつくった。その前に北京支局をつくった

んだ。支局にして北京でもニュースを出すということで、大正6年の2月ごろ北京支局をつくった。横山君がやっていた。段祺瑞だんきずい内閣の時、張志譚ちようしたんという男が秘書長、交通部長は許世英きよせいえい。芳沢さんが参事官をしていたと思うが、支局をつくるには家がなければいかなので芳沢さんをお願いして段総理に会いに行った。

段総理は当時、日本とは良かった。西原借款²⁵ができる前後で、会ってくれて非常に賛成してくれた。家のことは秘書長の張志譚に会って話をしろと。総理のお声掛けりなので、張志譚先生は非常によく世話をしてくれた。今の中華門の西側の便利な所に大きな屋敷を選んくれた。外国人に家を貸すのを渋っていた時だったが、段総理からということで、大変広い屋敷を借りることになった。張志譚が「北京東方通信社」という看板を贈ってくれた。

そのころには大公報の張季鸞君が北京に来ていて、国会議員などやかましい人たちに渡りをつけてくれた。大正7年に広東支局をつくった。八田厚志が支局長。広東の上流に肇慶という所があるんだが、そこに国会議員の連中が段祺瑞政府に反対して政府をつくり、岑春煊しんゆんけんだったか、軍事政府の先生が総裁でならしていた。北京から100人余り、国民党系、反段祺瑞系の国会議員が広東に来て議會を開いた。広東の議長は呉景廉けいれんという奉天の人で、これが非常に力を入れてくれて、国民党系は上海で知っていたのがたくさんいたものだから大喜びでやってくれた。

蒋介石が軍官学校校長

福岡 大川君が行ったのは何年だ。

大川 初めは上海で波多さんに拾ってもらい、それが大正10年。東方の購読料が10元という話があったが、それは大正3、4年ごろの話でしょ

う。僕が10年の1月にお世話になった頃は、60元だったよ。

福岡 6倍になっているから大したものだ。

大川 それほど購読料というものが安かったんだ。世話になったのが10年で、広東に行ったのが13年。そのとき、八田厚志さんと桜井重義氏が代わった。多少拡張もするからというので、僕がアシスタントで行った。孫文が親方で、参謀長が李烈鈞^{りりちけん}、参謀副長が蒋介石。黄埔の軍官学校の校長を兼ねていて、僕ら2度ぐらい行った。北伐^{ほくはつ}のとき、広東から北へ行った所に韶関^{しやうかん}とも韶州^{しやうしゅう}ともいうところがあり、私は従軍記者として汽車で行った。

福岡 あの時分の兵隊さんは、唐傘を背負って鍋を持って(笑)。

大川 広東軍なるものが本当の母体なのだろうが、孫文を慕ってきた軍閥、あるいは負けて逃げ込んできた軍閥、例えば広西軍や福建軍もあり、そういうのを客軍と言っていた。広東軍との摩擦も相当強いものがあった。しかし私は黄埔の軍官学校に行って、蒋介石というのは、これは伸びる人だなとしみじみ感じた。軍官学校の校長としての蒋介石は私にこう言った。「今は広東軍がこうだ。客軍がこれだけある。どれもこれも阿片^{あへん}を吸って、賄賂をとって。こういうことでは中華民国はいかん」と言うのだ。

「だから自分が黄埔の士官学校の学生を大いに鍛えて将校にしたなら、有望な者を各軍につけて新しい国民軍をつくるのが俺の理想だ」と言った。ご承知のように蒋介石は日本の士官学校にいた人だから、支那式に真ん中に井や皿小鉢を置いて皆で箸を突つくという方式ではなくて、アルミの入れ物に1人前ずつ分けて、日本式に学生が、いずれも幹部候補生だが、これがちゃんと並んでいるのに、当直の将校が来るまでは一切箸をつけちゃいかん。僕らは陪食したんだが、将校が入ってきたら起立し、将校が箸をとると各候補生も箸をとる、と規律正しかった。

福岡 当時、蒋介石は日本語をしゃべったの。

大川 そのときは通訳だった。その後、何回となく記事をもらいに行ったが、私はついに日本語を聞いたことがない。綿服を着て傘差していた広東軍、各客軍だったけれども、黄埔の士官学校の学生はぱりっとした軍服を着ていた。なかなか立派なものだ。

佐々木 蒋介石はその後、南京で何回も会ったが、われわれの話す日本語は通訳なしですぐ応答するんだが、支那語で応答していたね。聞くところによると、非常に上手だという話だったね。

福岡 相当分かるんだろうね。

波多 うまくても張群君ぐらいだろうね。

佐々木 張群うまいからね。

波多 先生(蒋介石)は、あまり日本語じゃ喋らない方式をとっていた。

佐々木 うまいという話を聞いていたが、われわれとやる時は通訳を使った。

波多 聞くのは分かるが、話すのは多少、不自由だったようだ。

福岡 汪兆銘^{わうちやうめい}なんかよりはよほどできるね。汪兆銘はこちらの言うこともそうすぐには分からない。

波田 とにかく士官学校の課程を終えたしね。

折橋 どこにいたのか。

波多 高田の連隊に配属されていた。

折橋 士官学校出てね。

佐々木 波多さん、東方が支那の新聞に連絡をつけるというか、購読してもらうために、胡霖や張季鸞が非常に好意的にやってくれたというお話だったが、波多さんと胡霖、張季鸞両氏の公私両面のお付き合いで、何か思い出になるようなエピソードはないでしょうか。

波多 胡霖君には大共和日報の編集室で紹介なしで会ったのが始まり。

話してみると実に温厚な人で、日本語もよく分かるし、新聞に対する識見もある。大東亜戦争が始まってから重慶と香港に大公报を移し、双方を往復していた時まで付き合いをした。張季鸞君は大正4年に「中華新報」を出した。張季鸞君も胡霖君から紹介してもらったのですが、話してみると実にはつきりしたことをいう。一見して打ち込んでしまった。亡くなるまで付き合いをしていた。

張季鸞の嘆き

その後しばしば排日運動があり、普段付き合っている新聞記者も、こちらが訪ねて行くと、会うのをどうも怖がるようなところがあった。ところが胡霖君と張季鸞君は平気で、向こうから訪ねて来る。本当に日本を理解していると思った。

張季鸞君に「世を挙げて排日を叫んでいる時に、君だけはちっとも変わらないでいるが、君の日本に対する感情はどうなんだ」と聞くと「これは俺の性格でもあるが、僕は明治40年に日本に留学して一高に入った。素人下宿に泊まって学校に通ったが、下宿の人たちが実に親切に日本人と分け隔てなく対応してくれた。日露戦争後のことで、留学が非常に盛んだった。留学生が金を持っているというので、下宿屋なんかは大いに金を使わせようとするのが多かった。僕が泊まったところはそんなことはなくて、心からかわいがってくれた。日本人は排日新聞を書くように悪くはない。これが自分の根本理念だ」と言う。だから張季鸞君の新聞に載せる論説というのは、日本問題を取り上げるとちっとも感情論がない、実に立派なものだ。

香港に移っても絶えず連絡してくれて、日本の友人よりも先生の方が本当の心を語り得る友人として恥ずかしくないというふうに考えていた。

大東亜戦争になってから政府が重慶に移り、先生方、上海の大公报をつくったが、上海が占領されてから香港に移った。香港で胡霖君と2人で盛んにやっていた。

昭和14年だったか、戦局はますます中国の方にあまり良くないし、上海の方に帰ってくる希望も先生方には持てない。元来先生は肺を患っていて、このままだと死ぬかわからん。上海で先生を知っている日本人は皆心配した。朝日の白川威海君が非常に心配して、「あれを病気で死なせるのは惜しいから、何とか助けようではないか」と。「僕はちょうど旅行するので香港で会ってみよう」ということで、香港に行って手紙を書いてホテルのメッセンジャーに持たせるとすぐ来た。

彼は「こんなばかな戦はない。一刻も早くやめなきゃいかん。俺は初めからそういう考えでいるのだが、両国の分からず屋が互にこうやっているのどうも仕方がない。しかしまだ望みがないことはない。一つやらないか」という。

私は昭和10年に東京にいるとき、病気をして死にかかったことがある。その後良くなって南洋方面に旅行するという名目で香港に行った。「僕はこうこうで旅行にきたのだ」と言う。「そんな旅行やめてしまえ。両国の本当の存亡にかかわるときなのだから旅行なんかやめてしまえ。それで両国が戦をやめるように仕向けるのがわれわれの何じゃないか。俺は幸いにして政治家でもないし、軍人でもないし、きわめてフリーの立場にある。しかし蔣総司令とは直接話し、連絡を取り得る関係にあるから、君が本気になって取り次ぐなら、俺も一つやってみる。旅行はやめてすぐ東京に帰れ」と言う。

「いや僕らが今出ても日本はこうなっている」「そんな熱のないことじゃ駄目だ。帰ってやれ」と。汪精衛（汪精衛）汪兆銘をハノイから引つ張り出しに犬養健さんが行って、影佐（禎昭）先生たちが、私と行き違いに上海

に着いたときだ。私は知らなかったものだから上海に来て、ちょうど興亜院の上海の長官が津田静枝さんだったものだから「こうこう」という話をした。

福岡 波多さん非常に「ご懇意ですね」。

波多 いやいや。津田先生は「君、それはもう遅い。実は汪精衛は近いうちにいよいよ東京に行くぞ」と言う。「なかなかこれは張季鸞君のいう通りには、希望に沿うことはできないぞ」と言う。折角来たのだから「だめだ」というわけにはいかんし、放ったらかしておくわけにもいかなないので、「日本はあくまでもことんまで戦をやる」という決意を知らせる以外に方法がない。

もう一度香港に行って張君に会った。入院中の病室に行ったが先生は「どうだった」という。「どうもこうもない。ご覧の通り大勢が既に向こうに行ったし、今、お国が全面的に日本の言うことを聞く以外に、戦をやめるということは日本の方にはない。残念ながら駄目だ」というと、先生、「そうか、やむを得ない」と。それで「中国四百余州広いんだが、遺憾ながら日本の飛行機の攻撃を免れる所はないといってもいいんだ。身の置き所がない。香港に来てようやく生命を保っている状態だ。戦いをやめなければならぬ」ということだった。

「そういう気持ちはよく分かる。命あつてのことだから、この際、病気を治すために日本に行かないか。保養して病気が治ってから両国の間を打開するように努力したらどうだ」と言う。「行きたいのは行きたいが金がないので無理だ」と言う。「金の方は心配しないでもいい。朝日の君をよく知っているのが出してくれる。藤山愛一郎さんなんかも君をよく知っているから、僕が頼んでみるから」と言ったら「ありがたいけれども今行くと俺は漢奸^{かんかん}になってしまう。漢奸になりたくない」と。「非常に好意はありがたいが、この際、病院で国と運命を共にする」と、とう

とう日本には行かなかった。

その時は本当の友達として心を打ち明けた話で、今でも先生を思うと涙ぐむ。「ただこれだけは一つ、君、記憶しておいてくれ。お国の軍部の人は、当初日本の力をもってすれば、中国はすぐ打ち負かされてしまう、支那の軍隊なんか瓦解^{がかいどほう}土崩れしてしまうだろうという考えでやったんじゃないか。これが今日まで抵抗を続けさせている。何がこういうふうにさせているか、この基礎の精神を将来やっぱりお国の人たちに研究してもらいたい。国民党の三民主義ばかりじゃない。中国のあらゆる学問、思想、これが一緒になって国難を救うというふうな人をつくりあげている。これを無視していた。同時に中国の青年の意気込みを見誤っちゃいかん。君たちがお国で考えている以上の強固な愛国心を持っている。どうも日本と中国はドイツとフランスのようなことになってはいかん。両国の溝をなくすためには戦をやめていくよりない。これも今の状態ではできないし」と先生、涙を流して慨嘆していた。私は、筆が立つなら短編小説ができると思った。

それからだんだん戦局が悪くなって、総軍の方じゃ停戦の交渉があつた。松岡^{しょうこう}（洋右）さんが出てそれから後は軍部の人たちが出て「手をつなぐのは誰か」というので「張季鸞です」と答えた。軍の方は「あなたは張季鸞を知っているが、どういう男なんだ」「今さら張季鸞の何を調べるんですか」「いや、国民政府の首脳と連絡をとって戦をやめるきっかけをつくる」と言っていたが、これもどうも失敗した。そのうち張季鸞君は死んでしまった。

佐々木 波多さんと胡霖、張季鸞の関係はその後、聯合や同盟になっても何らかの形で続いた。古野さんが北京におられる時、臨城事件²⁷というのがあった。当時、外交団は大変な力を持っていて、支那の鉄道の国際管理ということで、支那の独立は危機に瀕した。その時に古野さんが、

当時の公使館の参事官の吉田伊三郎さんと手を握って、外交団の話の内容を逐一聞いて、それを胡霖、張季鸞に直ちに知らせた。これがすぐ支那全土に広がって、全土の新聞が書き立てるといようなことで、支那の分割統治を救った。

波多 そういうことがありましたね。

佐々木 後に徳光衣城さんが東方の北京支社長になり、胡霖、張季鸞とは非常に密接にやっていた。それで2人が天津で大公報をやるということになった。私もはしょつちゅう胡霖さんと張季鸞さんと接触していて、相談を受けた。「日本側から少し広告取れないか」「何とかなるだろう。どのぐらいいるのか」と聞くと、「月4000円ぐらいほしい」ということだった。徳光さんが参事官の堀義貴さんに相談した結果、「そのくらいは何とかしないと」ということで、三井、三菱、大倉3社の支店に渡りをつけて出すことになった。胡霖さんたちは「これで収入の一部分の安定が得られ、ありがたい」と非常に喜んだ。ところが3社は1年たつかたないうちにやめちゃった。4000円を3社で出すんだから、1000円なんばか出せばいいんですがね。

波多 上海でも支那新聞を操縦しなきゃ、操縦という用語弊があるが、こう度々排日が起こって、その度に日本の商品をボイコットされ、支那新聞は日本の主張をちっともとってくれない。何とかせにゃいかんというところで、よく議論が起きた。北京と違って上海には日本の商社がたくさんある。六大銀行と郵船とか三井、三菱あたりの大商社、銀行が月に1万円ずつぐらい、広告料という形で出している。

その前だったか、アメリカの商社と問題が起きて支那新聞が排米を書き立てた。アメリカはスタンダード・オイルとか、英米タバコと一緒にあって、そういうことをやるならば支那新聞に出している広告を一切出さないという。アメリカ系はその当時、月に10万円ぐらいの広告を出し

ていた。それで（支那新聞は）慌てて排米の扇動をやめた。そういうことがあるから、日本も商社が協力して広告料を出すようにしてもらったらどうかということで奔走した。有吉さんの時代は有吉さんが主としてやってきたが、その時は駄目だった。

本社を東京に置き本格展開

福岡 東方の本社が東京にできた時分の裏話を聞こうじゃないですか。

座間 （東京本社ができたのは）大正9年8月だろう。

大川 9年です。波多さんや亡くなられた宗方さんが上海にいてその時、東方は急に大きくなった。東京に本社を置いて、人間がいるからということで僕は入れてもらった。10年1月に入った。

長林 東方通信という看板。支那の要人が書いたんですか。

座間 鄭孝胥^{ていこうしよ}。

長林 鄭孝胥が書いたんですか。

座間 写真に書いてある。9年8月に始まったんですね。僕らもその時入社したんです。最初、社屋はなかったが、3カ月目か4カ月目だったか、伊達さんがやっていた財政経済雑誌を発行する場所で東方通信を始めた。内幸町のヘラルドに合宿みたいに2階を借りた。

部屋が狭くごたごたして仕事ができなかった。電報は今の渋谷君から引き継いで、川浪、鈴木両君が主として書いた。種取りは高井、大賀が主任でやっていた。電報を打つ際は、初めは外務省に相談したよ。相談しろと命令を受けたかどうか知らんけれども薄々金が出ていることを知っているから、後で小言を言われてもしようがないと思って。分かんのもあるしね。外交問題の分かる者はあまりいなかった。ただの記者でね。主として各新聞の社説をとった。それは川浪、鈴木の役目だった。

種をとってくるのは高井、大賀の役目で、夜も警戒していた。12時ごろまではやったものだ。

外務省の担当者は、初めは誰だったかな。矢田部(保吉)さんという人がいたが、相談したのは誰かはつきり分らない。その後は主として広田(弘毅)さんに相談した。広田さんというの偉い人だね。夜中11時、12時ごろ電話かけても起きてきて懇切に説明するんだ。

福岡 広田さんはあの時分、何ですか。政務局長ですか。

座間 その後情報部、東方通信の方の親方になったでしょう。そうじゃなかったかな。私もいるときには電話をかけたが、鈴木、川浪君も直接電話かけて聞いていた。事情をよく知るために照会をするということだったな。懇切によく教えてくれた。その後、どうも狭いというので、新橋寄りに堤砂糖店というのがあり、ビルを新築して細長い形のもので造ったので、そこに狙いをつけて借りた。2階だったか、3階だったか、ヘラルドより大きかった。そこに1年くらいいたかな。その後、銀座の国民新聞¹⁵の前。

大川 日映²⁸の建物。

モスクワに特派員

座間 あの建物の前に3階建ての家があった。大正12年の関東大震災はあそこで受け、建物はその晩に焼けた。重要書類を持って日比谷公園に避難した。その後、またあそこに3階建てを新築してずっとやっていた。当時もとても印象に残ったのは、大竹博吉君がまだソ連との国交断絶中にモスクワに行っており、向こうから何とかという人が来たね。

福岡 スリーパック。

波多 大森あたりに住んでいた。それと交換で大竹が向こうに行ってい

た。(その頃)東京に来たのはカラハンだったかね。

福岡 それはヨツフェだ。

座間 ああヨツフェだ。ヨツフェが来るときに大竹君から電報が来た。あの人物はあまり重要でないという電報だった。

福岡 それは非常に面白い話ですね。

座間 あまり触れてもどうか。

福岡 もういい頃だ。裏話が主だから。

座間 向こうの外務大臣はカラハンかな。

福岡 カラハンは次官だったと思ったが。

座間 とにかく向こうの外務大臣に聞いたところ、ヨツフェは重要でないということだったのだ。モスクワからそれを打つことはできず、ちよつと国外に出て他から打った。それが来て外務省は喜んだ。外務省は後藤(新平)さんとヨツフェの会談の成立することは内心希望していなかったね、実際は。そこで向こうの本音が分かったので、表面はうまくやっていたが、腹の底では妨害をしたわけだ。そういう事情もこちらから大竹に電報を打った。その後のモスクワの本心は刻々に打ってきたので、これだけは外務省の許可を得て情報部の許可を受け、新聞に発表した。各新聞とも全部掲載した。号外を出したものもある。朝日だったか号外を出した。

福岡 当時は外務人民委員といってチチェリンです。カラハンが次長だった。

座間 ああそうだ。大竹はチチェリンに直接会って話した。外務省も大いに東方を認めて、新聞に出さないうちにこっちに回してくれとか何とか言ったけれど、新聞社から金をもらっている以上、そういうインチキはしなかった。同時に発表して号外まで出たんだから、成功ということとで終わった。地震の際に組閣問題で高井、大賀が大いに活躍して、自

慢になるような種をとってきたが、これは地震の際に打ったんで、向こうには着かなかった。

大川 それは9月1日だね、大正12年の。僕が入れてもらって約2年。その年の夏、腸チフスをやって死にかけ、治って出たのが9月1日なんだ。そうしたら、さつき東京に向けて打った新聞電報が東京には届かん、名古屋までしかいかないと上海の日本の電報局から言ってきた。とにかく大変なことからしく「復旧の見込みはない」という。その当時、上海には東方と国際があつて、国際は勢多左武郎さんがやっていた。しかし現地では発行していないでニュースだけ集めていた。

福岡 経済が主だったんだな。

大川 経済が主だった。電通に兎玉君という人がいて彼も経済が主だった。電通に第一報が入ってきた。共同租界の日本人がたくさんいるところに電通がそれを張り出した。僕らは非常に残念だった。あの当時のことだから大島がなくなつたとか、富士山がへこんだとか、デマも何も一緒にくる。東方はしゅんとして手をこまねいて、電通のものを盗み見にくより方法がない。そのうち（北京の）双橋の無電台に原町から打った遅まきの第一報が入った。それを（北京支局の）横山さんが転電してくれるわけだ、上海に。とにかくどうなつたか分からず、本社からは何も言つてこない。波多さんが心配されて、船ですぐ本社に帰られた。そういう騒ぎだから組閣の新しい大臣の予想とか決定した顔触れなんか、とうとう最後まで入らなかつたな。これは極めて残念だった。

座間 打つことはずいぶん打つて、午後6時まで打っているんだ。火事になって中止したんだよ。

波多 あのとときは電通の独壇場で、上海はかき回されたものだ。

佐々木 モスクワ特派員が大変な活躍ということだが、どうして東方の大竹さんがただ一人の日本の特派員として行くようになったのか。

福岡 それは交換だ。

佐々木 交換だけれども、既にその頃古野さんは国際の支局長で、大正9年には北京に行っている。どうして国際が選に上らなかつたのか。

折橋 それはやっぱり外務省関係だろう。

福岡 おそらく国際はまだモスクワには行けない。ロイターとの関係で支那だけが特殊の場所になっていたのだ。またそういう陣容がなかったね。

座間 ロイターもモスクワに入っていなかったのでは。

福岡 そうそう。

佐々木 それじゃ、余計、国際は入れない。

座間 世界中で一人ということになる。

福岡 向こうはロス²⁹タといって、スリーパックが東京に来て、大竹さんが交換でモスクワに行った。

波多 大竹氏が行くようになったのは、大竹氏とロシアとの関係があつたからなんだろうね。

座間 ウラジオストクの支局に大竹君がいた。行くときには広田さんが非常に世話をした。金やなんかは直接広田さんから出して、外套の裏に縫い込みなんかやって。あの時、広田さんは何の役だったかな。

長林 外務省の役人だろう。

福岡 一時モスクワに勤務したことがあつたんだね。

折橋 次長だろう、情報部の。

座間 中外（商業新報）の社長になった人より前か。

折橋 田中都吉。

座間 大竹君は地震で妻君の家が焼けたとか何とかで帰ってきて、それから行かなかつた。

大川 東方が東京に本拠を移した時の年間予算は幾らぐらいだったのか。

佐々木 『通信社史』によると外務省から年間45万円ないし50万円の補助金、そのほかに電報料の名目で時々10万円ぐらい。

座間 後から追加で55万円ぐらいになったか。

長林 外務省側の折衝係は誰だったのか。

座間 初めは矢田部さん。ビルマ(現ミャンマー)の大使になった。そのほか森島守人なんかもやった。

佐々木 東方側は誰が折衝を主としてやったのか。

座間 折衝は伊達さん。細かいことになって現金つかむときは大枝さん(笑)。

波多 外務省との交渉、折衝は伊達氏でないとね。

座間 僕は地震の後、北京にお見舞いに行き、北京を済まして天津にありさつに行ったら総領事を大磯の元老がやっていた。吉田茂が。「君は支那は何べん目だ」「初めてだ」「何だ。東方の通信部長ともあろう者が初めて来るなんていうのは不届きだ。まあ一杯飲め」とか何とか言って盛んに外務省を攻撃していたよ。「霞が関のお殿様の話を聞いて、英米追隨の電報を打っておつたんでは駄目だぞ。君の方の電報を見ておると、虫酸が走るよ」。えらいことをいう総領事だと思った。有田八郎は参事官で大変威張っていたね。

何かで徳光君が有田を怒らせた事件があった。それで僕が東京から謝りに行ったんだ。有田の官舎に行くと、まだプンプン怒っている。威張っておつたよ。吉田なんか眼中になかったね。吉田の方が有田より先輩だろうと僕は不思議に思っ、それから天津に来て吉田さんに会ってみると、なるほどこれはまた、外務省を総なめにこき下ろす。霞が関のお殿様が何とか。小村さんのことと言ったのかな。

波多 同期じゃないでしょう。小村さんと吉田さん。

座間 吉田さんの方が先輩だろう。

折橋 小村さんより上かな、吉田さんは。

福岡 それは上だ。

折橋 小村欣一はなかなか。

座間 吉田さんは(現在)84か85だろう。

波多 だいぶ先輩だね。

座間 何かばかに怒られた。

福岡 後年ロンドン大使のときも吉田さんは、何かというと僕らをつかまえて「貴国政府は一体何をしているんだ」と。貴国政府と(笑)。

折橋 あなた土佐だからよく合うわけだ。

福岡 そうでもないけどね。

座間 天津の総領事館は東亜新報の建物の裏だ。地続きでね。

大川 その一角だからね。

波多 東京に移ったときでもまだ本当の草創時代で、今から考えると無茶苦茶だったね。水野梅曉なんか自分のお城の調査部にこもっていた。

大川 おっかないおじさんだった。威張っていた、僕ら若い者には。

福岡 座間先生、私が大正13年に国際に入ったとき、栗屋関一なんていう人は和服で通していた。東方の服装はどうだった。

座間 洋服だった。

福岡 土肥常温もしばしば和服を着ていたね。

波多 あれはしゃれだ、おしゃれな方だ。土肥は大島か何か着て、あの頃は変わった人がいたな。

福岡 僕が入った当時、弁当屋の「日の出」というのがあった。そこから弁当が入っていた。僕は風邪を引いてしばらく休んでから出てきたので弁当代を払ってない。のん気な時代で、みんな月決めなんだ。弁当代を取りに来ないのでどうしたんだろうと思ったら、土肥さんが払っているんだ。僕は「弁当代取りに来ないのです」と言ったら「いや、あれ

は払ってあるからいいよ」と言って、のん気な人だなと思った。

折橋 名物男だ。古野社長の先輩だからグウの音も出ないんだ。自分でそう言っているよ。

福岡 人物だった。

座間 各社とも彼を尊重した。自分の社も人の社もないもの。

福岡 あの時代はやっぱりのんびりしていたね。波多さんにお世話になった話に戻るけれども、僕が覚えていたのは、上海にマジエスティックというホテルがあつて、食事によく行つた。波多さんにも連れられて行つたけれど、様子も知らないし、エチケットも知らない。そうしたら波多さんが、僕の女房に20銭銀貨を渡して「便所に入ったらあそこに女の子がいるからこれを渡しなさい」と言ってくれた。われわれはそままで教わらなければならなかった。

英字新聞2紙を陥落

大川 波多さん、上海で東方が発行する記事を中国の新聞に載せてもらうのにあなたは非常に苦労されて、成功されたんだが、私がお世話になったとき、既にその体制は整っていた。ところが英字新聞は当時「ノースチャイナ・デーリーニュース(North China Daily News)」「チャイナ・プレス(China Press)」「上海・イブニング・ポスト・アンド・マーキュリー(Shanghai Evening Post & Mercury)」というのがあつた。上海マーキュリーは佐原さんの関係で大したことはない。問題はチャイナ・プレスとノースチャイナ・デーリーニュースだ。何とか陥落させなければならぬというので、あなたが中心になつていろいろな仕事をされた。国際的な環境の中で、日本の世論を代表する東方の基本方針と違つから、向こうが載せてくれる見込みは薄かつたけれど、実に根気よくおやりになつてこれが成功した。上海マーキュリーは別として、他2社の編集の人に小遣い銭をやっていたのではないか。

波多 いやいや、そんなことはなかった。金がないから。

福岡 チャイナ・プレスはアメリカ系か。

波多 アメリカ系だったが、後で支那系になつた。ノースチャイナ・デーリーニュースは、「よろよろの田舎通信の記事なんか載せてやらん」という高飛車な姿勢だった。この工作をやつたのが池田安雄君だ。チャイナ・プレスは、ラバールという人がいた。もう一つは「上海タイムズ」(Shanghai Times)。これは大正3年に東方を始める前に有吉さんが話をつけた。有吉さんは外務省の役人としては非常に頭が働いていたと思う。佐原さんの上海マーキュリーは夕刊だけで朝刊がない。そこで上海タイムズに目をつけて、財政的に困っていたのに乗じて日本から3、4万円ぐらい金を出して紙屋などの借金を払つてやつて、日本の大会社10社が3千円ずつ出して補助をした。

大川 最後にノースチャイナ・デーリーニュースが載せたときには、事務所で歓声を上げた。

波多 ノースチャイナ・デーリーニュースに載るということは、上海で信用を得ることなんだ。あれは陥落させなければならぬということで、最初のうちはなかなか出なかつたが、とうとう出るようになった。グリーヒムというのがいて、これがキザなやつで、排日の先鋒みたいなものだった。オーエン・グリーンは温厚な長者で、英国式の肩の上がつた人なんだ。グリーヒムはよく招待してすき焼きをごちそうしたりしたよ。**大川** 東京からニュースをじゃんじゃん送つても、受け取つた波多さんは有力な新聞に載せなければならぬ責任があるからくたびれただろうと思う。

福岡 何かノースチャイナ・デーリーニュースに記事を載せなければな

らない事件があったのではないか。

波多 ほとんど忘れたが、最初はごく小さい事件だ。これがデーリーニューズに載ったということで喜んだ。

無線機の移動に一苦勞

座間 無電を打ったことがあるが、上海では受信したのか。

大川 無電を打ったのは大正14年だ。

座間 機械（無線機）は着いたのか。

波多 僕の家の3階に置いて吉田松治、それからもう一人菊地というのがおりましたね。この2人がそれをやっていた。

座間 北京は相当有効に使ったね。あれは何年ごろだったか？

大川 14年の寒い頃、伊達さんが来られて「無線機を日本から持って来るには奉天が一番楽だ」とか「他は税関がある。上海にしてもどこにしても、奉天は税関がないから大連に揚げて満鉄で運べばいい」ということで、奉天に最も早く入れたのだ。それから逐次、支局に置いた。

座間 北京で外務省関係は絶対にいけないと断った。

佐々木 あれは駐屯軍に頼んでね。

座間 軍に頼んだら「オーケー」。その代わり時には俺に使わせろと（笑）。軍は偉いね。褒めると怒られるかもしれないが、「上官の命令があれば、何でも天津まで持って来い。上官の命令ならそれから先、釘付けのままだどこへでも持って行く」と言ってたね。今ならわけないけれども、あの時は、この部屋いっぱいになるような大きなもので、水車みたいだった。**福岡** 隠しようがない。

佐々木 あれを北京に運び込むとき、北京の歩兵隊の兵営までは迫撃砲部品ということで兵隊が運んだ。兵営の中で開けて、逐次乗用車で支社

まで運んだ。

大川 広東以外は全部、日本の駐屯軍か、日本の軍隊がいたから陸軍省が面倒を見てくれた。困ったのは広東なんだ。広東は日本の兵隊さんがないから大きな荷物を持って行くわけにはいかない。海軍に頼んだんです。同盟になってからはもっぱら私がやることで、横須賀の鎮守府²²まで持って行った。東方が初め通信機を向こうに置き、その流れで聯合、同盟が通信網を張ったわけです。

座間 その後上海から受けたことがありましたよ。何かのスポーツで。大竹君の自宅が駒沢の奥辺りにあったので、そこへ仕掛けて受信した。

福岡 豪徳寺ですよ。

長林 そうそう世田谷7丁目だ。

座間 そこで受けた。スポーツをばかに早くとって各社とも喜んだ。上海のどこの電報よりも1日早かった。

波多 あれは何回目かの極東オリンピック¹⁸を上海でやったときだ。

座間 あれは成功した。

波多 同盟になってから古野氏がいつペン来られた。上海で中国の通信社と通信契約をやったことがあるんだ。通信社の名前は忘れてしまった。契約は英文でやりましてね。

福岡 中央通信以外の通信社ですね。

波多 中央通信はその当時駄目だから対外的なやつをその通信がやってた。名前は思い出せないのだが。

福岡 あの頃、佐々木君は南京にいたんじゃないかな。

佐々木 聯合になってからですか。

波多 同盟になってからじゃないですか。

佐々木 同盟になってからだと、維新政府³⁰ができたときに、柳町精が面倒を見て通信社をこしらえたね。中華聯合通訊社³¹だ。

(古野氏参加)

福岡 古い面白い話が出ているんです。波多さんから、上海で古野さんが支那の通信社と契約を結んだ話が出ていたが、中央通信以外に契約したところがありましたかね。

波多 フランス(租界)と共同租界の境に大きなビルがあつて、そこに同盟の事務所があつた。あなた(古野)がそこへ来られて。向こうは何と言ったか、排日のいけすかんやつだ。提携することになって英文の契約(書)をあなたが作つて調印したことがあるのだ。

古野 そうですかね。一つも覚えていない(笑)。

福岡 ノースチャイナ・デリーニューズのオーエン・グリーンは、その後ロンドンに帰つてロイターの社員になったのです。極東(専門)の記者なので、何か事あるごとに方々の新聞社がすぐグリーンの見解を聞きに来てロイターでは極東通として重きをなしていた。後年は非常に好々爺になりましてね、日本にも非常に好意を持っておりましたね。その時分は。

波多 そうですか。

福岡 今日のお話には宗方さんのことがあまり出なかったが、あの人は元来どんな人なのか。僕ら全然知らないのだが。

波多 彼は支那浪人ですね。明治時代の支那浪人と言いますと、たいがい天下国家を論ずるタイプなのだが、先生はそういう人じゃなかった。非常に真面目な紳士だったな。

座間 紳士だった。顔もそうだけインテリだよ。

福岡 やはり同文書院の關係の人なんですか。

波多 同文書院の創立者の側ですね。

福岡 実際に東方の仕事に関与したんですか。

波多 実際はしないのです。

福岡 じゃあ実際は波多さんがやられたわけですね。

大川 宗方さんは週にいったん来られるか来られないかで、来られたとしても10分間ぐらい。ステッキをついてきて、波多さんと話をして帰られるという程度で、実際には何にも関与しておられなかった。鉄砲打ちが非常に好きな人で、それが唯一の楽しみの方だった。

福岡 伊達さんは支那に關係があつたんですか。それまでは。

波多 伊達さんは明治39年に徳富(蘇峰)さんに付いて、満州から北支那、湖南まで行つた。あれが初めてだろう。見に行つただけだ。

座間 国民新聞の外交記者なんだ。

福岡 東京の本社では支那の素人がやつたということだね。

佐々木 座間さん、鈴木幸次郎君がよく言っていたが、鈴木君が北京から本社に転勤する時に、伊達さんから北京の大きな焼き物の金魚鉢を二つ買って来いと言いつけられ、二つ担いで帰つたというのだ。船の中まではよかったが、上がる前に一つ割つたというのですね。そうしたら「お前は首だ」と。いくら謝つても許してもらえず、皮一重になったと。それを座間さんが「そんなばかなことがあるか。公務でも何でもないので首を切ることがあるか。俺が話してやる」と言つて、首をつないだという話があつたのだが、そういうこともあつたのか。

座間 伊達は怒る人間じゃないんだ。大体はね。腹の底から怒るというようなたちではないんだ。何か他の問題で風向きが悪かった。あんなこととはないのだ。小さいことにそう無茶はしないのだが、鈴木君のときはどんな弾みだったのか、言い出して後に引けなかったのかもしれない。本来はそういう人間じゃない。不思議に思っているんだ。調停したも、へちまもない。鈴木君もまだ若かつたから氣になつたんだよ。

大川 佐々木さん、こう思わんですか。私は東方、聯合、さらに同盟ときて、顧みてこの三つの社は一貫したものだけれども、この三つの社の

頃は実に職場が楽しかった。個人的にひどく叱られたこともないし、仕事の上でも大して叱られたこともない。非常に楽しく若い時代を過ごして来たと思う。考えてみると、諸先輩に対してとにかく非常にうれしい、あるいは楽しい思い出ばかりが残っている。その点、僕はありがたいと思っているが、これは裏の言葉からいうと、少し甘く育てられたなという気持ちはある。

本格的な通信社づくり

座間 伊達老の悪口を言うわけではないが、ちょっと持て余したな(笑)。
福岡 古野さんと座間さんがおられるから聞いてもいいと思うんだが、僕ら若いときに、何だか分からなかったが、突然東京会館に招待された。そのときは、岩永(裕吉)さんが引退するのであいさつがあるんだといううわさが立って、本当かうそか全然分からない。とにかく行った。聯合時代に。ところが肝心の主役の岩永さんがついに姿を現さないのだ。伊達さんと古野さんがみえて、結局、伊達さんが訳の分からないあいさつ



伊達源一郎＝1952(昭和27)年6月撮影

をされて、僕ら洋食をごちそうになった。こういうごちそうなら度々してもらった方がよいと言ったが、どうも薄々、何かあったのではないかという気がしていた。そういうご記憶はないですか。

座間 まあそれは暴露すればあるが、書かれるのはちょっと具合が悪いな(笑)。伊達さんは僕の恩人だし、感謝もしている。立場から言えば同情する点はあるにはあるけれども。今、考えるとそう年寄りじゃなかったが、年寄りの冷や水のように思った。

福岡 そうですね、僕らはなおさらそう思った。

座間 今考えれば若いよ。あの当時、少し老け過ぎと思ったけれども、年寄りの冷や水だな。しかしああいう場面に遭遇し、五十以上になると人間というものは、ああいう感情も起きるものかと思うのだ。だがさっぱりしなかったね。随分、古野氏とも話合ったけれどもね。

古野 座間君は大したものだ。よく覚えている(笑)。

福岡 あれは覚えていてもらわないと困る場面ですよ。

座間 明確にするのはわけないけれども。

佐々木 そういうことは明確にしておいてもらわないと困ります。

福岡 後世に本当のことを残してもらわないとね。

佐々木 私は出先にいて何も分からなかった。

座間 方法がないね。

佐々木 方法というよりも、誰も知らせてくれないし、そのうちに東方の幹部はそろそろ辞めてしまった。それなら俺らも辞めなきゃなんのかと思って電報打ったって返事もくれんし(笑)。

座間 それは返事のしようがないよ(笑)。僕らも通信のことには全く未経験者であり、あまり素養もない。知識もないから、東方が成立したゆえんは分からないが、これは主宰者の伊達の言う説明を聞いておくより仕方がない。しかし外務省に出入りし、不破君や古野君にも接触して聞

いているので大筋は分かっているが、伊達さんしてみると、端的に言えば、後々までやりたいという気持ちがあった。それだけだよ。

成立の根本にたち至れば、東方というものはある時期において国際と合同して本当の通信社をつくるべきものなのだというのはこれは鉄則だ。決まり切っている。これを動かすことはできない。そう説明してやれば、われわれ平社員は納得するのだが、御大はそうは説明しない。どうも腑に落ちない説明の仕方は大いにあるけれども、それは年寄りの冷や水でやむを得ないだろうというだけの話だ。

徳光ら旧東方系社員が退社

大川 あのとときは前から何回か岩永さんの会合が持たれていたよ。片やあなた（座間）と古野さんの会合が持たれて、あなたが僕を呼び「いよいよ今日は決裂だ。そのときにお前たち東方系は軽拳妄動しちゃいかん」と、こういうことを一番に僕に言った。僕に言ったということは、恐らく大賀知周、高井信義にも言ったと思う。3時ごろにその会合はねて、いよいよ決裂ということになったんだろうね。

僕らには徳光さんから特に話があったから徳光さんの家に行った。旧東方系の社員がみんないた。あなた方はわれわれ後輩の身の振り方を相談されたんだろうが、（徳光さんによると）「聯合の人はお前たち全員を首切ると言っているわけではなく、岩永さんと伊達さんの見解の相違というか、経営上の方針の違いということだから、高井から後は残れ、向こうも早く残してくれるから残れ」ということで残るようになった。

その晩、ワンサワンサと大毎（大阪毎日）へ徳光さんと一緒にくっついて行った連中が皆、神谷町の徳光さんの家に寄っていた。古野さんが晩の9時ごろ来られた。僕は決まりが悪いので、玄関に出なかったんだ。

「誰が来た？」と言ったら「古野さんが来た」と。古野さんは徳さんが一本気な男だから、徳さんによく事態を説明してやろうという気持ちで来たらしい。2階で二、三十分会われて古野さんは帰られた。徳さんが玄関まで古野さんを送り、僕らのいる居間にやって来た。

僕が「どうだ」と言ったら彼は得意になって「古野さんがいろんなことを言って慰留し、残ってくれと言うけれども、僕は辞めると言ったから辞めるんだ」とあの調子で、一人で威張ってみせていた。結局、高井さん以下のランクの人たちはみんな残すことになったということだ。経営上の方針の食い違いとか内容的なものについては、われわれは何にも聞かされていない。言うべき筋合いのものでもないだろうが、今日まで知らなかった。

福岡 徳光さんは辞めたの？

長林 辞めた。

座間 徳光さんは必ずしも辞めたくなかったのだ。けんかしたわけではないし、仕事は面白いし。今だから言うが、伊達さんが頼んだんだ。

福岡 辞めると言って？

座間 僕は連れ立って辞めたくはない。カッカする必要もないし、腹の中には何にもない。俺も辞めたくないけれども前からの関係で仕方がない、わしは辞めることにしていたんだが、伊達さんが「君と徳さんは一緒に辞めてくれ」と言っただよ。

福岡 結局、伊達さんが非常に積極膨張政策なんでしょう。

座間 理屈を立てればいくらでもあるから積極政策でいくんだけど、本来からいけば必ずしもいなくなっていいたくないんだからな。必要がないんだ。岩永さんは「俺は必要ない。しかし、ああい草創の時期だから2人が協力してやるのでもいいさ。これから発展するものを人間がいらないというわけじゃないんだから。金は苦しいけれど方法はあるんでね」と言っ

た。

僕は社員のいろいろなことも見ているから、苦しい時代には500円なんて幹部がもらわんでも、半分あるいは200円ぐらいにして飯を食っていればいいんじゃないか。3年、4年たてば良くなるんだからと言って、その案を作ったんだ。幹部は全部200円、局長級は500円。ずっとやると経理上パーになるんだ。そういう案を作って僕は岩永さんに見せた。そうしたら「これは大いにいい。その代わりあんたも200円だ」と言う。僕は当時千円取っていたな。「いや僕はむしろ出している方なんだからどうでもいい」と言った。

古野さんも徳光氏も賛成したが、伊達さんのところに持って行ったらいかんと言う。それじゃ終わりだとそれを引っ込めたんだ。だからその書類はちゃんとまだある。判を押してある。そのときはそれでパーだ。伊達さんは反対したんだ。社員の月給を減らしてまでやる必要はない。方法はあるんだからそんなことはしなくともいいと。創業時代だから苦しみは共にした方がいいから、心意気としてそうした方がよろうと僕は思うと言ったが、「いや、社員の給料まで減らす必要はない」と言った。案文は岩永専務理事が判を押したんだから手続的には成立したんだがね。案文はまだあるよ。判を押してあるよ。

長林 それは座間さん、持っておられるの？

座間 持っている。いずれも弥縫策ではあるけれども、初期はそれでやるよりしよがない。それから仕事の上でいらないうち者が出れば、それは引っ込んでもらってよろうし、他に食っていくところがある者は行ってもよろう。2年、3年たてば必ず復興する社だから、また迎えればいいことだった。若い人は活躍するから入れなくちゃいかん人間もおるだろうし、それは仕方がない、1年、2年はそれでやる方がいい。その意気を示せば切り抜けられる。

岩永さん1人が私財を出していたんじゃない、いかに金があっても駄目だ。こういう案があるけれども、まあ仕方がないとやらなかった。伊達さんの悪口を言うんじゃないが、あのときは具合が悪かったね。当時、東方にはまだ川浪道三、鈴木長次郎という古い人がいて高井、大賀はもうこちら（聯合）に来ているんだから、あっちの2人は不要になった。これは仕方がない、どこかに世話するという意味で納得してもらった。徳光は残す。仕事の上で徳光は必要だ。本人が仕事が目白くなくなった、というならしよがないが、大いに気負って仕事が目白くしようがないのだから。

大川 そうだ。内信局をつくって北京から徳光氏を迎えたとき、あの貧乏世帯の中で内信局を拡充するということについては、徳光氏の意見通りに、財政的な無理をしてもやった。専用線を引っ張るにしても御大典（取材）の総動員も当時の経営状態から見ると徳光氏の意見を百パーセントと言っているくらい驥足を展ばさせた。

座間 社が無理をしていることは彼には分かっているんだが、あれは浪費家だから苦しいときには向かないんだ。大きい方には向くけれども苦しいときには向かない人間なんだ。仕事に夢中になると無茶苦茶になる。金を考えないんだから。それを自分も知っている。浪費家であることを自分も知っているが、それを大目に見てくれているところに心から感激していた。「君も200円だぞ」と言ったら「仕方がねえや。よろうよ」と判を押した。あいつも賛成したんだ。

大川 あの人は200円もらっても足りないんだし、千円でも足りないんだから。

岩永、伊達の確執に決着

福岡 それがお破算になって、どういう経緯で岩永さんが引つ込むことになったのか。

座間 岩永さんが引つ込むというのは聞かない。

古野 岩永さんが引つ込むというのは聞かないのだ。理事会で最後は決める。結局、それじゃあ伊達にやってもらわなければしょうがない、ということに落ちるだろうと伊達は思った。それが逆になってしまった。伊達さんは辞めてもらって岩永さんにやってもらうよりしょうがないということが、理事会で最後に決まった。伊達老には甚だ意外だった。新聞社会における経歴等からみて、新聞屋どもは岩永みたいな英語屋を使つてやると思つていない。当然伊達を中心にやってもらって、岩永を顧問などの補佐役に、というようなことに落ち着くだろうと伊達老は思つていたと思うんだ。

座間 期待したんだな。

古野 そのようなことだった。俺も場所はどこか忘れたけれども、理事会でこう決まったということ聞いた。伊達と岩永と理事会と称する新聞屋連中とで相談の結果、いよいよ伊達君が引いて岩永さんがやるということになったから、ということを言い渡された。俺は別室で待つていたんだ。それをぼんやり記憶している。

座間 外務省に行つて聞いたなら「外務省は力がないけど何が何でも伊達は辞めさせる。辞めなくちゃいかん。岩永もいけれども古野をつかんでいなければいかん」と幹部は言うのだ。僕も「そう思うけれど」と言つた。これは決定なんだ。伊達も悪いところはないけれども、ちょっと浪費的などころがある。予算の45万円から10万円引くというのは、便法で仕方がないけれど、度重なりと外務省は面白くない。そういうことが

あつて、やつぱり岩永にやらせると。

古野 どうも外務省は岩永だったな。

座間 絶対だ。というのは古野さんを信用していたんだ。東方の東京を創立することについて外務省は、古野さんに相談して決定したと僕に言つたよ。(古野さんは)外務省に何か意見を言つたんだ。そういうふうには僕は聞いた。伊達さんはそういうところを認めていたけれども、「俺は断つたけれど頼まれた」と言つていた。悪く言えば渡りに船だったんだ。彼は経済雑誌の「時潮」を6カ月ぐらいやつていた。これを続けたいというわけだ。続けたいといつても財政上悪かった。僕は初めから関係していたから知つているが、うまくいってなかった。早晩出なければならぬ形勢にあつたところへ東方通信ができたから、これは好機至れりと思つたかもしれない。

伊達は経営はあまり得手じゃない。雑誌を始めたばかりだと言つて断つたことは事実だ。だがその成立の根本に古野君が、小村かなんか知らないが、話をしてそういうことになったんだということを聞いた。それで青山の練兵場を古野君と2人で夜、歩いたんだ。伊達をどのようにやるかという相談をしながら夜歩いたんだ。赤坂見附を通つた。結局しょうがない。駄目だと。

福岡 2人に引導を渡されちゃ駄目だね(笑)。

座間 どうやってもうまくまとまらん。

福岡 伊達さんが古野さんに「お前はこつちに来てわれれと一緒にやれ」という話があつたということを聞いたんだが。

座間 口にして言つたかどうか知らないが、それは(伊達さんが)希望したことだ。

福岡 僕はご本人から聞いた。徳光さんが辞めた後、大川さんが、この人は非常に友情に厚い人だし、忠実な人だから非常に辞めたがつてね。

僕らにはよく分かっていたんですよ。辞めたくてしょうがないんだ。

大川 そんなことはないよ。

福岡 いや、そういう様子がしょっちゅう見えるんだ。古野さんもそれを知っていて、古野さんから「大川君をどうしても捕まえておかななくてはならんから、君はよく気をつけてくれ」と言われた。

大川 僕はね、伊達さんが去ってさっぱりした形になって、しばらくたったら電通の上田碩三^{せきぞう}さんが僕を交詢^{こうゆん}社に呼んだ。僕はそのときまで、上田さんを知っていたけど顔を見たことがない。行ったらちようど電通が東亜部を拡充するときで、「電通に入れ」と誘われて僕は即座に断った。その後、座間さんが国民新聞で夕刊専門の新聞を出したことがあった。半年も続いたのだろうか。僕はそのとき、聯合の飯を食っていたが、来いという話をしてくれた。そういうことが3回か4回あったが、僕は誰から勧められても聯合は動かん、死ぬまでやるんだと断った。

というのは、伊達さんが辞めて高井さんや僕らが残った。聯合の人たち、はつきり言う旧国際系の人たちが、僕ら継子みたいなやつを快く扱ってくれたということに感激しているから伊達さんからそんな話があり、上田氏から話があっても、あるいは徳光氏の話があっても僕としてはお断りした。

福岡 元の盟友と別れているという気持ちを古野さんが分かって「あれ（大川氏のことは気の毒だからみんなで気をつけてやらなければいかん）」と言ったんだ。古野さんは忘れたかもしれないが。

大川 そういうことはあったかもしれないが、僕はさっきから言っているように東方時代、聯合時代、同盟時代と実に住みよかった。貧乏が玉に傷だったけれどもこれは仕方がないよね。

福岡 玉に傷かどうか知らんけれども、僕ら全く同感だね。僕は子供が生まれたとき、子供にはまともな教育はできない。ここにいたんじやと

でも自力で大学には上げられない。原籍を高知県から抜いたら子供の育英資金を借りることができないから原籍は高知県に置いておかなければいかんと思っただよ。それぐらいしてもいようという気持ちを起こさせた組織だったね。

大川 人とのつながりで気まずいことも皆無ではないけれども、良いところだった。

福岡 組織の世帯が小さかったからなおさらそういうことになり得たけれども、目標を持っているから大きく成長し、いた甲斐があったということになった。

大川 ナショナル・ニュース・エージェンシーか。よく聞いたね。耳にたがでできるくらい。

福岡 いて悔いがない所だ。小さい所は他にあるかもしれないが成長性がない。仕事の上の理想というか、目標がない。それに比べ一代の間にそういう目標を達成したという点で、われわれはなかなか珍しい経験をする事ができたと思う。

座間 経営者は骨を折ったね（笑）。

大川 私たちも月給155円で8年間据え置きというレコードを持ったね。しかしそれはみんながそうだ。みんなを働かせて搾取して配当しようというのじゃないからみんな納得していた。

（新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」）

覆面部隊で中国に無線連絡網構築

吉田松治（元東方通信上海支局）

東方通信社に入社し、上海支局勤務となり、長崎から新造快速連絡船「上海丸」に乗り込み、日本を離れたのが大正14（1925）年4月だった。当時中国は上海の内外綿（ないがひめん）（現在の新内外綿）の工場労働者スト、青島の日本紡績工場のストが、相次いで起こり、上海共同租界では、中国人学生2千人が「租界回収」「打倒帝国主義」を叫んでデモ。これに英国警官隊が発砲して死者11人を出す、いわゆる五・三〇事件など、各地に反帝運動が波及して、物情騒然たる時代であった。

しかし一般市民の生活は、そんな騒ぎもどこ吹く風と、至極平靜で、普段と変わりなかった。「さすがに広いんだな！」。ゆったりした気分、大らかさ、これが大陸的というものか、といっぺんにほれ込んでしまった。ただニンニクの強烈な臭いはいささか参ったが、とにかく無事上陸。東方通信支局3階の屋根裏に住むこととなった。

この老靶子路の支局は、T支局長宅の一部を事務所にした家庭的なもので、海外生活は初めての私にとっては、絶好の雰囲気であった。因縁というか、この環境と第一印象が、爾後10年間の中国生活の根底となったのである。

仕事も住まいも快適に歩み出したが、大正15年5月、日本新聞聯合社に合併されて、東方通信は解消、身分も聯合移籍となった。同時にわが任務も、ガラリと一変した。東方は外務省関係の宣伝機関だが、聯合は中国各地に支局を持っている本格的な通信社で、従来の東方の仕事のほかに取材、連絡という任務が加わったわけである。

そこで至上命令が下った。連絡方法の開発である。これは全社的な大事業で、本社、出先が丸となって取り組む必要があるので、まず特設部隊を設けることになった。仕事の性格上、覆面部隊の誕生ということになる。第1段階として上海、天津に連絡の柱となる電台（無線局）を置くことに決まったが、これらのことはすべて極秘裡に進めなければならぬので、特設部隊の苦労は、並大抵のものではなかった。しかもこの任務は、太平洋戦争まで続くのである。私が東奔西走、足跡遍きは、この任務遂行のために他ならない。

決死の覆面部隊の協力で、昭和7年、松本重治支局長上海赴任の頃には、中国相互間及び内地との連絡網は、ほとんど完成したのである。しかしここまでに至る覆面戦士たちの心労は、言葉に尽くせぬもので、頭の下がる思いである。しかもこの功績は、一切表面に出ない、縁の下なのである。名前まで紙上に載る、記者の晴れがましさに比べ、余りにも報われない戦士たちではあるが、あくまで裏方の任務に徹して、自己満足だけに生きている、舞台裏の名もなき勇者達なのである。独り遠く思いを馳せて、感無量である。

ここでわが特設部隊の、偉大な功績と献身的な協力に対して、感謝と敬意を表することをお許し願いたい。

さて、私生活の一端を語ることにしよう。とにかくおおかで暮らしやすかったことは事実で、近郊への小旅行なども結構楽しかった。春はいずこも同じで、青葉と花で気分も浮き浮きしてくる。そして日本の春の山野を思い出す。蘇州の松の木のある山を見ながらの蕨狩りも上海歳時記の一つである。

秋の中秋名月には、地元日本紙主催で杭州団体旅行がある。西湖に屋形船を浮かべて、紹興酒を傾けながらの月見の宴。湖上では權におどろいて、鯉が飛び跳ねる。その銀波がまた美しい。

ある秋、作家林美恵子さんと一緒になった。小柄な女性だが、無類のウィスキー好きで、いつもポケット瓶を離さなかった。汽車の中でもチビリチビリ飲みながら窓外の景色を時々メモしていた。紹興³³駅ではホームに降りて盛んにメモっていた。いくら飲んでも、書くことを忘れない。さすがと感心したことである。こうした遊覧旅行も、時局とは関係なく自由で、一般大衆も別段敵意を見せるようなことはなかったが、それも昭和5年くらいまでで、その後次第に内乱の嵐が強くなり、中国街の一人歩きも危なくなってきた。こんな情勢になってから、さらに5、6年中国生活を続けたが、仕事に追われていたせいか、余り長くは感じなかった。

〔南船北馬〕第8号 1988年10月発行

座談会 北京時代の平田さんの思い出

1962（昭和37）年10月27日
日比谷会館で

（出席者）

平田秀子

（元国際通信北京支局員平田泰吉氏の妻）

前田盛蔵

（元北京の日刊紙「順天時報」記者）

亀谷利一

（元新聞聯合南京、天津、北京支局長）

水野政直

（元同盟通信外信部）

福岡誠一

（元新聞聯合外信部長兼ロンドン特派員）

佐々木健児

（元新聞聯合南京、奉天、現瀋陽、各支局長）

大平安孝

（元新聞聯合政治部長）

長林密蔵

（元新聞聯合内信局次長兼地方部長）

古野改造

（古野伊之助氏長男）

古野伊之助

（元国際通信北京支局主任、支局長、元新聞聯合総支配人、元同盟通信社長）

（編集者注）平田泰吉氏は早稲田大学を卒業後、東京日日新聞を経て東方通信に入社。北京支社に勤務していたが退職、当時国際通信の北京支局長を務めていた古野伊之助氏に誘われて国際の北京支局に入った。その後、新聞聯合の東京本社に移り外信部員となった。



佐々木 平田（泰吉）さんと古野さんのつながりのそもそものを奥さんから
お話し願いたいと思います。

平田夫人 平田は初め東方通信にいたのですが、支社長の横山八郎さん
と何かのことで争ったんでしょう。そしてフラッと辞めたらいいんです。
前門³⁴に飲みに行ったらいいんですが、それを古野（伊之助）さんが探しに
行って国際通信の仕事させてくださるようになったようです。そのうち
早く嫁でももらわなくちゃいけないと、古野さんの奥さんが大変心配
してくださって、平田の弟や私の姉を経て当時新京³⁵（現長春）にいた私に
話があった。名前だけはよく知っていたが、私は見たこともないのです
けどもね。姉も兄も勧めるし、その気になったのです。

それで1年ぐらいたって大連まで結婚しに来たのです。弟の家で結婚
式をやって、大連から天津へ船で行きました。その途中、船の中で「お前、
古野さんの奥さんとはどんなことがあってもけんかしちゃいけない」と

固く言いつかったわけです。「古野さんの奥さんとけんかすることがあったら俺は去らねばならないのだから、そのつもりで」と。私もそのつもりで行ったんです。そうしたら古野さんご夫婦が駅に迎えに来てくださったって、棲鳳楼せいほうろうの家へ行ってお食事をいただきました。棲鳳楼に部屋を借りて、きれいに待っていてくださいました。そこで新婚生活を始めたわけです。「道具を買い」とお金を下さったり、万事、古野さんが準備してくださったのでした。

そのうちに大正12（1923）年の大震災です。古野さんがあたふたと東京へお帰りになった。汽車がなくて裏日本を通ってお帰りになりましたね。大変な難苦をしてお帰りになりましてその後、北京へはおいでにならなかった。

福岡 古野さんは国際通信の北京支局長だったのですが、震災で東京はどうなったか分からない、東京は壊滅したというような情報もあった。それで古野さんが非常に心配した。古野さんはかねて日本の代表的な通信社をつくらなければいけないという構想を持っていて、これは一つの機会だということを感じたわけですね。それで、本社に黙って独断で日本へ帰った。そのときの国際の総支配人がジョン・ラッセル・ケネディ。社長は樺山あひすけ（愛輔）さんだが、ケネディが実際の運営人で、国際は外人の手で運営されていた。古野さんはケネディに「どうしてお前は帰って来たのか。勝手に任地を離れたら駄目じゃないか。すぐ北京に帰れ³⁶」と言われた。

古野さんはケネディと親交があつて、北京へもケネディに拔擢はつてきされて若い時分に送られたんだけど、古野さんは相当決心を持っていたんで「帰らん。そんなことをいつてるときじゃない。ここで国際の根本的な立て直しをしなければいかん」という提案を初めてしたんですね。それが大正12年の秋。それでケネディに「この通信社は外人の手でやっては

いけない。あんたは引つ込まなければならぬ。日本人の自主的な通信社にしなければいけない」と直言して説いた。

ケネディという人は偉い人で、古野さんを信頼していたせいもあるだろう。「分かった。お前の言う通りだ。俺は引退しよう」ということで引退を決心し、自分に代わる人を物色して白羽の矢を立てられたのが岩永（裕吉）さんです。岩永さんの所に乗り込んで口説き落としました。岩永さんは寝耳に水で聞く意思がなかった。それが古野さんの熱意に動かされて承諾し、その年の内に岩永さんが専務取締役になった。

それでロイターと契約改定の交渉をやり、新しい協定ができた。これは非常に画期的なもので、日本の新聞からロイターという名前は全部消えてしまった。ロイターの電報は国際が自主的にやって全部、国際の名前で発表する。そういう大事なときなんですね。日本に帰って来られてそれっきり古野さんは北京に戻らなかったと思う。それで国際の支配人になった。岩永さんが専務で古野さんが支配人。古野さんが確か数え年で33歳か34歳で、非常に若い時なんですね。また奥さんの話に戻っていただきたいと思います。

日ソ交渉で古野、再び北京へ

夫人 その後、土田（金雄）さんがいらつしやるまでの1年間、平田が留守番しましたが、その間、会議が何かで古野さんがもう一度北京にいらつしました。

福岡 それはこういうことなんです。大正13年春になって北京で日ソ交渉が再開された。芳沢・カラハンのあれです³⁷。古野さんが支配人として国際を立て直し、一応基礎を作つて大正13年春になった。その時、芳沢・カラハンの日ソ交渉が始まる。これは日本にとって当時は大問題だ。緑

の切れたソビエトと初めて交渉を持つということは。この交渉をどうしても、ものにしなければいけない。それで外務省とも相談の上でしようが、どうしても古野さんにもういっぺん行ってもらわなければいけないという岩永さんの考えで、北京にまた出掛けて行ったわけです。国際の支配人として行った。

私は当時、駆け出しで、北京から英文の電報を古野さんが送ってきた。カラハンの会見記です。その英文が実に立派なんで、僕は驚嘆しちゃって、今でもその書き出しの文句を覚えているくらい強い印象を受けた。カラハンとは非常に密接に連絡して日本側の情報を中心になったんです。結局、その交渉が出来上がった。古野さんは北京を9月ごろに引き揚げ、私の記憶では入れ替わりに土田さんが支局長になった。

夫人 そうです。その間1年。カラハンのときに、亡くなった萩野(伊八)さんを連れて来たわけですね。

福岡 萩野さんは古野さんに付いて初めて天津に行った。萩野はロシア語出身だ。

夫人 今でも私、平田の言っていたことを覚えているんですよ。「萩野はひどいよ。公使館で誰も会えないのに向こうに行ったらカラハン、カラハンと大声で呼んだ。それでびっくりして足をとめたカラハンを捕まえて話をした」というんですよ(笑)。

大平 萩野君の話によると、試験に半分落第したらしい。国際に入るとき。後で古野さんが救って入れてくれたという記憶を持っていたよ。

福岡 萩野君はロシア語だ。試験官はみんな英語だからどうしようもない。ロシア語のできる者を欲しいということで採用した。ただ、本当にできるかどうか誰も知らない(笑)。それでタス(通信)の前身のロスタ(通信)支局長に古野さんが添書を書いて萩野君に持たせてやった。萩野君は当時、ルパシカなど着て大した格好をしていた、自分じゃ公然と左翼

ばりだね。古野さんはそういうところを何も言わないで面白がっていた。大したものですよ。「君、ロシア人がいるから会ってきたらどうだ」と言ったものだから、萩野君は「喜んで行く」と言って出掛けた。萩野君は大いに国事でも談ずるつもりで行ったわけだ。後で聞いたら添書には「この男はどれだけロシア語ができるか試験してくれ」とあった(笑)。とにかくいいだろうということになったらしい(笑)。

そういうわけで古野さんが北京に行くときに萩野君を連れて行った。入社早々、1カ月か2カ月足らず。そういうところが古野さんの思い切ったところで、われわれもそのときに一緒に話を聞かされたけれど新聞記者というのは、種を取るだけというのは絶対駄目だ。そういうことはできるものじゃない。種は常にギブ・アンド・テークだと。ギブ・アンド・テークということ初めて聞いたよ。こっちから情報を持つていかなければ、決して人は情報をくれないのだと。大いに鼓舞された。萩野君を連れて行って最初は天津に放りっぱなしにした。

亀谷 口幅ったいけど、そのときに萩野先生の面倒を見た。わしは古野さんに「新聞記者になったら無冠の帝王で思うことができる」と思っていた。ところがなんぞ分からん資本家とか支配階級があつてなかなか自分の思うようにいかない。自分の方針とそういう悪勢力といたら語弊があるかもしれないが、板挟みになって悩み抜いている。君は多情多恨らしいから、わしの二の舞を演じさせ、悩ませることをしたくない。お前さんは商売人になって金もうけするのが向いているようだから商売人になれ」と言われた。

わしはそのとき、北京でひどく左翼になって真っ赤になっていた。「お前、商売人になれ」と言われて納得できなかったが、説き伏せられて結局、天津の松村利男老に預けられ、松村老の世話で貿易屋の番頭になりたいきさつがある。そのとき、私は新聞記者を諦めちゃった。新聞記者

になるつもりで1年から1年半、古野さんに師事した揚げ句、そういうことでいったんは新聞記者を諦めたが、その後、萩野君が来たときは天津で新聞記者になっていた。

その矢先に古野さんがポカッと来て「亀さん、これは東京から連れて来た。よろしくお引き回しを願う」と。そのとき、私は古野さんに「あんた。私が新聞記者に向かないから辞めろと言ったけれども、とうとうなっちゃいました」と言った。(古野さんは)萩野さんを天津に置いて行った。あれはなかなか変わっておりましたね。わしは天津では顔の売れた新聞記者になっていたので、萩野君と一緒に連れて面倒を見たが、だいぶ変わったところがありましたね。古野さんもいい加減なものを押し付けたものだと思います。

福岡 そのとき、萩野君が本社に私信を寄こした。今でも面白いけれど、北京に行こうと思って来たら古野さんに天津に置かれて何もすることがなく、毎日天井ばかりにらんでいるという手紙が来てね(笑)。古野さんは新聞記者の現実の悩み、思想をもっていた。ご長男の改造という名前などもそういうことを表しております。その時分、古野さんはやっぱり一種の左翼思想を持っていたんですね。

亀谷 左翼思想と言ったって破壊主義じゃなくて、急進的な考えを持っておられたことは確かだ。平田さんは酒飲んであてにならない。私の方は出しゃばって生意気なことを言うが、仕事をやらしてみるとできやしない。20歳そこそこですから。尻拭いやなんか、嫌なこと一切合切が古野さんに行くんですよ。古野さんは一切嫌な顔をせずにするんですよ。内村鑑三さんに私淑していた。内村さんを私はよく知らないが、坊主臭くないキリスト教信者じゃないですか。

福岡 学生の間に信奉者がいた。

亀谷 古野さんは、お寺や布教にとらわれないキリスト教だが、そうい

うものを非常に深く身をもって体現されていたのではないかと思うんです。

福岡 余談になるが、後年の古野さんは大きな事業に責任を持たれたので、どっちかというと事業家の要素を表に出さざるを得なくなっと思う。北京の国際のときには、人間的な温かみが表面に多く出ていたと思うんです。

亀谷 奥さんを前にこう言っては何ですが、始末が悪かったですよ。平田さんと私は。とにかく月給が渡っちゃいかんです。お金がないと割と辛抱なさるのですけれども、お金が入ったら。

夫人 ですからお金を全部平田に渡さないで、嫁が来たときの準備に奥さんが取っておいてくださったらしいんです。それで私が行ったら「道具買え」と言つて100^{ドル}か何か、子供が生まれたらまた下さった。

福岡 知らない人にはつきりさせておきたいのは、平田さんは飲むことに集中されていたことですね。飲むだけだった。それは強調しておかんと。

寝る時間惜しんで読書

前田 女性というものにほとんど興味がなかったらしい。

夫人 平田から酒を取ったら私などあの人のそばに居るのはもったいないぐらいでした。半面、あの人のそばにいたおかげでだいぶ勉強をしました。あの人が酒を飲むと私は早く寝るでしょう。それが憎らしいというんです。いろいろ読んでいました。それで一人でお茶を入れたり、子供たちのお菓子を食べたり。子供たちも起こしてました。それで私に知らせるのですね。自分で読んで翻訳した歌劇の話とか、支那の話とか。私もあの人ののおかげで利口になったと思いました。

福岡 平田さんが演じた奇行のことを。

前田 奥さんがおられると具合が悪いのですが、毎日正午になると、当時の公使館に山内一郎という人がいてそこで情報をもらっていた。ある日みんな集まって、大体話が済んだ時分に平田さんがすっかり酔っぱらって何かを持ってつかつかと入って来た。どっかと椅子に腰掛け、いきなりビール瓶を机の上に置いた。瓶の口が欠けている。山内書記官が色をなして怒り、「それは何だ」となじったが、平田さんは黙って腕を組んだまま。私も慌ててしまった。確かこのことで横山さんとの関係が面白くなって、東方を辞めるようになったようです。

福岡 僕がよく聞かされたのは、酔っぱらって往來に寝てしまい、巡査や車引きが来て世話をした。

前田 私なんかいつも一緒だね。夜明けまで飲ませる店が3軒あり、そこで平田さんを搜したらすぐ分かる。そういう店で飲んでいるか、そうでなければ、どっか帰る途中、路傍に寝ている。

福岡 黄包車（人力車）の車夫をよく連れて行ったとか。

亀谷 車引きとか巡査とか、地回りが平田さんをよく知っている。私が国際の支局にいと、夜中だろうが電話がかかってくる。街角で寝ていて交通を妨害する。何とかそこは始末したが、誰か迎えに来いと電話がかかってくる。私は迷惑に思っただけでも、古野さんは夜であろうが、雪が降っておろうが、電話がかかってくる途端に行こうという。いつでも。私が行かないときは、古野さん一人で行かれた。それが本当に何十回に及んだか分からないほどです。

古野さんだって神様や仏様ではないから、そのうち腹を立てたりされるだろうと思っても、絶対にへこたれないし、参ったと言わない。怒らないし、怒鳴らない。それで私も参って古野さんに言われることだったから従わねばならないと思うようになった。

古野さんというのは本当に人間的な偉大な思想家、宗教家だったと思う。古野さんは平田さんに散々てこずらされながらいささかも嫌な顔もせず、終始温かく面倒を見続けられた。常識の物指しで測ることができない、古野さんの人間性の自然の表れですね。平田さんも古野さんを中心に尊敬しておりました。古野さんに対しては、これは絶対でしたね。

夫人 古野さんには直接、自分の決心とか何とかをあまり言えないですね。同盟ができたとき、私に「古野さんの面子にかかわるようなことがあれば、俺は退くからお前、奥さんを通して古野さんによく聞いて来い」と言うのです。「そういう大事なことで、私が言ったってしょうがないでしょう」と言うと、「いいんだ。お前でもいいんだ」と申しました。そこで私が奥さんに「平田がこう話している」と言っただけです。奥さんが古野さんにお話をして「それじゃいったん辞めて、また時期を見て何か仕事があるかもしれない。しばらく家で遊んでいろ」ということになり、奥さんが私どもの家にいらして、言いくそうにお話しくださった。

それで社を辞めて大森の馬込の畑の中に引きこもった。そのうちに忙しくなったでしょう。「すぐ出て来い」と電報が来た。そうしたらとても喜んで。気が小さいというのか、大事なことで自分でも直接言えない。それを私も非常に物足りなく思うことが度々でした。私生活でもそういうことがとてもあるんですよ。家を借りる時の談判とか。

亀谷 平田さんが偉すぎるので、そういうことをやらせても駄目です。

福岡 大体しらふのときにはものを言わん人だ。北京から東京本社へ転勤になったのは何年でしたか。

夫人 あれは大正15年9月です。すぐ昭和になりました。それから古野さんと大阪に行った。大阪はあまり気に入らなかつたらしい。東川さんとは全然合わなかつたのです。そのときは、飲んで社に行かないということとは全然ありませんでした。

福岡 大阪に行った理由は、無電局が大阪にあり、支那の電報を大阪で受信していたからだ。その後、東京へ来たのは何年ですか。

夫人 11月ぐらいに行つて翌年の5月に東京へ帰つて来ました。どうしてそんなに早く帰るのかと聞いたら「俺は東川さんと合わないから古野さんが帰つて来いと言うので帰るのだ」と言っていました。

前田 平田さんが北京に行かれたのは大正何年ですか。

古野、英字紙社説を執筆

夫人 私の結婚前だから知らなかったが、大正4年ぐらいだろうと姪が言うのですよ。

前田 そうすると私より2、3年前ですね。

水野 人事部に調べてもらつたら大正5年に東京に入つていたのでね。

亀谷 鷺沢(わしざわ)与四三(よしじ)さんが主宰していたノースチャイナ・スタンダードの社説は古野さんがほとんど毎日書いていたが、当時公使館の書記官だった徳川家正さんが「古野さんの英文は大変なものだ」と感嘆しているのを聞いたことがある。

福岡 それで分かった。カラハンの会見記の電報を英文で送つて来たのだが、その見事な英文に僕は驚嘆したんだ。あなたの話はその前のことだからそれが勉強になったんだらう。そういうわけですますうまくなつたんだな。

亀谷 毎日2時間か3時間ぐらい、横文字の単行本を持って散歩に行くんですよ。城壁といわず北京郊外といわず、黒龍潭(こくろうたん)、西山、そういう所まで平田さんなどもよくお供しました。古野さんが歩く里程というのは大変なもので、みんな驚いた。当時北京の新聞関係者は自動車など持っていなかった、後に銃殺された京報の邵振青が小さいのを持ってい

たくらいで。ロイターといえども持っていなかった。

夫人 私は平田が帰らなければ夜1時すぎになつても寝られないので事務所に行つて待っているのです。そうすると、いつも古野さんが英語でペラペラおっしゃると、奥さんがタイプをする。書き換えもしないでそのまま。私は初めビックリしましたね。古野さんがおっしゃる通り奥さんがすぐ打つんですもの。私はたまげてしまいましたね。

福岡 古野さんのところに奥さんが英語を習いに来た。それで奥さんの方が熱心になつたらしいね。

亀谷 北京にはミス・ソンヒルという英語の先生がいて、この方に奥さんは英語を習つておられた。私は英語はいっこうに駄目だったが、奥さんは非常に熱心にやられました。私と古野さんは英語と支那語と交換教授ということで、飯を食うときにやっていた。やっていたが、こちらは心そこにあらずで勉強にならず。古野さんはやっていましたね。古野さんは、国聞通訊(こくわんつうしん)の胡霖(こりん)という人と交際があつたと思うのですが。

福岡 胡霖とは非常に親交があつたのだが、胡霖は天津におつたでしよう。

佐々木 「大公報」は天津だが、大公報を復刊するまでは国聞通訊の社長で北京にいた。

前田 林白水というのがいたね。張作霖に銃殺された。

亀谷 それから英文学者の辜鴻銘(ここうめい)。

夫人 私が棲鳳楼にいたら、弁髪を下げて変な帽子をかぶつた人が門から入ってくるのですよ。びっくりして「奥さん、変な人が来ましたよ」と門から叫んだんです。びっくりしてね。

亀谷 あの人は、奥さんが日本人だった。

前田 スタンダードの顧問格だった。

佐々木 前田さん、あなたは友達として古野さんと付き合っていて、ほ

とんど毎日のように来ていたそうだが。

前田 毎日新聞の後藤豊彦君というのが古野さんよりちょっと前に北京に来たのだが、私と同じ年だし、すぐ彼と仲良くなった。後藤君も古野さんも東京だったので、古野さんと知り合っており、私は後藤君の紹介で初めてお目にかかった。当時、新聞関係者は非常に小人数だったので、すぐ親密になり、初めのうちはほとんど毎日のように一緒に見物して歩きました。

福岡 北京の日本人はその頃、大体2千人ですか。

夫人 いや千人くらいです。その1割が小学生で百何十人かでした。

前田 だからすぐみんな仲良くなってるね。特に同業者ですから。古野さんも最初は支那の通信にはちよっと。

亀谷 手を焼いておられたようだ。

前田 私は初め、通信を見るなどのお手伝いをしたが、通信は夜遅く来て、みんな出そろうのが11時ごろだった。そのうち平田さんが来られて全部見ておられました。当時の北京の新聞人には一種の梁山泊的気分が残っていて、非常にのんきにやっていました。古野さんが来られてビジネスライクでやらなければ駄目だと新風を吹き込まれたわけです。

福岡 新聞仲間からどう見られていたのか。

前田 非常に親しまれましたね、ああいう人ですから。

福岡 私はその後、漢口に行ったが、北京の海軍武官室にいた人が漢口に駐在しており、北京時代の話が出たが、口を極めて古野さんのことを称揚していたね。

佐々木 亀谷さん、北京時代の古野さんの柔らかない話の一つ。

亀谷 改造さんがいらっしやるから。

佐々木 改造さんの生まれた頃の話もね。

亀谷 改造さんの出生届の時、「人間の名前というのは一、二、三でも

なんでもいい。若旦那(亀谷のあだ名)に任せるから」ということだった。わしは「人の一生を左右する名前をつけるのにいくら事務的な手続きでもそれは困る」と思案していた。ちょうどその頃「改造」「中央公論」「解放」という雑誌があつて、それが応接間の机の上かなんかにあつた。そこでどうしたものだろうと、平田さんや鈴江(言一)さんと相談した。「中央公論」という名前はないだろうし、「解放」も変だし、結局「改造」という名前がいいじゃないか。古野改造なんていい、古い野原を新しくして良い名前じゃないかということになり、それで行こうと届けた。

前田 わしは鈴江君が選んだという話を聞いた。

亀谷 その後、花と果物を持って病院に行ったところ、奥さんが「実は坊やの出生届をしなければならぬが、どうなっているんでしょうか」という話だ。「それはもう昨日やつておきました」と言う、「どういう名前をつけたのか」「古野改造という名前をつけました」。古野さんの奥さんは大抵のことでは怒らなかつたが、あまりその名前は賛成でなく、「そういうことは私に相談してからやつてもらいたかつた」としみじみ言われた。わしは本当に穴があつたら入りたい思いをした。2カ月ほど前に改造さんにお会いして、非常に良い名前だと思つていとおつしやるので安心した(笑)。

もう一つは、これもやはり(大正)10年か11年頃だと思ひますが、当時としては大きな飛行機が郵便飛行で北京から濟南まで飛んだ。古野さんが外国代表として乗つた。古野さんは奥さんに言わなかつたらしい。私は前の日に聞き、何かの拍子に奥さんに「今日、古野さんは飛行機ですよ」と話すと、「それをあんたいつ聞いたのか」「昨日聞いた」。よほど頭に来たとみえ「とんでもない話だ。なぜそういうことを知つていて私に言つてくれなかつたのだ」と大変叱られた。その頃、飛行機は危ないといふことで。

福岡 それは危ないよ。

前田 みんな乗せるという話だったが、みんな怖がつて。わしも乗れと言われたが恐ろしくて乗らなかつた。

亀谷 だから出生届と飛行機の点に関しては完全に黒星で、古野さんの奥さんには全く頭が上がらない。

福岡 あんたが名前を付けたの。

亀谷 鈴江さんらと相談したんですよ。お父さんが何でもいいから届けてくれということで、事務的手続きの方だけ頼まれたんだけど、名前についてはわしが決めなければならぬでしょう。それでそういう経緯になった。身なりに無頓着な古野さんの話だが、私がお世話になった直後でした。言いつけられて礼服用のエナメルの靴を北京中探し回ったが結局ない。それで古野さんは燕尾服を着て、布製の支那靴を履いて悠然として大総統府の園遊会に行ったのです。帰ってきてから一緒に行ったロイターの記者が冷や汗が出たと言うのですよ(笑)。

福岡 結局、改造という名前は誰がつけたんですか。前田さんですか。

亀谷 あんまり追及されると困るけれど。平田さんはこういうことに対しては極めて慎重だから意見はなかつた。あつたとすれば鈴江さんですよ。前田先生もこの方がよいとか、白とか黒とか言わん人ですから。

福岡 「改造」という雑誌は日本では非常に読まれたもんですよ。中央公論を圧倒していた。改造社がバートランド・ラッセルを北京から日本に招待し、慶応で講演会をやった。イギリスから北京まで来て、日本に初めて来た。北京の任期を終えて帰りに神戸に初めて上陸した。北京というのはその時分、電車はないし、非常にのんびりした所だった。神戸に入港した時は賀川豊彦が相当名前を売っている頃で、『死線を越えて』というのが出ていたが、船に迎えに行った。菜っ葉服の工人が迎ええたわけだ。港は大きいし、煙は出ているし、ラッセルは北京と対照して日

本は非常に工業化していると驚いたのです。

東京へ来て慶応の講演会に行く途中、三田の通りを改造社社長の山本実彦と一緒に自動車で行くと、往来に人がいっぱいいて車が動けないくらいぞろぞろ歩いている。ラッセルがこの人はどこへ行くんだと聞くから「これはみんなあなたの講演を聞きに行くんだ」と言ったら、またまげちゃった。そういう時代だ。だから「改造」というのは、その時分、日本の青年の間には非常に有力な勢力になっていた。その名前を取ったのは決してでたらめじゃない。

亀谷 それは非常に良いことを言ってもらって、わしも安心した。申し上げたようないきさつがあつて、その時の雑誌の表紙の色まで覚えている。「改造」というのは青い筋が入ってね。

大平 青年に非常に憧れられましたね。

福岡 ご本人は改造という名前をつけられて迷惑をしましたか。どうですか。

佐々木 ご本人は気にいっておられるようだ(笑)。

長林 弟さんは改二だが、それはどうだろう。

古野(改造) あれは失敗だったと父が言っておりましたね。改造という名前はいいしよっちゅう言っていた。私は小学校の時、これは変な名前だと思っていた。ところが親父は「これはいい名前を付けた。傑作だった。傑作だった」と終始言っておりましたね。

平田に心底から惚れる

福岡 震災後日本に帰って来られてから幡ヶ谷の家に行った時、まだ小さかったあなたのことを「まだこれは日本語を覚えなくて困っているんだ」と言っていた。その際に名前の由来については、別に亀谷さんがつ

けたとは言わず、自分が付けたように言っていた。

夫人 (古野さんが) ロンドンへ行ったのはいつですか。

福岡 1926年ですか。大正15年ですね。

夫人 その時に私たちは帰って来たんですね。

長林 入れ替わりに帰ってきたわけだ。

夫人 私が長女を大正12年に産んだんです。難産でした。古野さん一家と私の姉と付いて、(母子)2人とも助かったのが不思議なほどの難産だった。後で聞くと、古野さんが何回も朝から私のところへ行ったり来たりしてくださったそうですよ。「まだですか、まだですか」と言って帰って行つたと姉が知らせてくれました。私のことを心配されて自分の家にいられなかった。そういう、とつてもできています方ですね。

亀谷 特に平田さんには古野さんは心底から惚^ほれていらつしやうた。そういうもんですから、とにかく平田さんのこととなると。

福岡 奥さんに申し上げちゃ悪いけれども、平田さんはほとんど一方的に古野さんに借りをつくつた。ところが1回だけそのお返しをしたことがある。1回だけではないかもしれないが、酒のことだね。それは昭和3年か4年ごろだが、ロンドンから帰ってきた後のある年の忘年会が芝の池州²¹というところであつた。聯合になっていたんだが非常に不景気で、内信²¹の出来立てでお金がある時で非常に苦しい。ボーナスは15円が最高で15円、10円、5円の3種類だったか、そういう時があつた。これは最低の時だ。

古野さんもみんなに済まんと思つたんですね。社員と言っても数が知れているが、広間にコの字になって古野さんが回つてみんなから杯を受けたんです。さすがの古野さんも酔っぱらつたんだ。古野さんは、酒が好きで飲む人じゃないけれども、飲んだって酔わない人だ。酔つたのを見たのはそのときが初めてです。本当に酔いつぶれてあげたりした。

ところがそのとき、介抱したのが平田さんです(笑)。これは非常な傑作で、どうしてそういうことになったかという、僕はそのとき、外信部長をしていて、外信からも幹事が出た。半分はいたずらで、また平田さんに酔いつぶれられたら困る、というつもりで、外信の幹事は平田さんと言つちやつたのだ。平田さんも真面目だからその日は酔えないんだ。酒好きの平田さんが全然酔わないで、一生懸命幹事の役をやるんだ。だから古野さんが酔いつぶれたときに一番看護したのは平田さんだ(笑)。

夫人 それは私、聞きました。大変なことがあつたんだと。

福岡 平田さんも古野さんを本当に親身に世話したから結局、平田さんにとつてもいいことをしたと僕は思った。

(古野伊之助氏参加)

古野 ここ2、3日、鈴江言一の夢なんか見てね。鈴江というのはちゃきちゃきの共産黨員だね。日本におられないもんだから支那へ来たんだ。

亀谷 日本でちゃきちゃきだったのですか。

古野 日本で共産黨員で、警察ににらまれるもんだから、北京に逃げたんですよ。北京では同志ということになつちやつて、あれくらい支那の共産党の中に勝手に出入りを許されたやつはいないでしょう。あれはもう大したもんだつた。

福岡 漢口に国民党と共産党と合作の政府ができたときには、一方の指導者になつていた。

古野 今頃生きているとなかなか役に立つのだけれど。

水野 太平洋戦争が始まった後に上海で会つた。ベレー帽をかぶつてね。めつたにガーデンブリッジを渡つて日本租界に來ないのだ。ちやうど大形孝平の家に遊びに来ていた。

古野 そう言えば日本にはなかなかなかったよね、市川正一、青野季吉とか、みんな古くてね。

福岡 国際はなかなか大したもんですね。

古野 共産党はたくさん飼っていたよ。

亀谷 ロシア行って帰りがけにどこかで殺された人がいた。大庭おおばかこう柯公だったか。確か古野さんがいろいろ世話してソ連に入ったのですね。

古野 僕が口を利いてやってね、そうして帰りに殺されたね。

亀谷 シベリアの付近まで帰ってきて殺されたんですね。

福岡 古野さんが代わりに社説を英語で書いたというのは誰？

古野 スタンダードでよく社説も書いたし記事も書いたね。

福岡 そのとき、スタンダードで誰がやっていたのですか。

古野 ニューエルというドイツ人が編集長をやっていたんだよ。

亀谷 私がお世話になっていた時代、今考えてみると、1年か1年半ですが、その時代に不破ふわ瑤磨たま太さん、毛利もうり八十そ太郎たろうさんが長く滞在しておられた。

古野 ピンさん（横田二）と鈴江言一は僕の事務所にたむろして、のべつまくなしにいろんな話をするし、一緒に芝居を見に行ったりして非常な親友だったな。

福岡 国際が初めに北京に支局を置いたのはいつか。古野さんが初めてですか。

古野 僕が初めてだ。

福岡 大正9年ですね。

古野 ジョン・ラッセル・ケネディが、支那へ行って見て来いと、不破さんと僕と2人で支那旅行に出掛けた。日本のナショナル・ニュース・エージェンシーが、日本人が支那に行つてやらなければならない。外国人に頼んでニュースをやってもらうのはいけない。日本人自身で支那を開拓して、そのためにどうしたらいいか調べてこいというのが目的で、それで僕たち2人が支那へ視察に行ったんですよ。帰ってきて北京とか

上海とか漢口とかの話をしたら、「それじゃ結局お前行け」と、北京駐在員をケネディに言いつかつちやった。

福岡 大正12年の震災の後に古野さんが日本に来たのは、独断で来たんでしよう、ケネディは支那へ帰れと言ったと。

古野 ケネディが帰れと言ったのではなく、そこにラクソン・スウィートという総監督みたいなのがいて、そいつが「早く帰れ、帰れ」と。「おまえのポストは北京だ」と言つてしきりに帰らせようとするのだ。国際は日本人で取つてしまわなければいかんので、外務省の小村欣一（情報部長）とか、矢田部保吉（情報部課長）というのがいたが、国際はどうしても日本人で建設してやっていく時期だから、ケネディが何と言おうが、やっていかなければならないと思つていた。そのときに岩永裕吉を引っ張り出すことになったんだ。日本人にやらせると言つたつて誰にやらせるか。名義上は死んだ樺山愛輔が社長なんだけれども、岩永を引っ張り出そうということになった。岩永を引っ張り出すと同時にケネディに勇退の勧告をする。ケネディを呼んで、あとは日本人の岩永にやらせると談判することが、俺一人の肩にかかっているんだ。両方とも。

福岡 一番大事な時期ですね。

東京倶楽部で岩永を説得

大平 岩永さんと初めにお知り合いになったのはいつか。

福岡 岩永さんは国際の取締役だね。

古野 国際の取締役だが、ケネディと仲が悪くてね。ケネディも日本人の青二才だと寄せつけないのだ。親切に「君たちがやらなければ」という話はしないのだ。岩永とケネディとがどうもなかなかうまくいかないんだ。そこら辺に愛国生命というのがあって。

福岡 今、日本生命が建築しているところだ。

古野 (岩永の事務所がある)愛国生命へ出掛けて行って、「あんた日本人のくせにこの大役を引き受けないというべらぼうなことはない。何でもかんでも引き受ける、承知したと言わなければ動かない」と言って岩永の事務所に座り込んだ。先生も事態の重大性を考えて、「ひとつよく考えさせてくれ」というところまで来た。俺一人がガタガタしたって駄目なんだけれど、その時分なかなかファンがいた。通信社というものををつくらなければいかんという案があり、井上準之助、渋沢栄一はもちろん、串田万蔵というその時分のひとかどの実業家がみんな寄り合い、岩永を東京倶楽部くらぶに呼んで昼飯を食いながら「君しっかりやらなければいかん」と言うものだから、とうとうやってみようということで決心しちゃったんだよ。

それでケネディのところに行って、「私は北京で模様を見ていて、どうしても日本人の手で通信社というものをやるべき時期が来たと思うから退いてくれ」と。当時、俺もなかなか若かったから元気があったんだな。ケネディに談判に行ったんだ。ケネディは「お前の言うのが本筋だ。俺は何も未練がないから」と言うので、日本人の手による通信社という話に乗って政権譲受が行われた。

福岡 ケネディに慰労金は幾らやったんですか。

古野 10万円か。その時分の10万円だ。

福岡 相当なもんですね。

古野 ケネディは年取った細君とアメリカに帰り、それで余生を送ろうという考えだったんだらう。

鉄道の列国分割を阻止

福岡 その当時、北京の公使館にいたのは、高尾はいたんですか。

古野 北京の公使館ではつきり覚えていたのは、死んじゃったけれども、後にトルコ大使になった吉田伊三郎だ。大正12年に山東省の臨城県付近で孫美瑤そんびようを首領とする匪賊団が津浦鉄道の通称「ブルー・エクスプレス」と呼ばれた最新式の特急列車を襲撃して欧米人の男女乗客多数を人質として拉致して莫大な身代金を要求した有名ないわゆる臨城事件が起きた。この事件をめぐり北京駐在の列国公使がほとんど連日のように、いわゆる外交団会議を開いて善後策を討議した。当時の列国の威力は大したもので、北京外交団は実質的に支那を左右していたので、支那政府は外交団会議の動向がおっかなくて震えあがっていた頃だ。この外交団会議に吉田伊三郎が日本側を代表して出席しているんだ。会議には支那の鉄道全部を列国で分割し、管理してしまうとか、いろいろ難しい問題が持ち出されるという重要段階にあった。

吉田伊三郎と俺は非常に懇意にしていたから、俺は「放っておくと支那は世界の列国に分割されてしまう。これはどうしても支那を救ってやらなければいかん」という話を伊三郎にしたところ、「その通りだと私も思う。どうしたらいいだろうか」と言うので、「外交団会議にあんたが出ているのだから、会議のすぐその後で俺に、どこの公使がこう言った、どこの公使がこういう提案をしたということを、外務省に報告するのと同じように俺にいちいち知らせろ。そうしたら俺はすぐスッパ抜いて大騒動を引き起こすから」と。

「大騒動引き起こしてどうするのだ」と言うから「君に決して迷惑はかけない。最悪の場合は、古野というやつはしょうがない。あんな悪徳記者は北京から追放すると言って、君は俺を追っ払えばいいじゃないか。」

そういうことで支那の独立が救えるならいいじゃないか。だから何でもいから、君は会議の内容を細大漏らさず俺に知らせてくれ。それでいいのだ。古野から出たというはずみで明るみにならんとも限らない。そのときは俺を北京から追放すればいいのだ。俺はどこでもぐるぐる回って歩いている。天下周知の事実だからいっこうに差し支えない。あんな野郎が北京にいて列国の歩調を乱すのは誠にけしからん、あいつを追っ払うと言って、君は日本公使館から命令を出させて、日本へ追っ払えばそれで片付く。それで支那の独立が救えれば、こんな大きな仕事はないじゃないか」と言った。その相棒が例の胡霖と呉南如だ。俺が吉田から聞いてきた内容を胡霖と呉南如に話すわけだ。吉田から出ているのはみんな分かっているんだ。

外交団の相談は極秘だから内容が外へ漏れるとは恐らく誰も考えない。それが支那中へどんどん漏れるんだ。きょう外交団の会議があったとなると、明日の支那の全国の新聞にジャンジャン出る。このために起こったその時の支那全土にわたる反英運動というのはえらいものだったよ。学生はワイワイ騒ぐし、あつちでボイコット、こつちでストライキだと言ってる。面白いほどピンピン響くんのだ。吉田も「えらいもんだね」と言ってお口オロしているんだよ。こんなえらいことになるとは思わなかったと言って。

福岡 吉田はそのとき、一等書記官ですか。

佐々木 参事官だ。

古野 吉田は死んじやったけれど吉田、俺、胡霖、呉南如の4人組のあんなことがなければ、支那の姿は変わっていたよ。その時分の外交団というのはいもんだったからね。

佐々木 あの時は支那の鉄道全部を列国で分割管理する案が決まりかけていたのですね。支那全土を分けて取ってしまうということだった。

実に危機一髪だった。4人組がいなかったら、支那の主権はあの時に失われていたわけだ。

大平 その話は長くなるからまた席を改めて。きょうはお疲れのようだから。

(古野氏退席)

胡弓に合わせ京劇の歌

佐々木 それでは日本へ帰ってからの平田さんになつわるお話を。

夫人 勢多さんに時々送られてきたりしましてね。

福岡 僕の外信部時代、平田さんは相当実績があった。奥さんが会社へ月給を取り上げに見えていましたね。

夫人 これは恥ですけども、月給が25日でしよう。3日帰って来ないので。それで私が直接行かないで、甥おいを玄関に行かせて私は離れたところで待っていました。そのころは250円ぐらいもらっていたんです。30円ぐらい私のところに入っただけです。

それで相談したんです。2日も3日も帰って来ないのじゃ、家族が困り抜くということは分かっているだろうから、私が月給の日に社へ行くのは恥ずかしいから月給の日に、子供と私にごちそうしてちょうだい。橋善など天ぷら屋で待ち合わせましようと言っただけです。それはいいだろうと、私は子供2人連れて待っているんですよ。決して時間をたがわず来ましたね。そこでいったん和やかに1杯か2杯飲んで、ご飯を食べ、それから今度は「おまえら帰れ」と言うのです。「親子4人で家に帰ればいいじゃありませんか」と言っても帰らないのです。大森の駅近くの日ごろ寄る所へ月給日に払いをしてこなければならぬ。そのときに私の分をよこすのです。私はそれを握って家へ帰って、子供たちと寝る

んです。

帰らないうちは私が眠れないし、翌日のお仕事に差し支えるので、時間を見計らって私が飲み屋を見に行くんです。早くてもいけないし、遅くてもいけないから、頃合いの時間に見に行けばちゃんと飲んでいるんですよ。「平田先生」なんて言われている。「あんな何の先生なの」と聞くと「先生、先生と言われているが、俺も分からねえんだ」と（笑）。飲み屋も心得ていて「奥さんが来たからもう帰りなさい」と。そうすれば帰って来るんですよ。

あるとき非常に危ないことがあった。大森に「のんべえ横丁」というのがあり、そのドブへ落ちたんです。それこそ上がることができなくなったのです。皆で手を引っ張ったり、頭を引っ張ったりして上げたらしい。家に帰って来たときは一人で寝るんですが、私が黙っていたら、なかなか布団のそばに来ないのです。そのうちにくさい臭いがしたので、これはただ事でないと思っていたら、ドブへ落ちた服を一人で始末しているんですよ。そんなこともあって、飲み屋でも「危ないから奥さん来てください」と言ってくる。飲める間、ずうっとでしたね。いよいよお酒が配給になってなくなったら、そのうちに体が悪くなって、狭心症みたいになったのです。そのときは私が子供を連れてどこかに行ったんです。留守番で一人いるときになったのですね。「お前たちの顔を見ないで俺は死ぬかもしれないと思った」と。それで自発的に控えるようになったし、そのうちにお酒も配給になって飲めなくなりましたね。

大平 どこかへ行ったかと思うと机の下にいたりしてね。その頃「みやこ」という一膳飯屋で、あそこへ2度か3度行ったことがある。やっぱりそうでしたよ。酔っ払うと、あのおとなしい人が「お前ら飯を食え」と、おひつからご飯を手づかみにし、人の口に押し付けたりしてね。そうしていつの間にかいなくなったと思うと机の下に寝ているんですよ。

亀谷 それはやっぱり恐縮しているんですよ。恐縮して誠に何だからというわけで忍術を使う。逃げられた方はびっくりして探すんですよ。「シヤオトンレン」という歌があるんですが、あれをしょっちゅう歌っておりました。極めて小さい声でね。それでちょびりちょびりと飲んでる。夫人 鈴江さんと古野さんはいい友達だと言っていた。実にいい友達で、鈴江さんが胡弓（こきう）を弾くのですよ。そうすると平田が裏声を出して京劇の歌をやり始めるんですよ。

（新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」）

